

BULLETIN
OF
CENTER FOR ARCHAEOLOGICAL RESEARCH
AOMORI PREFECTURE



No. 16

CONTENTS

Norio FURUYASHIKI

Analysis of Designs and Techniques of Stone Circles.

Takashi SAITO

A Study of History of Bipolar Technique and Pi  e esquill  es (Wedge-shaped Stone Tools).

Shigehiko NARITA

Types of Earthen Figures in Hokkaido and Northern Tohoku Region: From the Late to the Last Middle Jomon Period.

Takao NIYYAMA

A Study of Hand-built Haji Wares in Aomori Prefecture in the Heian Period.

Takuji OYU

Artifacts of Wooden Figures Similar to the Oshiragami God from Excavations.

研究紀要

第16号

研 究 紀 要
第 16 号

「環状列石」の設計とその技法について

古屋敷 則 雄（東北町教育委員会）

1 ~ 11

両極打法とピエス・エスキュ（楔形石器）についての研究史

齋藤 岳（青森県埋蔵文化財調査センター） 13 ~ 22

北海道・東北北部における土偶型式－縄文時代中期後葉～末葉－

成田 滋彦（青森県埋蔵文化財調査センター） 23 ~ 32

青森県内における平安時代の非クロ成形環について

新山 隆男（青森県埋蔵文化財調査センター） 33 ~ 44

遺跡から出土するオシラ神類似の木偶

大湯 卓二（青森県埋蔵文化財調査センター） 45 ~ 56

2011.3

March 2011
CENTER FOR ARCHAEOLOGICAL RESEARCH
AOMORI PREFECTURE

青森県埋蔵文化財調査センター

青森県埋蔵文化財調査センター

「環状列石」の設計とその技法について

古屋敷 則 雄（東北町教育委員会）

1節. はじめに

本論の目的は、「環状列石」が共通の目的と方法論に基づいて構築されていることを前提とし、その設計技法を解明することにある。筆者はこれまでに「環状列石」の設計図を求めていくつかの拙論を展開してきた。^(注1) 今にして思えば、それは例え、発掘調査に先立ってグリッドを設定するように、「環状列石」配置に先立つての「下敷き」を考えることでもあった。この下敷きに実例を載せて比較することで「環状列石」のタイプ、及び形態の変遷をも知ることができるのでないかと考えたのである。また、部分的な調査事例からの全容推定も可能となるのではという期待もあった。

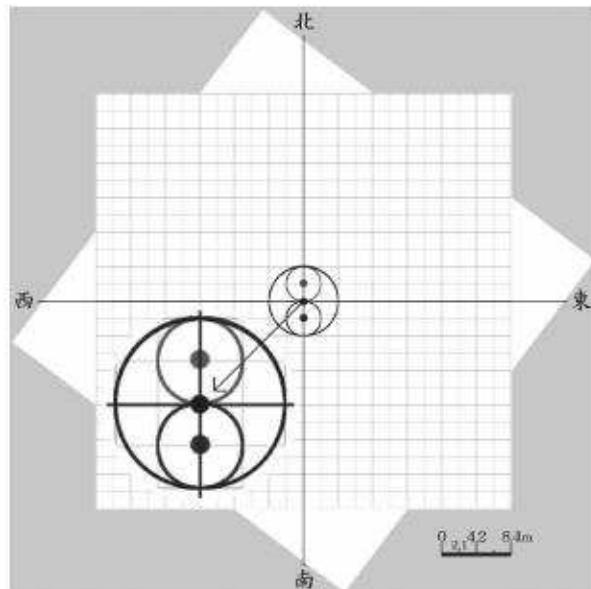
2節. 設計の前に

青森市小牧野遺跡や函館市石倉貝塚においても報告されているとおり、環状列石の作成にあたってはその前段階として適地の選択から樹木の伐採、土木工事等による広場の作成が必要である。あらかじめ明確な設計思想を持って選択されたであろう当該地の整備を終えたならば、いよいよ環状列石の設計・構築である。

3節. 中心部から

まずは中心部を決定する。水平に整備された中央部分で、尺骨のおよその長さ35cmを基準としての6単位、すなわち210cmを「1」として、中心点から南北にこれを半径とする円をふたつ設定する。このことにより、4.2mの場が南北に縦列し、これを直径とする8.4mの中心部が確定する（1図）。実例を見る限り二極は必ずしも南北に縦列するものばかりではないが、大事なことは、中央に二極が置かれるということにある。二極を持つ中心部については、これまでの検証でも再三確認、強調して来た事であるが、今回も実例の提示により説明に代えていきたい。

さて、南北という主軸に対する中心を定め、周囲に基準点を展開していくに当たっては、必要不可欠な技術がある。直角の割り出しである。天文の観察から南北に直交する東西線を得ることは容易いが、それだけでは十分でない。以下、ひとつの視点として古代中国の算法を取り上げ、考察してみたい。



1図

4節 周髀算經と鉤股法

『周髀算經』^(注2)とは、太陽の運行を測定する日時計の棒=髀（ノーモン^(注3)）を使って宇宙の構造（蓋天説）を計算した周代の数学書という意である。実際には天文書という方がふさわしい内容となっている（王雲五主編、周髀算經、四庫全書珍本別編184）。

著者・成立年代共に不明であるが、古代中国、周代から後漢ころまでの雑多な知識がまとめられ、現在の形になったのは3世紀初頭と思われている。

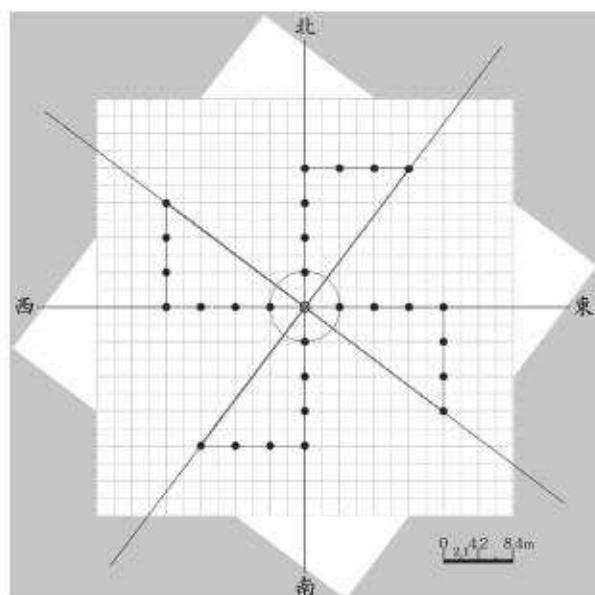
「数の術は、円と方形からなる。直線を折って、幅3、長さ4とせよ。その線の端と端の長さは5になる。形は「円」か「角」かである。数は奇数か偶数かである。天は円の中を動き、それに付随する数は奇数である。地は方形に休らい、それに付隨する数は偶数である。知を知るものは知者であるが、天を知るものは賢者である。知は影より來たり、影はグノモン（ノーモン）より來たる。」

冒頭に以上のような周の周公旦と商高の会話が掲げられ、数学と暦の重要性が説かれた後に、数学・暦学・天文学に必要な知識が述べられる。数学としては円周率が3であること、3辺の長さが3・4・5の比となる三角形は直角三角形となることなどが書かれている。

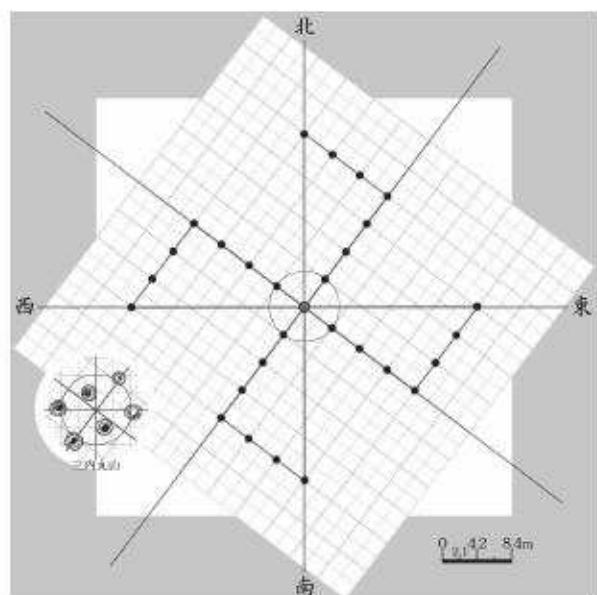
周髀算經そのものの成立年代はさておき、周代からの雑多な知識の一つとして周公と商高の問答に語られた『鉤股の法』について、「その知識」は縄文時代の人々にも良く知られ、活用されていたと筆者は考えている。あるいはそれは大陸起源のものではなく、太陽や月に親しんだ日本独自のものであったかもしれない。縄文の人びとが大がかりな土木工事により水平な広場を作り出さなければならなかつたのは、ノーモンの影の動きを正確に追うためと、もうひとつは水平な場で正確な測距を行うためだったのではと思う。

5節 基準点の展開（基本シートの作成）

では、『鉤股法』を持って実際に基準点を展開してみる。まず、35cmを12単位取った420cmを1単位



2図



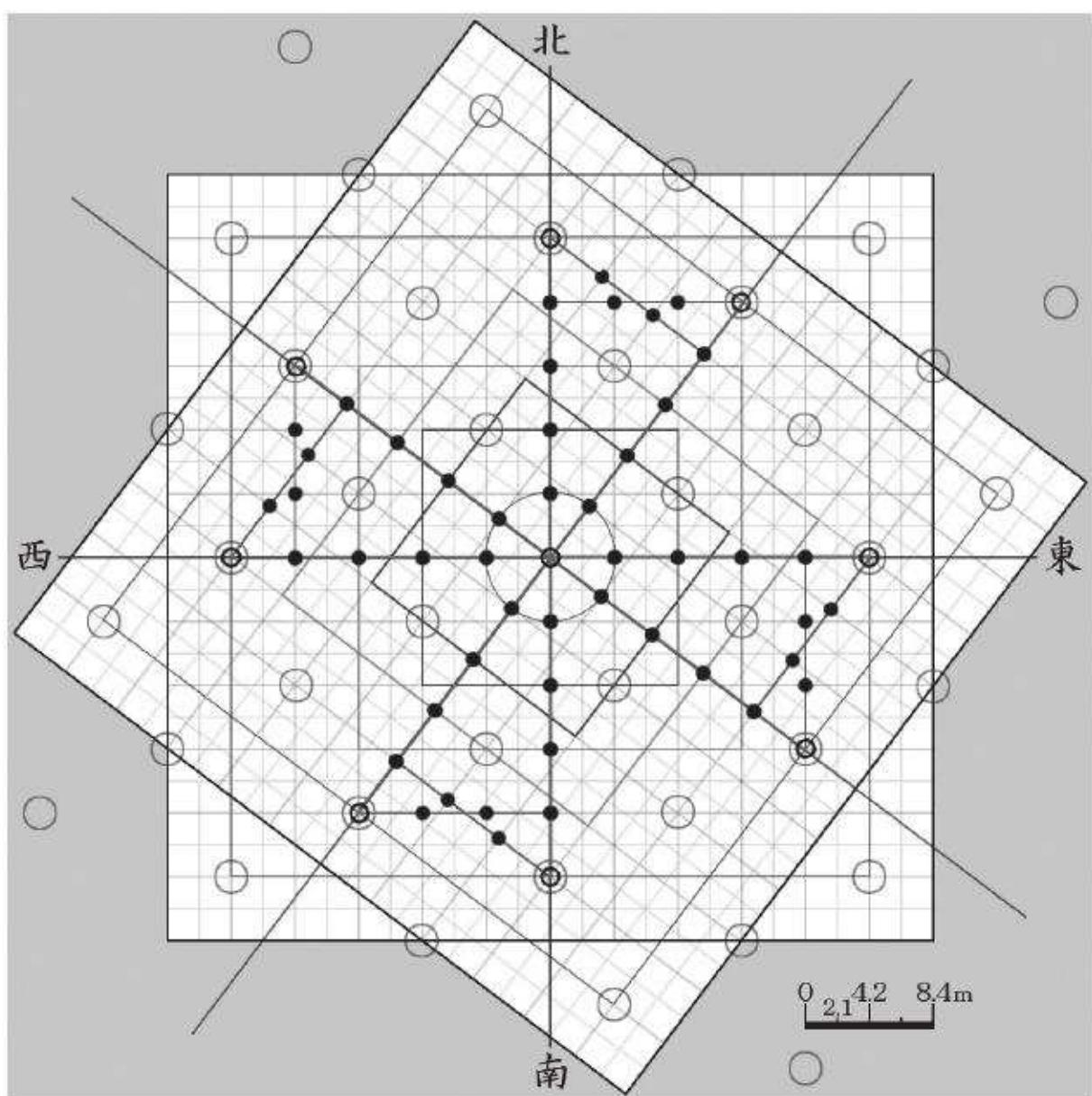
3図

として、これをさらに12単位取ったもの、すなわち、420cm置き12箇所にマークの施された50m40cmのロープを用意する。

まずは中心点で0と12単位、すなわちロープの端端を持ち、3節で定めた中心部の主軸に対して「4単位（股）」もしくは「5単位（弦）」を配し、時計回りに「3単位（鉤）」を取る。

「4単位（股）」を取れば、風車のような左辻の図形を得ることが出来（2図）、5単位を合わせれば、右辻となる（3図）。あとは、直角を挟む両辺の一単位ごとに、効率よくマーキングしていけば良い。5単位を合わせた右辻の方では、主軸となった南北および東西のラインから37度時計回りに回転した直交する2ラインが得られるが、この弦の傾きは、のちに重要な意味を持つ。

単位点のマーキングの結果、東西南北に直交する方眼と、37度時計回りに回転した方眼の2枚が上下にレイヤー構造をもって重なるイメージが見えてきた。これが、基本シート（4図）となる。筆者前稿ではこのまま北を反時計回りに18.5度回し、シンメトリーな基本モデルとして見た。なお、この



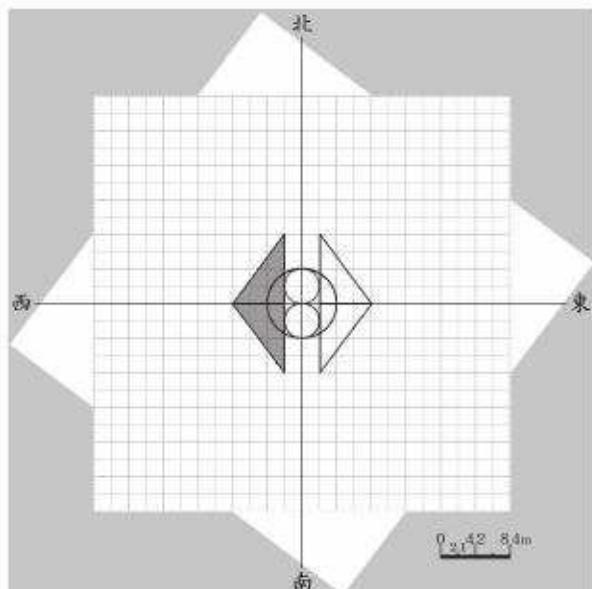
4図

傾きについては、三内丸山遺跡六本柱建物遺構の1：2配置からも導き出せる（3図左下（註4））。

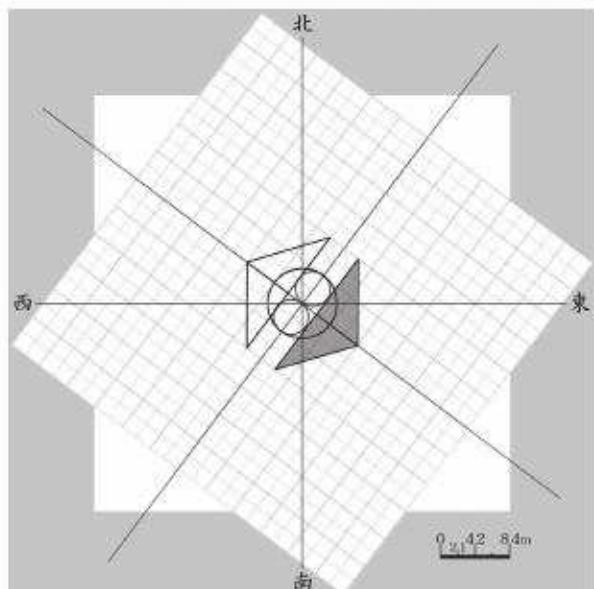
6節. 基本シートの活用

この基本シートに、実際に環状に閉じた遺構空間として周知されている事例を重ねて見るのだが、その前に一例としてひとつの中央部を作出してみたい。今度は35cmを6単位取り、210cm置き12箇所にマークの施された25m20cmのロープを用いる。

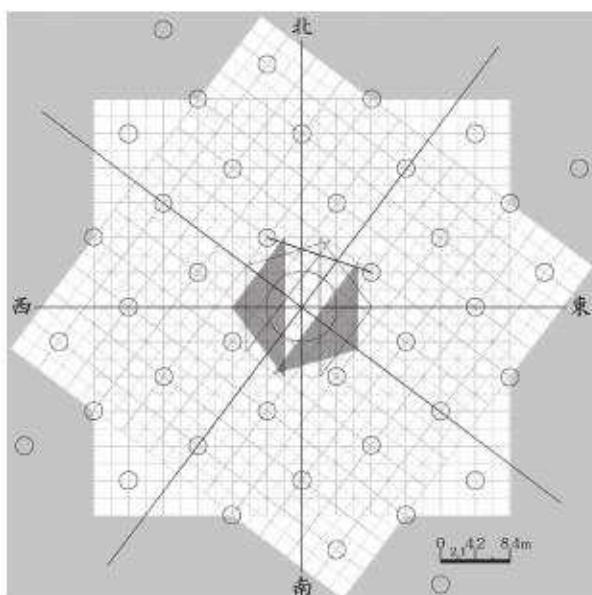
5図、3節で得られた中心部、南北に継列する4.2mの場のそれぞれについて、南北軸に「4単位」を置き、東西軸に「3単位」を見る。このことにより、3・4・5の直角三角形が4個描き出される。ここで、この西側2個の直角三角形について、色を入れて置く。次に、先ほどの弦の傾き角37度を回



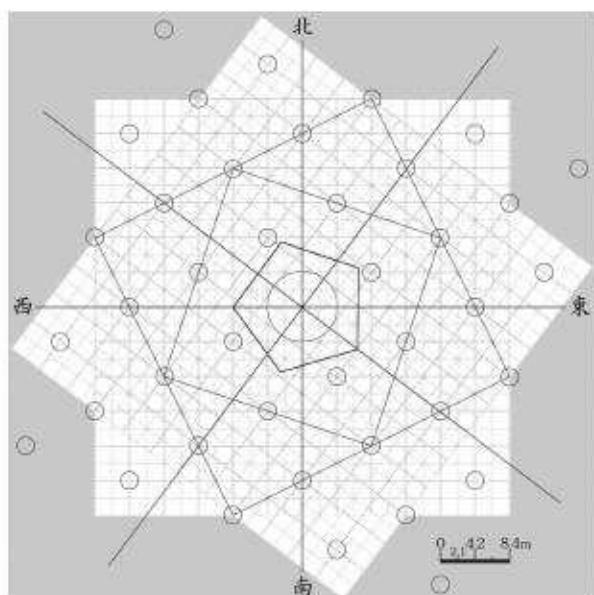
5図



6図



7図



8図

した軸についても同様の事を行う。こちらは東南の2個に色を入れて置く（6図）。

両者を重ねたものが7図である。ここで、先ほどのレイヤー構造の方眼の、「それぞれの直交するポイントが、上下を貫いて重なる場所」に注目したい。この中心部近く、北側の2点を結んでみる。

8図。正五角形とまでは行かなくても、中央部にロープ一本できれいな五角形が描き出された。

ちなみに、正五角形のそれぞれの対角線を結ぶことで得られる「星」は、五芒星とも呼ばれ、後の陰陽五行思想等と関係の深いものもある。^(注5)

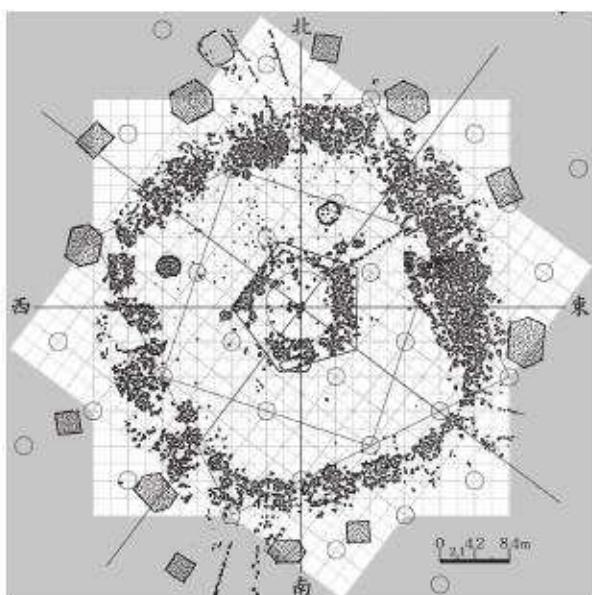
7節. 事例考察

本論では、紙面の都合上以下8遺跡の事例紹介・説明に留めるが、他にも石倉貝塚、伊勢堂岱A,C,Dのほか、大師森遺跡、鷺ノ木5遺跡、西田遺跡、野村遺跡等、多くの環状配置を呈する事例について、また、特に岩手県門前貝塚の弓矢状配石について興味深い結果を得ているが、これらについては次稿に譲りたい。

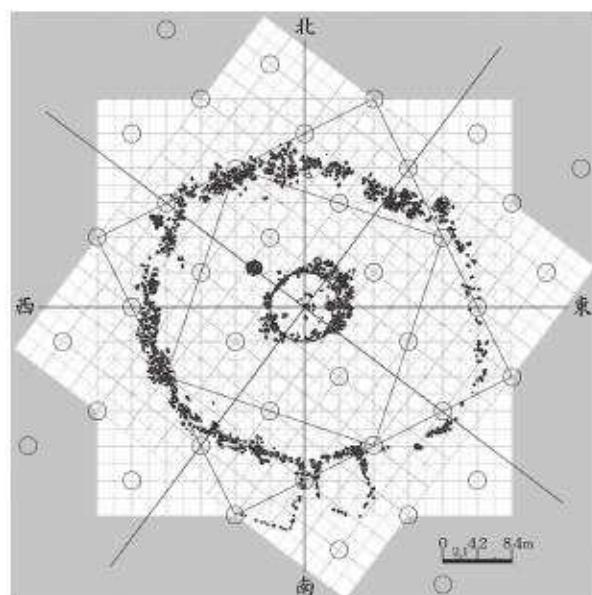
(1) 万座遺跡（秋田県）

9図は、秋田県万座遺跡の環状列石を8図に重ねたものである。中央の五角形に万座の中心部がきっちりと嵌って見える。また、全体のプランも上下方眼を貫いて重なる直交ポイントの描き出す方形の傾きに沿って見える。ひとつ断って置きたいのだが、万座の図に合わせて作図したのではなく、試行錯誤した基本図に万座の実測図が嵌ったのである。

万座遺跡については、この図の観察からさらに多くの事が読み取れるが（北側中心部から夏至日の出方向に、正確に列石が伸びていくこと等）、紙面の都合上、次の遺跡に移りたい。なお、以下いくつかの著名な遺跡群を重ねていくが、改めての個別説明は割愛したい。



9図



10図

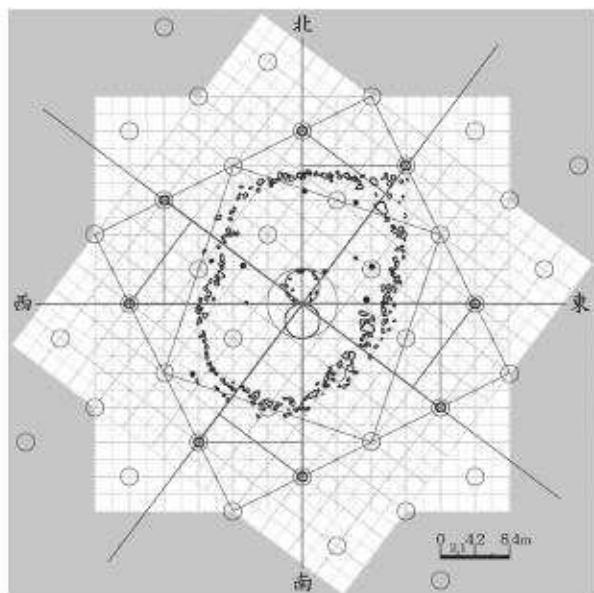
(2) 野中堂遺跡（秋田県）

10図。中心部は万座のような五角形ではない。中心部直径8.4mの円形の周り、何らかの規則性を持って配置されているように見えるがいまひとつはっきりしない。

直列する列石の指向性や、角度を変えるポイントの位置を見る。下敷きとした二つの方眼の、上下を買いて重なる直交ポイントとそれらを結ぶ方形プランのそれぞれに、野中堂の外縁を巡る列石が沿っているように思われないだろうか。

(3) 忍路遺跡（北海道）

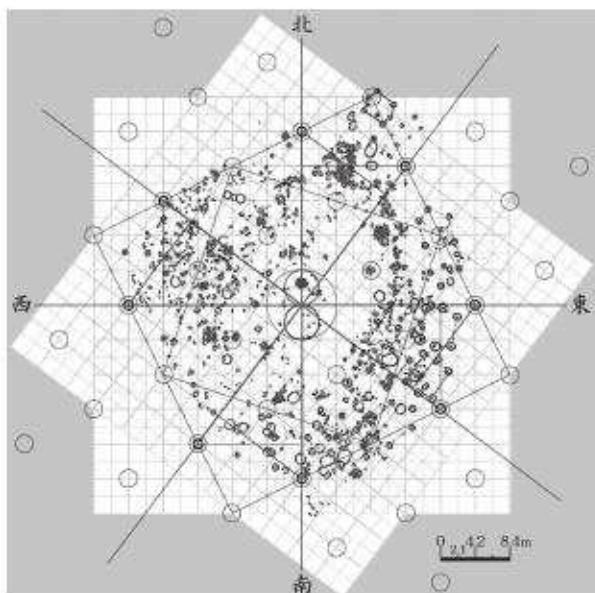
11図。忍路環状列石は、日本の考古学史上初めて学会に報告されたストーンサークルでもある。1961年に国の史跡に指定された。この図を提示したのは、後に続く2遺跡との比較のためでもある。中心部のひとつは北側に置かれ、縦長に巡る列石は、そのままの形で下記2遺跡の配置に納まるのである。列石の変化点や間隔が基本シートの方眼に重なるところも注目される。



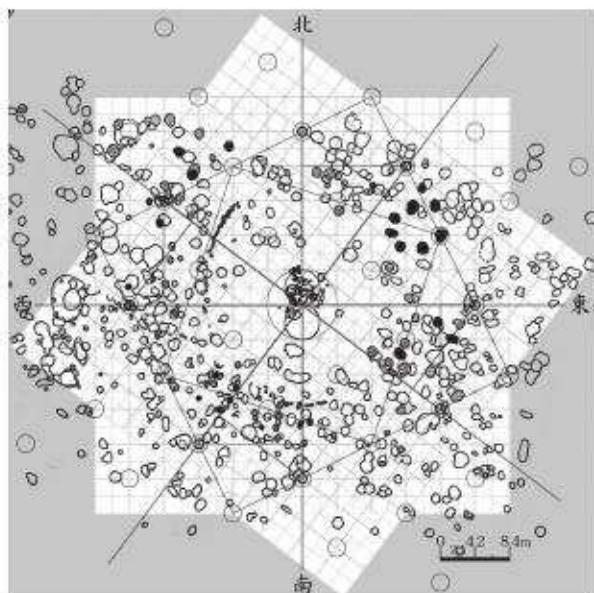
11図

(4) 万座遺跡No.3遺構（秋田県）

12図。万座に隣接する環状配置の遺構である。中心部のひとつは北側に置かれる。縦長、楕円に巡る列石、集石群や遺構群のまわりを掘立柱建物跡が取り囲む構造となる。北北東の集石部分や北東の掘立柱建物跡に注目してほしい。東北東の掘立柱建物跡については、夏至日の出方向に位置するなど二至二分ライン等との関係性が考慮されるが、詳細な分析についてはいずれ稿を改めたい。



12図

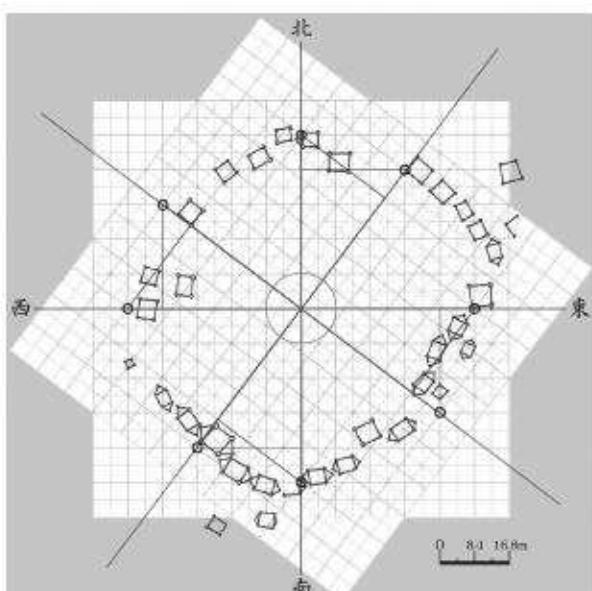


13図

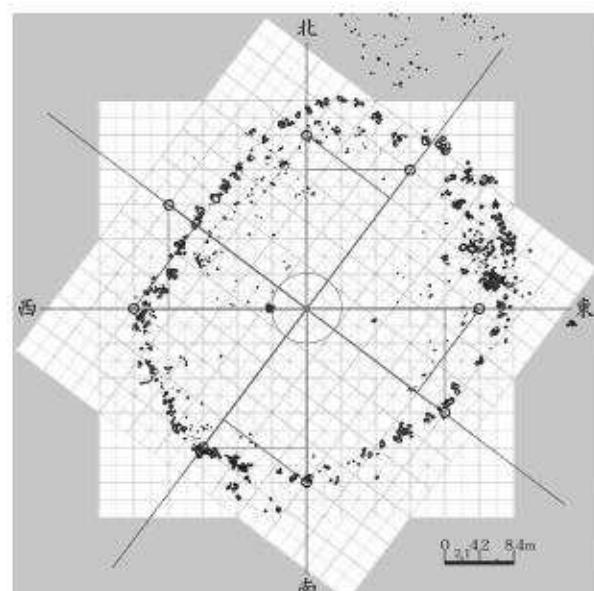
(5) 大石平(1) 遺跡（青森県）

13図。中心部のひとつは北側に置かれ、列石は、中央部を取り囲むところに部分的に確認されているのみであるが、縦長、楕円に巡ると見られ、その周囲を土坑群、掘立柱建物跡が取り囲む構造を持つ。列石の規模、形態等、集石が土坑に変わるとはいえ上記2遺跡と高い親和性を有するよう見えれる。特に、北北東の遺構群の形や東北東の掘立柱建物跡部分等万座No.3遺構に共通する所が多い。

後期初頭からの環状列石外周には、掘立柱建物群の巡る例が多く、その配置の変遷も興味深いところである。



14図



15図

(6) 上野尻遺跡（青森県）

14図。掘立柱建物跡のみが広場を取り囲む構造を持つ。列石は確認されていない。あるいはウッドサークル等のあった可能性も否めないが定かではない。この遺跡についてはスケールを変えて表記している。次に図示する大森勝山遺跡の2倍の規模を持つ。帰属時期は縄文時代後期後葉とされる。3・4・5の直角三角形で単位取りした左辻、右辻のラインが、遺構配置図に良く重なって見える。

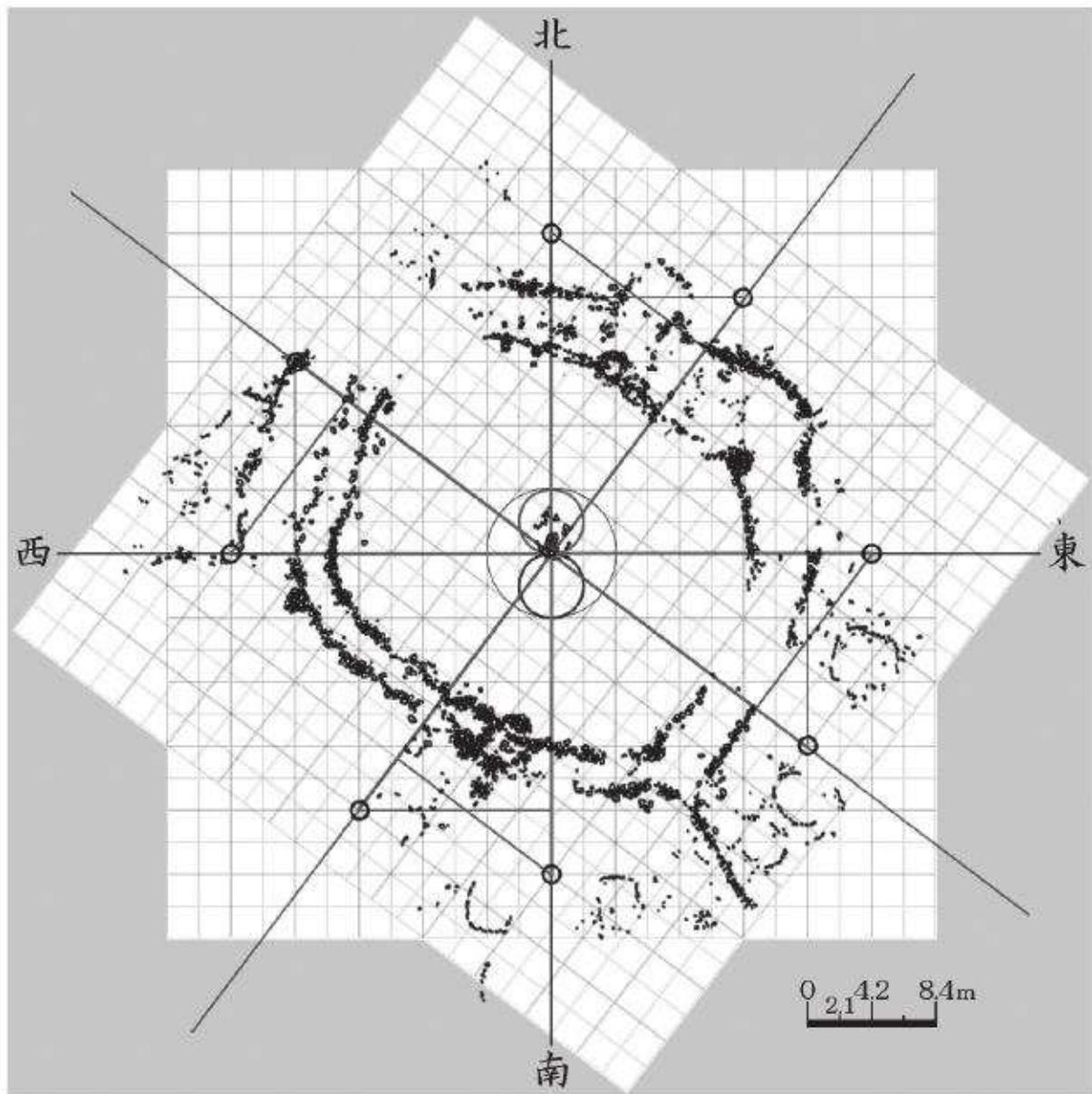
(7) 大森勝山遺跡（青森県）

15図。帰属時期は縄文時代晚期とされる環状列石である。列石のみの確認である。上記、二分の一表記した掘立柱建物跡の配置に、規模、形態が驚くほど似ている。従って、本遺跡もまた遺構配置図に3・4・5の直角三角形で単位取りした左辻、右辻のラインが良く重なっている。

(8) 小牧野遺跡（青森県）

16図。中心部の一つは北側に位置する。列石の線の変化点、及び起点、終点等は3・4・5の直角三角形で単位取りした左辻、右辻のライン・規格に良く重なっている。

これらのことから、傾きの異なる方眼のそれぞれが直交ポイントで上下レイヤーを貫いて重なる場所は、環状列石構築の際の重要な基準点であることが理解される。



16図

8節 おわりに

「縄文幾何学」とでも云う様なものを、飽きもせず続けてきた。^(註5) 環状列石の構築方法について、特にそのグランドデザインの技法と手順についてである。「今までに検出確認されているすべての事例に適合する基本シートがある。」と、函館は石倉貝塚の事例を目にした時の直感が全てであった。以来、何度も「解かった！」と叫びながら、その度に今一つ不完全なものを感じて来た。

それが、2010年10月も半ばに入り展示受付事務の傍らに図を眺めていた時、重要なピースが嵌り核心に近づけたように思えたのである。そのピースとは、「傾きの異なる方眼の直交するポイントが上

下を貫いて重なる場所」である。古来より、「辻」は異界・異層を繋ぐ門とされて来たのも故あること改めて思い至った時である。そこからは、これまでに手にしてきたものが全て一気に繋がったよう感じられている。

さて、本稿で筆者は、まず第1節で前提とした「環状列石がある共通の設計思想に基づいて構築されていること」を、提示した基本シート上での比較により改めて明らかにし、いくつかの設計パターンの存在を確認出来たと理解している。また、縄文時代中期末から後期初頭に現れた「環状列石」が、後期後葉、晩期へといくつかの形態的な変遷を辿っていくところをも示唆出来たのではないかと考える。では実際に、例えば小牧野遺跡の配置手順が判ったのかと言えば、そうではない。個別の環状列石の構築手順は未だに謎である。しかし、とは言え7節(1)の万座中心部の五角形が設計図のラインにぴったりと映る図を見れば、そこにはやはり「何かある」と思われるを得ない。

縄文の環状配置を呈する遺構群は、概ね以上述べて来たような設計・方法論で構築されていると筆者自身は確信している。しかしそれは驚くべきことであろうか。真に驚くべきは、その方法論ではなく、「聖域」を組み上げようとするときの、その背後にあるフィロソフィー、思想にこそあるはずである。そこには、周囲のランドスケープに加え、二至二分や月等、他の天体の運行をも効果的に織り込もうとする意志があったかもしれない。

東日本における縄文の遺跡群を世界に向けて発信しようとする今、その精神文化を知ろうとする試みはますます意義深いものになっていくことだろう。

年来の試行錯誤の末で、ようやく自分なりに得心している。これも忙しい中、筆者の話に付き合ってくださった多くの方々のご意見、ご厚情の賜物であったと思う。全ての方々に、記して感謝いたします。

2011.1.24

(注1) 「環状土坑群・列石の方位と配置の規則性について」 動物考古第6号 1996

「環状列石の構築方法についての一試案」縄文ランドスケープ2005

「環状列石の設計図をもとめて」葛西勲先生還暦記念論文集 北奥の考古学2005

(注2) 「周髀算經」 太陽の運行を測定する日時計の棒「髀」の使用年代が、周から始まるとされているところから名づけられた。中国古来の宇宙観から蓋天説（齊曲状の天が地を覆っている）を唱え、円周率を3とし、3辺の長さの比が3：4：5の三角形は直角三角形となるという「鉤股弦（コウコゲン）」と呼ぶ原理をもとにして、日月の高低や運行に関する計算方法を述べている。主な箇所は戦国末期から前漢の始めの学者「趙君卿」によって現在の形に纏められ註が付けられている。

鉤股弦の原理（ピタゴラスの定理） 「数を取り扱う術は、まる（「円」）と四角（「方」）からでてくる。円は四角から生じ四角はさしがね（「矩」）から生じる。さしがねは、九九・八十一という数の（乗法の）原理から生じる。そこで、さしがねの長さのうちから切りとて、鉤の幅を三とし、股の長さを四とすると、両端を結んだ直角に向き合った対角線にあたる弦は、五になる。（このものを弦として）この弦を一边とする正方形を描いておいて、（それを内接させるように、直角を挟む二辺が三と四となり、対角線が弦にあたるような）長方形の半分のものを（正方形の）外側に描く。他の

辺についても、同じように（正方形のまわりに）ぐるりと同じ長方形の半分のものを描いていって、もう一つの（正方形の）盤を作りあげる。そうすると（もとの正方形の）外側に幅が三、長さが四、弦が五の（直角三角形、つまり）長方形の半分の面積のものが四つ得られる。四九という（外接する正方形である）この盤の広さから、この長方形の二つ分の広さを差し引くと、余りは二五という広さになる（これが内接するもとの正方形の面積である）。このことを長方形を積む（「積矩」）という（したがって、鉤三、股四のとき弦の長さが五になることが証明された）。禹王が天下を統治した（治水や土木事業などの）やり方は、こうした鉤股の法に伴う数値の取り扱いに基づいて得られたものである。

(注3) ノーモンという言葉について調べてみたところ、グノモン (Gnomon) ギリシア語からきたとされ、「事実を知る。観測する。」という意味があった。語源的には「曲尺」のことであるという。また、一定の形を一定の比率で大きくしながらもとの形に付加し、成長、増加させた各々の部分、すなわち順次加えられる奇数のこともグノモンというが、これはその形が「曲尺」の形をとることによるらしい。また、日時計の指針を指してノーモンともいう。このノーモンの高さは伝統的に8尺で、周代では1.6m、隋・唐では2.4mに相当するが、中国暦法の画期となる「授時曆」の作成で知られる「郭 守敬」(元朝に仕えた天文学者、暦学者、水利事業家1231年 - 1316年) は、12m (40尺) という高さの棒 (ノーモン) を立て、その先端の影の軌跡を観測して冬至点を求めたという。正午の影が一番遠くに落ちる点 (冬至) の方が、一番近くに落ちる点 (夏至) よりも精度良く測定できるからである。つまり、天文を観測し、自然の理法、事実を知るためのツールと方法論が、共にノーモンと呼ばれてきたことになる。3~5千年前の古蜀文化遺跡、三星堆文化にみる「通天神樹」、そして世界樹 (ユグドラシル) や「扶桑」伝説等についても、天と地を繋ぎ結ぶ存在として、その関連を考えてみたいところである。

(注4) 北から37度を時計回りに振れば、東までの残り角度は53度となる。これはちょうど、1 : 2の対角線角にあたる。

(注5) 星形は、一筆書きで元の位置に戻り始めも終わりもないことから魔物の入り込む余地がなく、格子は多くの目で魔物を見張るとされることから、古くから魔除けの呪符として伝えられて来た。平安時代の陰陽師、安倍晴明は五行の象徴として桔梗の花を図案化した「晴明桔梗」と呼ばれる五芒星の紋を用いて來たし、ピタゴラスの定理などで知られる、古代ギリシアの数学者、哲学者ピタゴラス (紀元前582年 - 紀元前496年) が組織したピタゴラス学派、ピタゴラス教団と呼ばれる独自の哲学学派は、そのシンボルマークを五芒星としていた。幾何学的には、正五角形の中に黄金比をみることができる。正五角形に対角線を引くと、その線分は互いを黄金比に分割する関係を取る。黄金比で長さを分けることを黄金比分割または黄金分割という。黄金比はパルテノン神殿やピラミッドといった歴史的建造物、美術品の中にも見出すことができる。また、自然界にも表れ、植物の葉の並び方や巻き貝の中に見つけることができるともされる。

(注6) 五芒星、ペンタグラムは、鍊金術(医術・化学)のシンボル、薔薇十字団では薔薇の花弁、陰陽道の晴明紋は桔梗の花弁、五行思想、木火土金水の相互作用と万象の相生相剋等、また、六芒星、ヘキサグラムは、ダビデとダビデの子ソロモンの紋章、易において卦にあらわれる六爻。陰陽の相互作用等と、ピタゴラス、プラトン以降、「神聖幾何学」と呼ばれる系譜が続き、その神秘解釈に拍車がかけられて來た。しかし、ここであえてそのように呼ばないのは、筆者が神秘主義的立場とは一線を画し、呪術的世界觀や過去の宗教の一部とは距離を置いて、縄文のものをそのままに考えてみたかったことによる。それはしかし、個人の神秘体験そのものを否定するものではない。実際、黄金分割やフィボナッチ数、フラクタルの構造を知るなかで得た個人的神秘体験から、一種の哲学が宿る状況は確かにある。

[引用参考文献]

- 「三内丸山の6本柱巨木柱列と二至二分」太田原潤 縄文時代第11号（2000）縄文時代文化研究会
- 「三内丸山VI」青森県埋蔵文化財調査報告書第205集 青森県教育委員会 岡田康博
- 「青森県大森勝山遺跡」「岩木山 岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書」 岩木山刊行会 村越潔ほか1968
- 「縄文への誘い」特別史跡 大湯環状列石 鹿角市教育委員会
- 「縄文人の天体観測予察－大湯環状列石を中心として」 東アジアの古代文化82号 大和書房 富樫泰時
- 「忍路遺跡」資料提供 小樽市教育委員会
- 「大石平(1)遺跡」青森県教育委員会
- 「上野尻遺跡IV」青森県教育委員会
- 「軒を連ねた縄文ムラ」青森平野東部の環状配列掘立柱建物群 「考古学談叢」東北大学大学院文学研究科考古学研究室 須藤隆先生退任記念論文刊行会 編 永嶋豊 2007
- 「小牧野遺跡」発掘調査報告書IV 埋蔵文化財調査報告書第45集 青森市教育委員会 児玉大成1999
- 「石倉貝塚」函館市教育委員会 佐藤智雄1999
- 「伊勢堂岱遺跡」詳細分布調査報告書 鷹巣町埋蔵文化財調査報告書第7集・8集 奥山一絵2001・2002
- 「太師森遺跡」平賀町教育委員会 滝本学
- 「縄文ランドスケープ」小林達雄 編、ジョーネスカジャパン機構 有朋書院 2002
- 葛西 勲「青森県太師森遺跡」 熊谷常正「岩手県門前貝塚」 大工原豊「群馬県野村遺跡」
- 児玉大成「青森県小牧野遺跡」 佐野一絵「秋田県伊勢堂岱遺跡」
- 「縄文ランドスケープ」小林達雄 編 株式会社アム・プロモーション 2005
- 「ノーモンによる南北軸決定制度と国分寺遺跡での活断層による方位変動」 横尾廣光 千葉大学 NII-Electronic Service
- 「周髀算經」 王雲五主編、周髀算經、四庫全書珍本別編184
- 「矩」って何だろう？ 筑波大学大学院教育研究科 山田奈央 <http://math-info.cried.tsukuba.ac.jp/Forall/project/history/2002/gnomon-gnomon-pp2-1.files/frame.htm>

両極打法とピエス・エスキュー（楔形石器） についての研究史

齋 藤 岳（青森県埋蔵文化財調査センター）

はじめに

筆者は平成22年度に、三戸郡階上町の道仏鹿糠遺跡及び隣接遺跡の藤沢(2)遺跡の石器を整理することになった。青森県内で主体となる石材は珪質頁岩であるが、両遺跡では剥片石器の素材として在地石材であるチャートや玉髓、玉髓質の（珪質）頁岩等を用いて、剥片剥離においても二次加工技術としても両極打法は多用されていた。そして搬入石材と考えられる良質の珪質頁岩の石器においても両極打法で打ち割りや加工がなされているものがあった。両極打法の比重が高い石器群のように感じられ、従来から検討されてきたピエス・エスキューと両極石核・剥片についての区分（注1）はもちろんのこと、二次加工のある剥片、削器、石鏃未製品との区分についても不明確に思えてきた。そのため、改めて研究史を振り返り、両極打法と両極剥離痕を持つ石器群のとらえ方を整理する必要を感じたところである。また、多くの人が、筆者と同様に理解の難しさを感じていることを知った。

そこで本稿では、第一に文献を集成し全国的な研究の歴史をまとめることとした。次に青森県内の研究史を報告書での記載を中心に整理した。最後に、若干のまとめ等を述べることとする。なお、当初は青森県内の主要な報告例の一覧表と報告書の書名等についても掲載予定であったが、都合により割愛する。報告書の書名は奈良文化財研究所のホームページの報告書抄録データベース等を参考にされたい。また、引用・参考文献は基本文献リストとなることをめざしたが、報告書・論文のサブタイトル等は一部省略して記載した。

1 両極打法とピエス・エスキュー（楔形石器）についての研究史

ピエス・エスキューは、研究が活発になる1970年代以前に、曾根型石核と呼ばれていたので、最初に触れておきたい。長野県諏訪湖底の曾根遺跡から採集される小型石器が、細石器として旧石器時代と縄文時代をつなぐものとして注目されたことがあり（八幡1936、芹沢1954、藤森1965）、その石核として図示されたこともあった（芹沢1954）。また曾根遺跡で漆黒の黒曜石の小礫から「拇指状石搔」・錐形石器・石鏃が作られていることは報告されていた（藤森1960）。それらの研究をふまえて滝沢浩氏は、曾根型石核を旧石器時代から縄文時代へのうつりかわりの手懸かりとして捉えただけではなく、詳細な観察をも行った。曾根型石核は「高さ数cmから2cmほどの大きさをもっており、打面がなく、側面からみると紡錘形を呈することが特徴である。一端に打撃を加えることにより、石核の上下両端から細石刃様の剥片が剥ぎとられる」とした。また、曾根型石核とその剥片を図示し、「細かく波立ち密集する独特な（中略）リングを持つ剥離面が上下両端から入っている」と述べている。そして「曾根遺跡では、爪形文土器にともなうと考えられている長脚鏃などと数100点の曾根型石核が採集されている。石鏃にのこる第1次剥離面の貝殻状裂痕ならびにリングの状態、石鏃と曾根型石核の石質別によるバーセンテージによると、曾根型石核から得られた剥片を用いて作られている石鏃が

あることが判明している」と述べた(滝沢1964)。両極打法によるリングの特徴をよく捉え、石材との対比を行って両極剥片が石鏃素材となっていることを述べた重要な研究であったが、継承されたとは言い難い。

ピエス・エスキューの名称は、F.ボルド氏の『The Old Stone Age』を翻訳した芹沢長介・林謙作氏(芹沢・林訳1971)が、「*pièce esquillées*に適當な訳語がないということで」「仮名書きで表記した」ことによるという(岡村1983)。また1974年に芹沢長介氏は、石器の種類を解説する中で「上下両端からはしる細長い剥離痕が両面にみられるもの」をピエス・エスキューとし「楔形石器とでも表現すればよいかもしれない」と述べ図の説明で「ピエス・エスキュー(楔形石器)」と記述した(芹沢1974;注2)。

さて、両極剥片は中国の周口店など旧石器時代のなかでも古い段階でみられることが注目されていたが、1973年に小林博昭氏は両極打法に関して製作実験を行った論文を発表する(小林1973)。日本の石器の製作実験研究の論文として松沢亜生氏の論文とともに、その先駆けとなるものであった(鈴木2004)。また同年には旧石器時代の岩手県大船渡市碁石遺跡の発掘調査が行われ、翌年に刊行された報告書では出土したピエス・エスキューが岡村道雄氏や小林博昭氏らによって整理され、打角などの計量データや剥片末端の形状などの観察結果が詳細に記載された(芹沢他1974)。

一方、サヌカイト原産地である奈良県の二上山の旧石器時代の遺跡群でも注目され、「截断面のある石器」として彫器としての役割が想定されたこともあった(柳田1974)。曾根型石核についても押型文期の土器群に濃密に伴う「曾根型彫刻器」として捉え直しが行われたこともあった(森嶋1975)。

そして1976年に岡村道雄氏は、碁石遺跡での研究成果をもとに、それまでの知見を総合した論文を発表する(岡村1976)。岡村氏はニューギニア高地や中国など海外の研究と国内での報告例を紹介し、ピエス・エスキューについて両極打法で二次加工される石器として、骨角器を分割する楔としての役割などを想定した。同論文は、これまで別な名称や意味合いが与えられてきた曾根型石核や截断面のある石器についても、その特徴とされた点を分析し、同類として位置づけた点でも重要である。

一方、阿部朝衛氏は北海道聖山遺跡で詳細な分析を行い、ピエス・エスキューの両極剥離の痕跡を使用の結果としてとらえた(阿部1979;注3)。

サヌカイト製の石器が出土する西日本では、山中一郎氏によって大阪府森の宮遺跡と長原遺跡の報告書のなかで記載されていく(山中1978a・b)。特に長原遺跡では各種計測値をはじめとする詳細なデータが他の石器のものとともに一覧化された。山中一郎氏はフランスにおける石器研究をもとにピエス・エスキューを「一般的には対縁(時に両対縁)に平形両面細部調整をもつ剥片をいう」と述べた(注4)。そして「素材として選択された剥片もしくは石塊(ブロック)に細部調整を施して、その形を意味あるものに変えたもの」である「石器」ではないとした。細部調整をもつが、その形態が定義できるように変えられないため細部調整剥片と呼ばれることになるとしたのである(山中1978a)。

一方、関東地方では田中英司氏は両極打法が石鏃素材の剥離や加工に使用されることに着目した(田中1977・1979)。石鏃などの素材生産・加工としての両極打法は、その後も着目されることになる。

1983年には、岡村道雄氏と阿部朝衛氏によって重要な論文が発表される。岡村氏は国内外の文献を紹介し「両極打法による諸特徴をもった石器を、ピエス・エスキューあるいは楔形石器と呼ぶ」と定

義した。そしてピエス・エスキューが阿部氏の述べた使用の結果なのかどうか、両極石核との違いについてなども検討した。両極剥片が石錐の素材となる例も述べ、「両極打法は、通常剥離では剥離しにくい小原石から剥片をえる場合や、原石を分割して石核や大形石器の素材をえる場合などにも用いられることがある」とした。石核との区分については、海外の研究を踏まえながらその難しさを述べている。そして「両極石核の実態を解明することによって、それとピエス・エスキューとの相違を明らかにしなければならない」とした（岡村1983）。一方、阿部氏は小林博昭氏の製作実験を追試し、国内外のこれまでの研究を整理した。原石を分割し細石刃核の打面とする加治屋園技法、小原石からの石鎌生産、石錐や玉の素材となる角柱状の剥片生産等に両極打法が用いられている例等を詳細に述べ、両極打法が礫の粗割・剥片生産・二次加工の各段階に用いられていることを述べた。そして「このような石器を一個とり出して、石核かあるいはピエス・エスキューかを判断することは困難である」として「個々の一括資料による分析によって検討されなければならない」とした（阿部1983）。石器群全体の中で、両極石核・剥片とピエス・エスキューは区分されるとしたのである（注5）。

これらの論文が発表されて以降、全国各地の発掘調査報告書で、ピエス・エスキューは記述・観察されていくようになる。例えばサヌカイト原産地の二上山北麓の奈良県滝ヶ谷遺跡の報告では、柳田・阿部・岡村氏の研究をふまえて、佐藤良二氏により丁寧な分析が行われた（佐藤他1984）。氏は順目、半順目、ねじれなどのサヌカイトの節理方向と楔形石器素材との関係についても分析している。

その後も、いろいろな知見や研究が蓄積されていく。

地域性や石材環境に関しては、田村隆氏は千葉県佐倉市芋窪遺跡や大林遺跡の楔形石器を中心とした石器群の分析から、在地石材の限定性を背景として小円礫から両極打法により楔形石器と多量の細石片を組織的に生産する「遠山技法」を提唱した（田村1989）。これは房総半島という石材の乏しい地域での石材消費戦略として位置づけられている（国武2004）。大工原豊氏も石材環境の悪い下総台地の両極打法を特徴とする石鎌製作技法として「下総技法」を提唱した（大工原2002；注6）。友田哲弘氏は北海道の上川盆地で近文台産黒曜石の産地周辺で円礫状の小型原石に両極打法が使用されるが、産地から離れるとピエス・エスキューが少ないとして石材環境との関わりで考察した（友田1996）。

二次加工技術では、阿部芳郎氏は「斜刃両極打法」として切断した剥片の斜刃を作業面として両極打法で加工すると貝殻状の剥離となり、石鎌の細部加工に使用されていることを分析した（阿部2000）。これまで石鎌などの二次加工の実験で両極打法では成功しなかった（阿部1983）とされてきた認識を新たにし、石鎌の素材生産から二次加工まで両極打法で行うことができる事を示すものである。阿部氏は後にベンケイガイなどの貝輪製作に「両極敲打法」を見いだしている（阿部2007）。

石器製作実験については研究当初から行われていたが、両極打法に用いられる敲石を含めて報告例が蓄積されるようになっており（小島1997、山口1997、松田1999、御堂島2003、吉田2004、上峰2006など）、打製石斧の製作技術としても研究されている（久保田2004など、伊藤2007）。

そして、石器群の石材・技術全体のなかでの両極打法を位置づけし考察を深める研究が増えていく。宮城県中沢貝塚、岡山県津島岡大遺跡、長野県鷹山遺跡群、札幌市K39遺跡など北海道の縄文時代の研究を代表させて記述する。いずれも両極剥離痕を持つ石器群が石鎌等の素材としても使用されている遺跡のものである。

会田容弘氏は宮城県中沢貝塚の分析で、「ピエス・エスキュー」と「挟み打ち痕ある剥片」と「折

り面調整のある剥片」を分類したうえで、属性の共通性、加工技術の関連性を述べて、これらが石錐や石鏃の未成品となる可能性を指摘して、石器製作技術システムの模式図を作成した（会田1995）。

阿部芳郎氏も津島岡大遺跡の報告で、両極打法が剥片の平面的な形状修正としての剥片分割と、器体断面の調整技術として多用されて効率的な石材利用がなされていることを分析し、節理など特性のあるサヌカイトを素材とした石器群の総体を分析の対象とすることの重要性を述べた（阿部1996）。

黒曜石原産地遺跡である長野県鷹山遺跡群では、1981年に森山公一氏が星糞峠で黒曜石製の「両極石器」とその付随剥離と思われる碎片・小剥片と原石を一括採取し、その観察結果が報告されていた（森山1982・1983）が、1990年代には黒曜石採掘址の調査などを中心とした総合的な調査研究が行われた。星糞峠鞍部では黒曜石製の両極剥離痕を持つ石器が多数出土した。横山真氏は、それらを分類し、フリーフレーキングを含めた黒曜石製石器の全体の工程を復元した。そして、それらが石鏃やスクレイパーの素材となっているものの、星糞峠鞍部では製品が極めて少ないと着目し、中部高地の縄文時代草創期後半の黒曜石原産地遺跡と消費地遺跡を対比させた研究を行った。また、両極剥離痕をもたない細長い剥片も、打点につぶれがあり、線（点）打面になっていることから、両極打法による打ち割りの際に同時に生産されていることも述べている（横山2000）。

高倉純氏は続縄文時代の石器群を、そのライヒストリーの復元という視点から原石段階の石材や大きさなどから系列にわけて、石器製作と変形について述べている。そのなかで、小形の黒曜石を原材とする系列の両極打法との結びつきと楔形石器・石鏃等への変形を述べている（高倉2006a；注7）。

また小畠弘己氏は縄文時代の石器製作体系を、石材の利用性の違いによって、直接打撃と両極打法、切断技術を場面に応じて使い分けしていたフレキシブルなものであったと概説している（小畠2007）。

2 青森県内における研究について

ピエス・エスキューは青森県では1979年に刊行された東津軽郡外ヶ浜町三厩の宇鉄遺跡の報告書から記述していく。青森県立郷土館による弥生時代中期の宇鉄遺跡の報告書で「瑪瑙の細剥片が集中的に51点検出され、それらのなかには両極打法による、いわゆるピエス・エスキュー（pieces esquillees）に相当する」と思われるものがあるとした。同年には弥生時代中期～後期のむつ市脇野沢の外崎沢（1）遺跡の報告も刊行され、両極打法にはふれていないものの、「割石」として瑪瑙の2～5cmの原石と剥片・石核を報告している。接合資料があり原石からの剥片剥離が模式図化された。

また1982年刊行の弥生時代前期のむつ市脇野沢の瀬野遺跡の報告書で須藤隆氏は楔形石器が北海道・東北地方の「縄文時代晚期、続縄文時代、弥生時代にかなり広く認められる」と記述した。

一方、青森県教育委員会の報告書では、1983年に刊行された上北郡野辺地町櫛ノ木遺跡（縄文時代中期；以下括弧内では縄文時代を略して細別時期を記載する）の報告では「ピエス・エスキュー」として「『聖山』（阿部朝衛、1979）のI類dに相当する」と記述した。それ以前では1974年のつがる市木造の亀ヶ岡遺跡（晩期）の報告で図示された刃器のなかに相当するものがある。また、両極打法は意識されていないようであるが、メノウ製等の小型の石錐の製作法を推定するなかで、石核が「ある程度の幅を持っているため垂直に打撃を加え」角柱状の石錐素材を得ていることも推定している。1982年の六ヶ所村発茶沢遺跡（中期末主体で早期～弥生時代）の報告でもピエス・エスキューと考えられるものが搔器や削器として計2点図示されたり、1983年の八戸市鴨平（2）遺跡（草創期）の報告

で爪形文土器にともなう「剥片類（碎片）」として両極剥片と考えられるものが、下北郡東通村銅屋（1）遺跡（前期末～晚期）で両極石核と考えられるものが2点「残核」として図示されるなどした。

1984年には上北郡六ヶ所村弥栄平（2）遺跡（中期末～後期前葉）の報告で「注目されるのは、両極打法によって作出されたと思われる剥片が2点みられた」と記述された。同年の八戸市牛ヶ沢（3）遺跡（中期末～後期初頭主体）の報告でも「両極から打撃痕を有する」石器が1点報告されている。

1986年になるとピエス・エスキューは項目を設けて記述されるようになる。両極打法が特定の石材と結びつくことや、特定の器種の素材として両極打法で剥片が生産されていることも記述されていく。六ヶ所村弥栄平（1）遺跡（中期末～後期初頭）の報告ではピエス・エスキューについて項目を設けて報告している。そしてスクレイバーの項目では、両極剥離による素材か否かで、分類を行っている。「小円礫を、両極剥離によって分割した素材を用い」るⅡ類では、石材は14点のうち13点は玉髓質珪質頁岩であることも報告された。同年の六ヶ所村大石平遺跡（後期前葉）の報告でもピエス・エスキューが詳細に記述された。報告では、岡村道雄氏（1976・1983）の分類基準を引用しながらも、ピエス・エスキューが「両極技法で製作され、両極技法と同じような状況下で使用されたものとすると、上記の分類基準では両極石核との区分の問題が残り、ここでは多分にそれらを含んでいる可能性が強い」と述べている（注8）。八戸市教育委員会の刊行した報告書では、八戸市丹後谷地遺跡の第56号竪穴住居跡内（後期前葉以前）のピット内から「石核1点、ピエスエスキュー2点、2次加工のある剥片3点、剥片74点、計80点」が報告された。一括出土した剥片は両極打法で製作され、径2～4cmの珪質頁岩の小円礫が用いられており、2例の接合品も得られている。剥片は石器の素材として推定されており、「本遺跡からは、この種の剥片を素材としてつくられたとみられる小形の石鏃や、エンド・スクレイバー」が認められることが報告された。

1987年以降になると、これらの石器は青森県内においても広く認知され、県内各地域の各時代の遺跡で報告されていく。名称はピエス・エスキューまたは楔形石器（くさび形石器）で報告者によって異なり、不定形石器として記述している例もある。両極剥片についても「両極技法による剥片」（野辺地町楓ノ木（1）遺跡等）、「両極加撃痕のある剥片」（八戸市田代遺跡等）と名称は報告者によって異なる。報告内容に関しては、遺跡周辺の原石の採取場所が推定され、原石の採取から剥片剥離、石器への加工までの全体像が把握できるような事例、製作道具である敲石・台石と共に土坑墓や土坑など遺構との関係を考えさせる事例が蓄積されていく。石質や技術に着目する全国的な動きと連動するような報告も行われるようになってきた。以下、主な報告例をあげる。

1988年の六ヶ所村上尾駒（2）遺跡（後期前葉）の報告では①CJ-120号土坑から7点のくさび形石器と両極剥片・石核が計86点出土したうえ接合資料が8例あり②周辺の鷹架沼で原石を採取できること③石錐や石籠に両極剥片・石核素材のものがあることなどが報告された。

1989年の東津軽郡今別町二ッ石遺跡の報告では、両極石核等が土坑内（後期前半）から多数出土し、土坑底面から敲石が、周辺から両面に多くの凹みを有する台石が出上した。

1995年の野辺地町楓ノ木（1）遺跡（中期）の報告では、両極技法による剥片が約1,500点出土し、不定形石器の素材となっていることや、遺跡下の近沢川の川底の珪質頁岩の小転石を使用していることが記載された。同年には弥生時代中期から後期の、むつ市川内の板子塚遺跡の報告で、土坑墓・土坑・遺構外から出土した玉髓（メノウ）を主体とした多数の剥片と線状の敲打痕のある敲石・台石が

記載された。

1996年の外ヶ浜町三厩の字鉄遺跡（晩期）の報告では、大洞A式期の瑪瑙の原石および剥片が台石と敲石とともに出土した。剥片の一部は緑色凝灰岩製の玉の穿孔用の石錐に加工されている。

2001年の青森市安田（2）遺跡の報告では、後期前葉の住居跡床面から二つの石器集中地点が確認され玉髓質気味の珪質頁岩の楔形石器と両極打法による剥片の接合資料などが得られている。

2003年の野辺地町有戸鳥井平（4）遺跡の報告では、ピエス・エスキューや両極打法による石核が出土し、接合資料も得られた。それらは石鏃・ドリル・スクレイパーなどの小型石器に対応することや、原石は遺跡付近の海岸で豊富に採取できることも記載された。

2007年の八戸市潟野遺跡（前期初頭）の報告では、石器を石質類型に区分した上で、それぞれの類型ごとに楔形石器の位置づけを考察しており注目される。

なお、時期毎の主要な報告例を述べると、旧石器時代では始良丹沢火山灰（AT）降灰期以降の八戸市田向冷水遺跡の報告が重要である。同遺跡では在地系のチャートなどの石材とともに搬入品と考えられる珪質頁岩の石刃や縦長剥片などを素材にした両極打法による加工や剥離が多数行われている。1992年に報告された外ヶ浜町蟹田の大平山元II遺跡においても両極石核や両極剥片が報告されている。縄文時代では、草創期の八戸市櫛引遺跡例をはじめとして各時期・各地域に見られる。しかしながら斎藤康司氏が青森県内の剥片集中遺構を集成した際に「中期末から後期前葉の時期には玉髓や透明感のある「玉髓質珪質頁岩」が小型の両極剥片として多く出土することが知られている」と述べたように（斎藤2006）、縄文時代中期末の大木10式併行期から後期前葉の十腰内I式期にかけてが特に多い。弥生時代では、上北郡横浜町モダシ平遺跡や八戸市櫛館遺跡など後期の天王山式期に多い。古墳時代でも八戸市田向冷水遺跡の黒曜石製の石器に両極打法は使用されている（高橋2006）。

そして、地域的には上北郡の六ヶ所村や野辺地町、八戸市周辺の遺跡で報告例が多い（注9）。

3 まとめと今後の課題について

両極打法と、両極剥離痕を特徴とするピエス・エスキューについては全国的な研究として①1970年代からの本格的な研究②海外の研究の引用と紹介③研究初期からの各種計測値・観察データをもとにした研究④石器製作実験と海外文献を含めた先行研究の追試・検証⑤小形の黒曜石原石や板状で節理を持つサヌカイト製の石器群との結びつきへの着目⑥石材原産地の遺跡での研究の深化⑦旧石器時代の石器としての研究が先行⑧東北地方や関西地方、長野県での活発な研究⑨1980年代半ばまでピエス・エスキューと石核との区分を課題としてきた⑩1980年代半ば以降、石器群全体の石材・技術のなかで両極打法を位置づける研究が増えたことがあげられる。なお、⑩に関しては、1980年代の中頃から石器のライヒストリーへの視点を持つ分析（阿子島1984など）や、「技術的組織」の紹介（阿子島1989）が行われており、1990年代には「動作連鎖」についても紹介されるようになった（西秋1998）ことなど海外の研究も影響していると考えられる。

青森県内における研究史をまとめると①1979年からの報告書記載②弥生時代の研究で先行③1986年からの総合的な分析・記載、資料の蓄積④縄文時代中期末から後期前葉など特定の時期に多用され、玉髓や透明感のある「玉髓質珪質頁岩」という特定の石材との結びつきが注目されてきたことがあげられる。

青森県内での今後の課題はビエス・エスキュー等の地域性と時代性の正確な把握である。例えば上北郡六ヶ所村では大規模開発に伴い各時期の資料が得られているが、縄文時代中期末や後期前葉など特定の時期に在地の小原石が、そして両極打法が多用されている。石材流通の変化や石器製作技法の変化も関係するだけに、時期別・地域別に状況を把握することが重要である。また、珪質頁岩の原産地周辺の東津軽郡蓬田村山田(2)遺跡の2010年の報告では「両極技法で割られた小礫の剥片」が「本遺跡からは極めて少ない出土である」と記されている。珪質頁岩原産地のある下北地域北西部でも報告例はほとんどない。日本海沿岸付近では前期中葉の鰺ヶ沢町杢沢遺跡を除くと報告例は少ない。定形石器が多量に出ている遺跡では掲載の優先順位が下がる可能性があり、報告者の考え方によっても、そして報告年代によっても左右されることも踏まえながら把握につとめることが必要である。

次に、ビエス・エスキューと両極石核の区分について見通しを述べたい。多くの遺跡ではフリーフレーキングと両極打法を場合に応じて使い分けしていたことが想定されるが、津軽地方や下北地方などの珪質頁岩の産地周辺などでは、小型の原石利用や楔としての加工・使用などを除いては、その役割は小さなものと考えられる。そのため、それらの地域では、ビエス・エスキューと両極石核・剥片は区別可能な遺跡が多いと考えられる。そして上北地方や八戸市周辺などで在地の小型の原石が使用され、剥片の生産から二次加工までの石器製作の技術的な基盤として両極打法の比重が高い遺跡では、出土点数も多く、両者の明確な区分が困難なケースが予想される。また、それらの地域では、階上町道仏鹿棟遺跡のように打製石斧の一部が敲打・研磨され磨製石斧となる例など器種分類の難しい資料が他にも存在する場合があり、石質に着目しながら石器全体を見渡すことが特に必要になるとを考えられる。制約された時間のなかで、分類と記述を工夫することが必要である。

おわりに

筆者にとって両極打法に関する石器への関心は、大学の卒業論文で北海道せたな町の瀬棚南川遺跡の石器群を取り扱い、両極打法によるメノウ製の石錐や、両極打法で使用された特徴が顕著に残されている敲石を観察したことに始まります。その後、平成5年に両極打法によって黒曜石製の剥片が生産されている弘前市森田(5)遺跡を調査し、帝京大学に阿部朝衛先生を訪ね丁寧なご教示をいただいたことが関心を持ち続ける源となりました。また佐々木雅裕氏からもご教示を受けました。深く感謝申しあげます。

(注1) 筆者は以前、青森市三内丸山遺跡の出土石器の報告を担当した経験を持つが、両極石核及び両極剥片とビエス・エスキューを次のように区分していた。両極石核は①剥離が一方向であることが多い②生産された剥片が石器に利用されていると考えられる③玉髓・玉髓質珪質頁岩・黒曜石という石材であることが多く、珪質頁岩でも礫皮を残すなど小型原石を素材としていることがわかるという点をもとに認定した。そして両極石核と両極剥片の区分はバルブがボジかネガかの区分を基本とし、それらが不明確なものについては厚さを加味して区分した。ビエス・エスキューは①剥離が二方向になることが多く②生産された剥片は石器に利用されていないと考えられ③珪質頁岩が多用される遺跡だけに、より割れやすい黒曜石は例外的なものを除き使用されない④刃部とみなしうる刃を持ち、工具としての役割が想定しうるものとして両極石核及び両極剥片と区分した。

(注2) この文献により日本語の名称である「楔形石器」の呼称も一般化していったものと思われる。

なお、町田勝則氏は「*pièce esquillée*（ピエス・エスキュー）が世界史の中でAurignacien（＝オーリニャック期）に多出する資料として限定され、日本のそれとは何ら系統関係が組まれてないこと、そして*rectangulaire*（長方形）や*carré (e)*（正方形）のように規格性の高い資料は縄文時代（少なくとも早期）には含まれないことなどから」楔形石器の名称が適切としている（町田1986）。

本稿では、ピエス・エスキューの用語を用いることを基本とし、研究・報告事例の記述にあたってはその文献で用いられている用語を適宜使用した。

（注3）この分析は引用されることが多く岡村道雄氏の論文（1979・1983）とともに大きな影響を与えることとなった。なお岡村道雄氏と阿部朝衛氏の見解の細かな相違については吉田政行氏が比較検討している（吉田2004）。また阿部朝衛氏は末端が点状となるものなどを碁石遺跡で記述されたスパールに替えて「碎片」とした。碎片は刃部を持つものを含めている。用語としても概念としても重要な問題提起であったが奈良県滝ヶ谷遺跡で楔形石器付隨物という名称で分析されるなどしたほか一般には定着しなかったといえる。碎片という用語も一部の報告書（森嶋・岡村1987など）を除き定着しなかったといえる。

なお、その後の新潟県新発田市中野遺跡の報告で阿部氏は楔形石器を「四辺形の平面形を基本とし、縦断面形が凸レンズ状の小形の石器で、両極打法によって製作・使用されたもの」とした（阿部1997）。使用の結果としてのみならず、製作されたものも楔形石器としていることに注目したい。

（注4）ピエス・エスキューについての見解は岡村道雄氏、阿部朝衛氏、山中一郎氏に限っても二次加工された工具、使用痕のある剥片石器、細部加工された剥片と異なるものであった。そして碁石遺跡での分析をはじめとして石核とは異なるものとして捉えられてきた歴史があるといえるだろう。山中一郎氏は、「ピエス・エスキューは、剥片に平形・両面細部調整があるものに限られるべきである。台石上に石核が置かれて、いわゆる挟み打ちが行われた結果、ピエス・エスキューに似た石核が残る。剥片素材の石核の場合はピエス・エスキューと混同する恐れがある」と述べている（山中1994）。

（注5）石器群全体のなかで両者を区分した例として、阿部朝衛氏による新潟県中野遺跡の石器の報告（阿部1997）があげられる。剥片石器の石材別の数量・重量を調べ、石材ごとの原石の大きさや対応する石器を調べ、石器群全体の姿を明らかにしたうえで、楔形石器と両極石核を区分している。

（注6）これらの研究は良質な珪質頁岩には恵まれていない八戸市周辺などで石材環境との関連を考えるうえでも有益である。

（注7）高倉氏は同著で「両極剥片については、Andrefsky（2005）が圧縮型の力によって打ち割られた剥離物、という定義を与えている」と紹介している。

（注8）報告例をみると、岡村道雄氏の定義（岡村1983）をもとに両極打法による痕跡をもつものをピエス・エスキューや楔形石器として一括して記述することが多いようと思われる。また、課題とされた両極石核との区分については、注意している報告書と、そうではないものがある。いずれにしても、多くの報告者は自らがピエス・エスキュー（あるいは楔形石器）と記述する石器の中にも両極石核・剥片・石器未製品等を含む可能性が排除できないと認識していると思われる。2000年代に入って「楔形石器の機能については、道具と石核という二つの可能性が考えられる」（竹岡2003）とする記述もある。

（注9）岩手県ではピエス・エスキューについて、相原康二氏は弥生時代の石器研究で、執筆時の知見から谷起島式・山王Ⅲ層式・二枚橋式などの時期に「限定して存在すると考えられる。地域的偏在性を示す可能性がある」とした（相原1989）。岩手県北への偏在性は、縄文時代前期初頭の洋野町ゴッソー遺跡例や、二戸市馬立1遺跡で縄文時代後期前葉の住居跡内からチャート製のものが多数出土していること、同時期の久慈市平沢1遺跡例などからも確かである。また、縄文時代に「岩手県北部では後期以降奥羽山脈産の頁岩が少なくなり、代わって在地産のチャートの小円礫を素材とする石器が増加する」という指摘（熊谷2002）があり、八戸地域と共通しているといえる。

引用・参考文献

- 相原康二1989「岩手県内における弥生時代の石器組成について」紀要IX 1~24 (財) 岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター
- 会田容弘1995「東北地方縄文晩期の石器の諸問題」『縄文時代晩期貝塚の研究2 中沢貝塚II』
- 阿子島香1984「不定形石器分析の視点」文化 47-3・4 24~45
- 阿子島香1989『石器の使用痕』ニュー・サイエンス社
- 阿部朝衛1979「ピエス・エスキュー（楔形石器）」「鉢下聖山遺跡」七飯町教育委員会 153~159
- 阿部朝衛1983「バイボーラーテクニックの技術的有効性について」『考古学論叢』 芹沢長介先生還暉 記念論文集刊行委員会 東出版寧楽社 199~231
- 阿部朝衛1997「剥片石器」北越考古学 第8号 55~64
- 阿部芳郎1996「縄文後期のサヌカイト製石器群にみられる剥離面構成と技術」『津島岡大遺跡7 - 第11次調査 -』 28~40 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 阿部芳郎2000「晩期の石器製作作業の復元とその背景」文化財の保護第32号 22~34
- 阿部芳郎2007「内陸地域における目輪生産とその意味」考古学集刊 第3号 43~64
- 伊藤博司2007「打製石斧の製作－駒木野遺跡出土の石器群を中心に－」『縄文時代の考古学 6 ものづくり－道具製作の技術と組織－』 15~24 同成社
- 上峯篤史2006「両極打法による剥片剥離実験－異種剥離方法の同定を基礎とした資料体作成にむけて－」旧石器考古学68 17~27
- 岡村道雄1976「ピエス・エスキューについて」『東北考古学の諸問題』 77~96 東北考古学会
- 岡村道雄1979「縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例－その1－」東北歴史資料館 研究紀要 第5巻 1~19
- 岡村道雄1983「ピエス・エスキュー、楔形石器」『縄文文化の研究 7 道具と技術』 106~116
- 小畑弘己2007「剥片剥離技法と石材供給」『縄文時代の考古学 6 ものづくり－道具製作の技術と組織－』 35~43
- 角張淳一2000「統・石器研究についての感想」東京考古18 46~70
- 角張淳一2000「長野県水遺跡出土の剥片石器の分析」東京考古18 93~104
- 加藤学2006「妙高山麓における縄文時代中期前葉の玉髓製小型石錐－和泉A遺跡下層・大久保遺跡出土資料の使用痕観察を中心に－」古代第119号 1~23
- 熊谷常正2002「岩手県」『日本考古学年報53 (2000年度版)』 123 日本考古学協会
- 国武貞克2004「旧石器時代の石器変形過程の地域事例」月刊考古学ジャーナル512 12~15
- 久保田正寿2004「実験からみた敲打技法－打製石斧の製作技法の復元に向けて－」『石器作りの実験考古学』 147~172 学生社
- 小島隆1997「凹石・多孔石考」三河考古10 67~90
- 小林秀行・賛田明2007『県道諏訪茅野線建設埋蔵文化財発掘調査報告書－茅野市内－駒形遺跡』(財) 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
- 小林博昭1973「バイボーラーテクニックについて－実験的方法からの研究－」月刊考古学ジャーナル78 8~13
- 小林博昭1984「バイボーラーテクニック」月刊考古学ジャーナル229 2~6
- 斎藤康司2006「青森県内における剥片集中遺構について」『新田遺跡II』 166 青森県教育委員会
- 佐藤良二他1984『二上山北麓石器製作遺跡の調査』奈良県立橿原考古学研究所
- 三宮昌弘・山内基樹2002「河原城遺跡石器集中部出土の楔形石器」大阪文化財研究第22号 41~48
- 鈴木美保2004「研究史にみる石器製作実験－理論・方法、今後の展望－」『石器作りの実験考古学』 13
- 芹沢長介1954「関東及中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察」駿台史学第4号 65~106

- 芹沢長介・林謙作訳1971『F.ボルド著 旧石器時代』平凡社
- 芹沢長介・岡村道雄・戸田正勝・小林博昭1974『碁石遺跡』大船渡市教育委員会社会教育課
- 芹沢長介1974「ピエス・エスキュー」「石器と自然石」「古代史発掘1最古の狩人たち」76、141~148
- 大工原豊2002「南関東における縄文前期後半期の黒曜石石器群の流通」國學院大學考古学資料館紀要 第18輯 69~104
- 高倉純2006a「石狩低地帯北部の続縄文時代石器群」「ムラと地域の考古学」147~171 同成社
- 高倉純2006 b「北海道の続縄文時代石器群における両極打撃法の意義」月刊考古学ジャーナル547 16~19
- 高橋哲2006「田向冷水遺跡出土黒曜石製石器の使用痕分析」「田向冷水遺跡II -第一分冊 本文編-」69~85
- 滝沢浩1964「本州における細石刃文化の再検討」物質文化3号 1~24
- 竹岡俊樹2003「楔形石器」「石器の見方」109~111
- 田中英司1977「縄文時代における剥片石器の製作について」埼玉考古 33~47
- 田中英司1979「縄文時代の剥片石器製作」「風早遺跡」187~190 庄和町風早遺跡調査会
- 田村隆1989「第2 黒色帶中の石器群」「佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書1」568~574
- 友田哲弘1996「小型原石産出地における石材の活用について -上川盆地の遺跡における「ピエス・エスキュー」を例に-」北海道考古学 第32輯 63~73
- 西秋良宏1998「石器製作技術の研究と動作連鎖」「石器研究入門」13~14 クバプロ
- 町田勝則1986「楔形石器の分類」東洋文化研究 第6号 1~11
- 町田勝則1996「石器の研究法 -報告文作成に伴う観察・記録法①-」「長野県の考古学」139~171
- 松田順一郎1999「楔形両極石核の分割に関する実験」「光陰如矢 -荻田昭次先生古稀記念論集-」113~134
- 藤森栄一1960「諏訪湖底曾根の調査」信濃12巻7号 371~383
- 藤森栄一1965「中部地方南部の先土器時代」「日本の考古学 I 先土器時代」264~283
- 御堂島正2003「石器製作の使用痕 -トラセオロジーの視点から-」月刊考古学ジャーナル499 12~15
- 森嶋秀一・岡村道雄1987「楔形石器(ピエス・エスキュー)」「里浜貝塚III」20~21
- 森嶋稔1975「曾根型彫刻器」考」長野県考古学会誌21号 38
- 森山公一1982「小県郡長門町星糞井採集の両極石器と剥片群」上小考古12 4~5
- 森山公一1983「星糞井遺跡の両極石器について」しなのろじい200 44~51
- 柳田俊雄1974「截断面ある石器」「ふたがみ 二:山北麓石器時代遺跡群分布調査報告」163~173
- 山内基樹2003「近畿縄文時代早期石器群の技術的一様相 -特に両極打撃について、河原城遺跡出土接合資料をもとに-」利根川24・25 79~87
- 山口将仁1997「高知県下の旧石器と楔形石器(2)」旧石器考古学55 51~59
- 山中一郎1978a「森の宮遺跡出土の石器について」「森の宮遺跡 第3・4次調査報告書」124~147
- 山中一郎1978 b(1982改訂)「長原遺跡出土の石器について」「大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告」163~191
- 山中一郎1982「石器遺物」「大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告II」158~204
- 山中一郎1983「石器製作技術と原材料」「大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告III」203~214
- 山中一郎1994「大阪府平野区長原遺跡出土剥片の分析」「石器研究のダイナミズムーボルド型式学の革新のために-」112 大阪文化研究会
- 八幡一郎1936「信州諏訪湖底「曾根」の石器時代遺跡」ミネルヴァ1~2 (『八幡一郎著作集第2巻』112~120 1979 雄山閣)
- 横山真2000「両極剥離痕を持つ石器」「遺跡内における石器製作工程の復元」「縄文時代草創期後半における黒曜石製石器の生産形態 -中部高地を例に-」「長野県小県郡長門町 鷹山遺跡群IV」117~127、158~161、197~206 鷹山遺跡調査団
- 吉田政行2004「両極剥離技術と楔形石器」「石器作りの実験考古学」94~109 学生社

北海道・東北北部における土偶型式

－縄文時代中期後葉～末葉－

成田 滋彦（青森県埋蔵文化財調査センター）

趣旨

今回の論考は、青森県を中心とした縄文時代中期後葉～末葉にかけての土偶を概観する。本県では土器型式の議論は活発であるが、土偶型式の研究は活発ではないその事は数の少なさも一因であろう。新たに共伴関係を中心として土偶形式を設定（堀合土偶型式・天戸森土偶型式・一本松土偶型式）し、型式内における形態の三要素（無脚タイプ・有脚タイプ・省略形タイプ）のタイプが存在している事を指摘したい。また、当該期における土偶減少は、東北地方では三角形土偶、北海道では岩偶の省略形タイプが増加し他のタイプが減る傾向を示した。

1. 中期後葉～末葉の土偶研究史

円筒上層期以降の土偶の研究は、江坂輝弥氏が1960年に発表した円筒上層期の土偶を第1類土偶とし、それに後続する土偶として最花遺跡から出土の土偶を位置づけたのが初まりと思われる（江坂1960）。青森市三内沢部遺跡（青森県1978）では、円筒系の土偶と大木系の土偶に二分して記載した。その後、1981年に鈴木克彦氏は、縄文時代中期の土偶を前半と後半に大別し、後半の土偶を更に中葉以降及び末葉と二分している（鈴木1981年）。村越潔は『円筒土器文化』を発表し、その中で土偶に関して江坂氏の考え方と同調した意見である（村越1984年）。

1992年に国立歴史民俗博物館で刊行した『土偶とその情報』（国立歴史1992）は、全国の土偶を各県毎に記載している。北海道では、長沼孝氏（長沼1992）が中期中葉～後半の時期の資料20遺跡の26個体を提示した。秋田県では富樫泰時氏・武藤祐治氏（富樫・武藤1992）が東北地方北半部、大木8b・9式の天戸森遺跡及び大木10式の本道端遺跡出土の土偶報告をおこなっている。また中期後葉では、円筒土器様式の伝統をもつ土偶と、両者の特徴を合わせ持つ土偶の二者の存在も指摘した。1999年には鈴木克彦氏が土器型式に沿った土偶変遷を発表した（鈴木1999）。1類～4類と土器型式毎に土偶を分類している。このことは円筒上層期以降の数少ない土偶を用いて、土偶編年を組み立てた事は評価すべきである。小笠原雅行氏（小笠原2002）は青森県史において三内丸山遺跡を分析し、

東北地方南部土器型式	東北地方北部土器型式	北海道道南部土器型式	土偶型式
大木8a	円筒上層e	見晴町	石神土偶型式
大木8b	櫻林	大安在B	堀合土偶型式
大木9	最花	ノダングII	天戸森土偶型式
大木10	大木10式併行期	レンガ台	一本松土偶型式

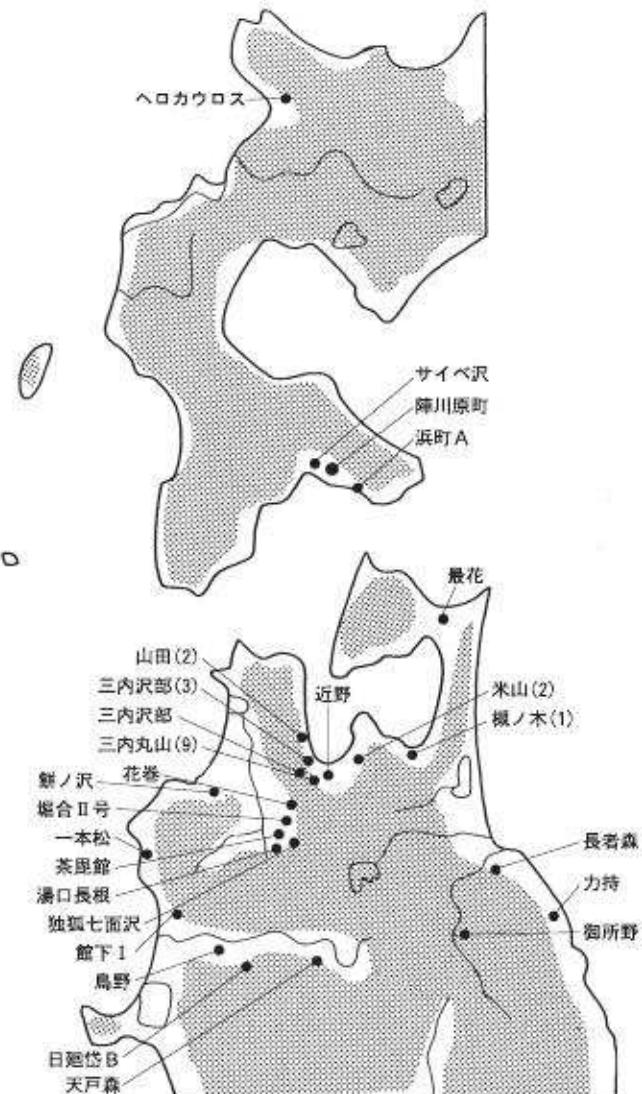
第1表 中期後葉～末葉土器編年表

円筒土器上層以降の『…櫻林式期のものは、角状に突き出した頭部、直線的な腕部、横位と渦巻状の沈線が施文された胸部などが特徴としてあげられる…』^(注1)として記載し、最花遺跡の土偶を櫻林式期に含めており、鈴木報告の延長と考えられる。

2. 地域区分と土器型式（第1図）

今回対象とした区域は、東北地方北部地域を秋田県では米代川流域、行政区区分で能代市・北秋田市・鹿角市等地域である。岩手県では馬淵川・新井田川・安比川流域であり、行政区区分では二戸市・一戸町・久慈市等である。北海道では噴火湾の森町から日本海岸の泊地区のラインを一つの地域区分とした。この地区は、縄文時代前期中葉～後期中葉にかけての間、同一型式土器を出土する地域といえる。

今回の土器型式の筆者の考え方は、第1表のごとく、東北地方と北海道地方では、土器型式を異にする。東北地方北部では円筒上層e式以降、櫻林式→最花式→大木10式併行期と三区分に理解し、北海道道南部では見晴町式（円筒上層e式）以降、大安在B式→ノダップII式→レンガ台式と、余市式の影響を受けた土器型式が存在する。東北地方・北海道の土器型式の縦軸と横軸の関連は第1表を参照していただきたい。



第1図 掲載遺跡

3. 土偶型式と指標となる事例

土偶型式を設定するにあたっては、土偶がすべて整っている土偶を命名の土偶型式とした。そのため出土量が多い遺跡、例えば鰺ヶ沢町の餅ノ沢遺跡（青森県2000）より出土量が少ないが全体の形状が整っている深浦町一本松遺跡（深浦町1980）の土偶を土偶型式の代表型式とした。また、最花式期については共伴遺物から出土した土偶を指標とする天戸森上偶型式・大木10式併行期を一本松土偶型式とする。土偶編年を設定するにあたっては、発掘調査における層位出土の観点と遺構内における共伴遺物のセット関係が良好なものが土偶編年の指標であると理解する。層位面での出土は、現時点で良好な出土例は少なく、共伴遺物からの事例から縦軸編年を組み立てたい。ただし、共伴遺物がすべて正しいという訳ではない。なお、三内丸山遺跡では1,700点の土偶が出土し、36冊の報告書が出版

^(注1)

され、土偶の分析は期待されるところであるが、現実は土偶が多く出土した南盛土（青森県2009）では各トレンチの層位の時期と整合性が判断できず、遺構外のI～III層（青森県2004）も層位の設定時期が不明瞭であり、遺構内の共伴関係も希薄といえる、そのため現時点での三内丸山遺跡の報告は、中期後葉以降の土偶分析には期待が持たれない。

4. 土偶型式における形態（第2図）

各期における土偶型式には、型式内において形態状から見ると三タイプが確認される。^(註4)

有脚タイプ（第2図-1）

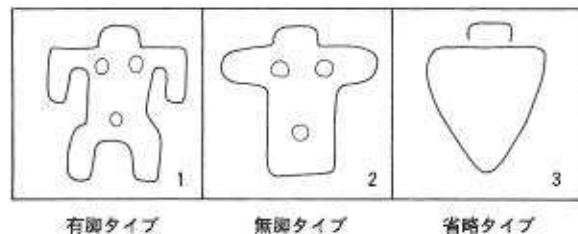
脚部を有するものであり、脚部が長いものと短い短足の形態がある。胸部はなで肩といかり肩の二種が見られるが、基本的にいかり肩を呈する。

無脚タイプ（第2図-2）

脚を有さない無脚のもので、腕を平行にするものと腕をあげた万歳形がみられる。脚は平坦で自立できるものもみられるが、端部が湾曲したものが多く、一般には自立できないものが多い。

省略タイプ（第2図-3）

腕部・脚部を簡略したものである。頭部を作出するものと、全体を三角形で表現し、土器片を利用したものではなく粘土を用いて製作した三角形土版や礫を用いた三角形岩版が省略タイプの分類に属する。



第2図 土偶型式内の形態

5. 土偶型式の概要

・堀合土偶型式（第3図）

本型式は榎林式期に相当する。堀合II号遺跡から出土した(1)を標準型式としている。発掘資料ではなく葛西勲氏は大木10式併行期の包含層から相似した顔部が出土しており、その形態から考えて中期末葉期と考えている。^(註5)しかし、筆者は土偶に施文されているタスキ掛け文様から円筒上層c式のモチーフの系譜を持つものとして榎林式期に位置づけさせている。形状は顔面がやや前に突き出ており、肩はいかり肩を呈し脚部を有する有脚タイプである。文様は乳部に粘土粒を貼り付け、股間には性器を表現している。胸部にはタスキ状の文様を施文し、下半部に斜位状文・脚部に横位沈線を施文している。また肩から腕部にかけては連続刺突を施文している。近野遺跡（青森県2007）出土の(8)は、左半部が残存している有脚タイプであり胸部の上部に横位方向の波状文を施文している。(4)は三内丸山(9)遺跡（青森県2007）で顔部から体部まで残存している無脚タイプである。文様は顔部からへそ部には直線と短沈線、裏面にJ字状文様を施文している。三内沢部遺跡（青森県1978）で、無脚の小形な無脚タイプ(6)と刺突文を施文した三角形土偶(5)である。

秋田県における様相は、鳥野遺跡（二ッ井町1994）から下半部の無脚タイプが出土している。へそ部を中心として渦巻き文を施文している。岩手県における様相は、力持遺跡（岩手県2008）のB II d 11住居跡から出土した土偶である。(2)は腕部を広げた無脚タイプであり、乳房部のみを表現した無文の土偶である。北海道における様相は、ヘロカルウス遺跡（北海道1987）のA区は見晴町式及び榎

林式の層位から出土したもので、本型式に属した。頭部と腕部の無脚タイプ(7)である。陣川原町遺跡(田原1990)(8)は、顔面に刺突・胸部に弧状と連続刺突・下半部に円形文(性器?)を施文している。

共伴土偶

地 区	遺 跡	遺 構	形 式	図	文 献
岩手県普代村	力持遺跡	B II d 11住居跡	堀合土偶型式	第1図-2	岩手県2008
青森県青森市	三内沢部遺跡	第23号堅穴住居跡	堀合土偶型式	第1図-6	青森県1978
青森県弘前市	独孤七面山遺跡	9号溝跡	堀合土偶型式	第1図-10	弘前市2001

・天戸森土偶型式(第3図)

天戸森遺跡(鹿角市1984)から出土した土偶を天戸森土偶型式と呼称したい。第26・87号堅穴住居跡から出土した。(13)は顔部から胸部にかけての無脚タイプである。顔面がやや前に突き出しており、腕部には縦位の短沈線、顔面から体部にかけて地文縄文地に横位・鍵状文様を施文している。(14)は体部のみの残存部位で、中心部に直線と斜位の沈線を施文した文様である。

青森県における様相は、(11)が最花遺跡から出土し江坂輝弥氏(江坂1960)が紹介した土偶である。頭部から胸部にかけて残存している。下半部は不明である。村越潔氏(村越1984)は、腕の長さから脚を有した土偶であると記載しているが、残存部では判断できないため無脚タイプとする。頭頂部は二又に分かれ耳状を呈し頭部の裏側は張り出している。この頭部の張り出しは一本松土偶型式の張り出しと共通性を有するものである。目・鼻・乳房部に粘土粒を貼り付けている。文様は地文地に円形・矢羽状文様を施文している。三内沢部遺跡(青森県1978)(12)は、動物型土製品としているが、筆者は耳部をもつ顔面土偶の一部と考えている。(15)は刺突列を施文した三角形土偶である。北海道からは出土していない。

共伴土偶

地 区	遺 跡	遺 構	形 式	図	文 献
秋田県鹿角市	天戸森遺跡	第26号住居跡	天戸森土偶型式	第3図-13	鹿角市1984
秋田県鹿角市	天戸森遺跡	第87号住居跡	天戸森土偶型式	第3図-14	鹿角市1984
青森県青森市	三内沢部遺跡	第12号住居跡	天戸森土偶型式	第3図-12・15	青森県1994
青森県青森市	三内丸山遺跡	第22号住居跡	天戸森土偶型式	第3図-1	青森県1978
青森県青森市	近野遺跡	E54号堅穴住居跡	天戸森土偶型式	第3図-16~18	青森県2005

・一本松土偶型式(第3・4図)

一本松土偶型式は、原田昌幸氏(原田2010)が提唱したものであり、筆者もこの名称を用いることとする。深浦町一本松遺跡(深浦町1980)から出土し、配石遺構の脇からほぼ完形の状態で出土した。形態は横に広がる腕部と脚部を有さない十字型の無脚タイプである。顔面はまゆ及び鼻を粘土紐で表現し、目・口は刺突で表わしている。特に頭部の後頭部に特徴があり、コブ状に張り出した部位に貫通孔がみられるものである。乳房部とへそ部を粘土粒で表わし、側縁部に沿って連続刺突で表現しており刺突文を多様している。この型式では、鰯ヶ沢町の餅ノ沢遺跡(青森県2000)で100点の土偶が

出土している。第1号遺物包含層と第1号捨て場から出土しているが、第1号遺物包含層は人為堆積であり盛り土と思われ、第1号捨て場は自然堆積ではあるが層位出土が不明瞭であり、層位の出土が判断できない。形態は無脚タイプが腕部が横に水平なもの(19)と上にあがる万歳タイプ(23)の二種の形態が確認される。有脚タイプ(36)は、脚が短くいかり肩の形状である。省略タイプは脚部が鋭角状で頭部が小さいものである(40)。楓ノ木(1)遺跡(青森県1995)(32)は、乳房部を指頭でおさえ、垂れ下がった状態を表現している。三内沢部(3)遺跡(青森県2005)では頭部の小さい省略形タイプである。山田(2)遺跡(青森県2009)の(27)は、形態が万歳形で頭頂部が耳状に二又に分かれしており、最花式土偶型式の系譜を引きついだ事も考えられるものである。刺突文様には、花巻遺跡(黒石市1988)・茶毘館遺跡(青森県1988)(28)の側縁部に沿った刺突列と、(25)のように、体部の中心部に一条の刺突列がみられるものが存在する。長者森遺跡(青森県1983)(29)は、刺突の間に短いアクセント文様を施文しており、後期の野場土偶型式に近い文様である。秋田県における様相は、日廻岱B遺跡(秋田県2005)の(45)が、体部下半のへそ部周縁に連続刺突を施文している。館下1遺跡(秋田県1979)では顔面が前に突き出し、頭部が張り出す形態である。体部は、へそ部を中心として直線状の凹みがあり、側縁部に連続刺突を施文している。ヲフキ遺跡(秋田県2003)(46)は、正面に「の」字文を施文し、裏面に連続刺突を施文している。「の」字文は一本松遺跡(30)と類似した文様構成である。岩手県における様相は、御所野遺跡(一戸町1993・2004)及び大平遺跡(一戸町2006)から出土した土偶が本型式に該当する。体部に沿って直線状に連続刺突を施文している(48)。北海道における様相は、サイベ沢遺跡で、有脚タイプで全面に刺突を施文(50)しており、浜町A遺跡(戸井町1991)では三角形土偶の省略タイプに刺突を施文している(51)。

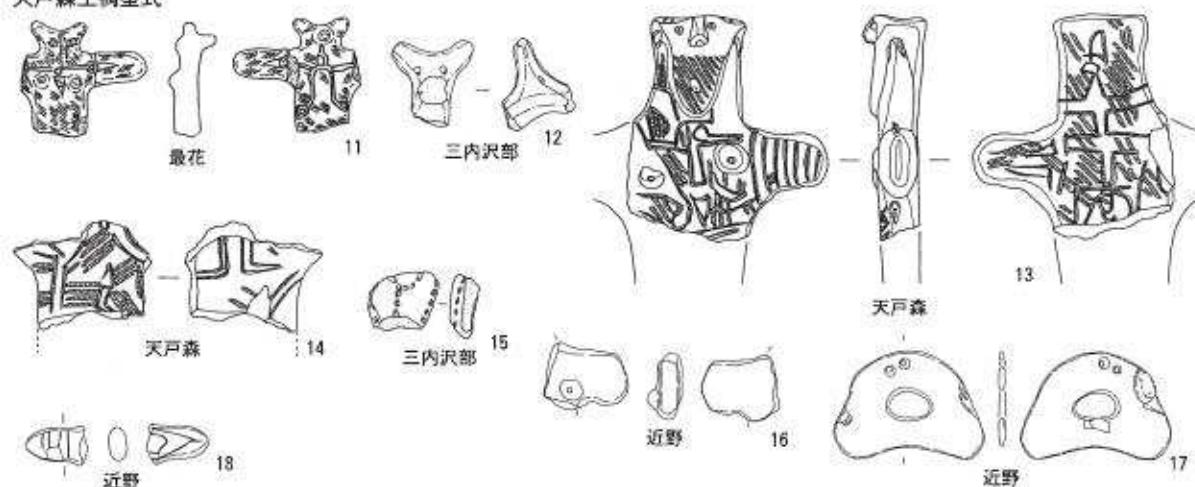
共伴土偶

地 区	遺 跡	遺 構	形 式	図	文 献
青森県深浦町	一本松遺跡	配石遺構	一本松土偶型式	第3図-19	深浦町1980
青森県青森市	三内丸山遺跡	第1号堅穴遺構	一本松土偶型式		青森県1994
青森県野辺地町	楓ノ木(1)遺跡	第3号土坑	一本松土偶型式		青森県1995
青森県黒石市	花巻遺跡	第6号土坑	一本松土偶型式	第3図-21	黒石市1986
青森県相馬村	湯口長根遺跡	第1号住居跡	一本松土偶型式	第3図-24	相馬村1999
青森県相馬村	湯口長根遺跡	第2号住居跡	一本松土偶型式	第3図-22	相馬村1999
青森県蓬田村	山田(2)遺跡	第19号住居跡	一本松土偶型式	第3図-27	青森県2009
岩手県一戸町	御所野遺跡	I C 126粘土採掘坑	一本松土偶型式	第3図-49	一戸町2004
岩手県一戸町	御所野遺跡	F J - 58-01 J	一本松土偶型式		一戸町2006

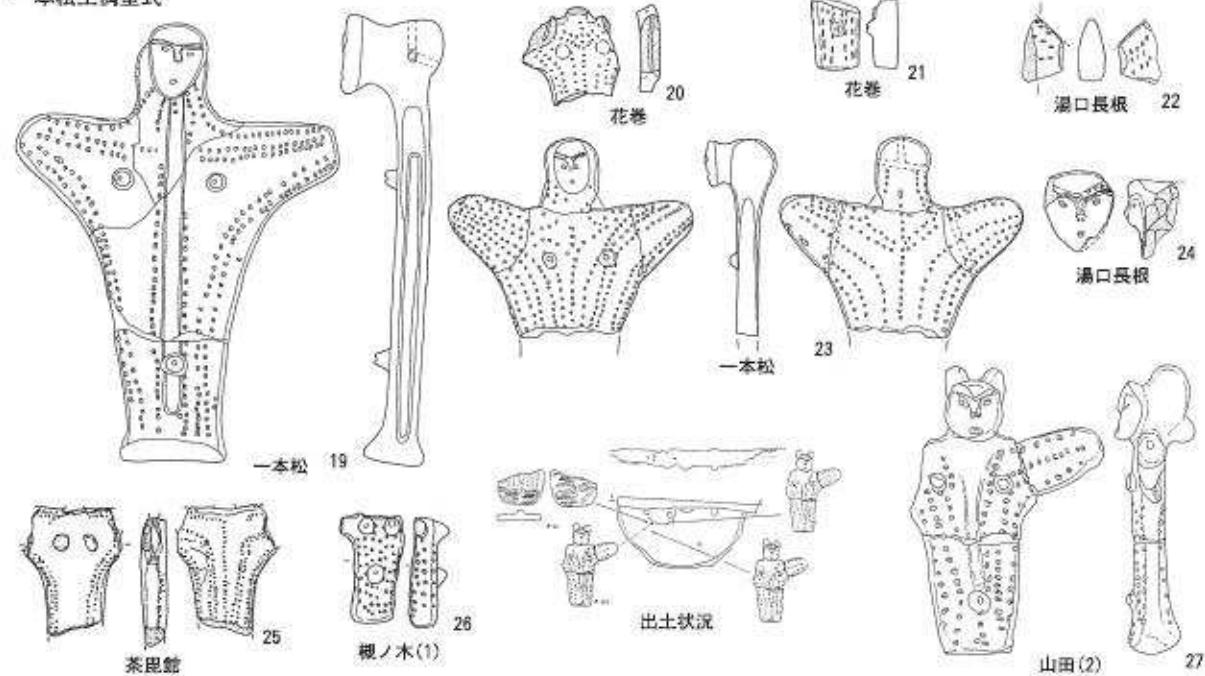
堀合土偶型式



天戸森土偶型式

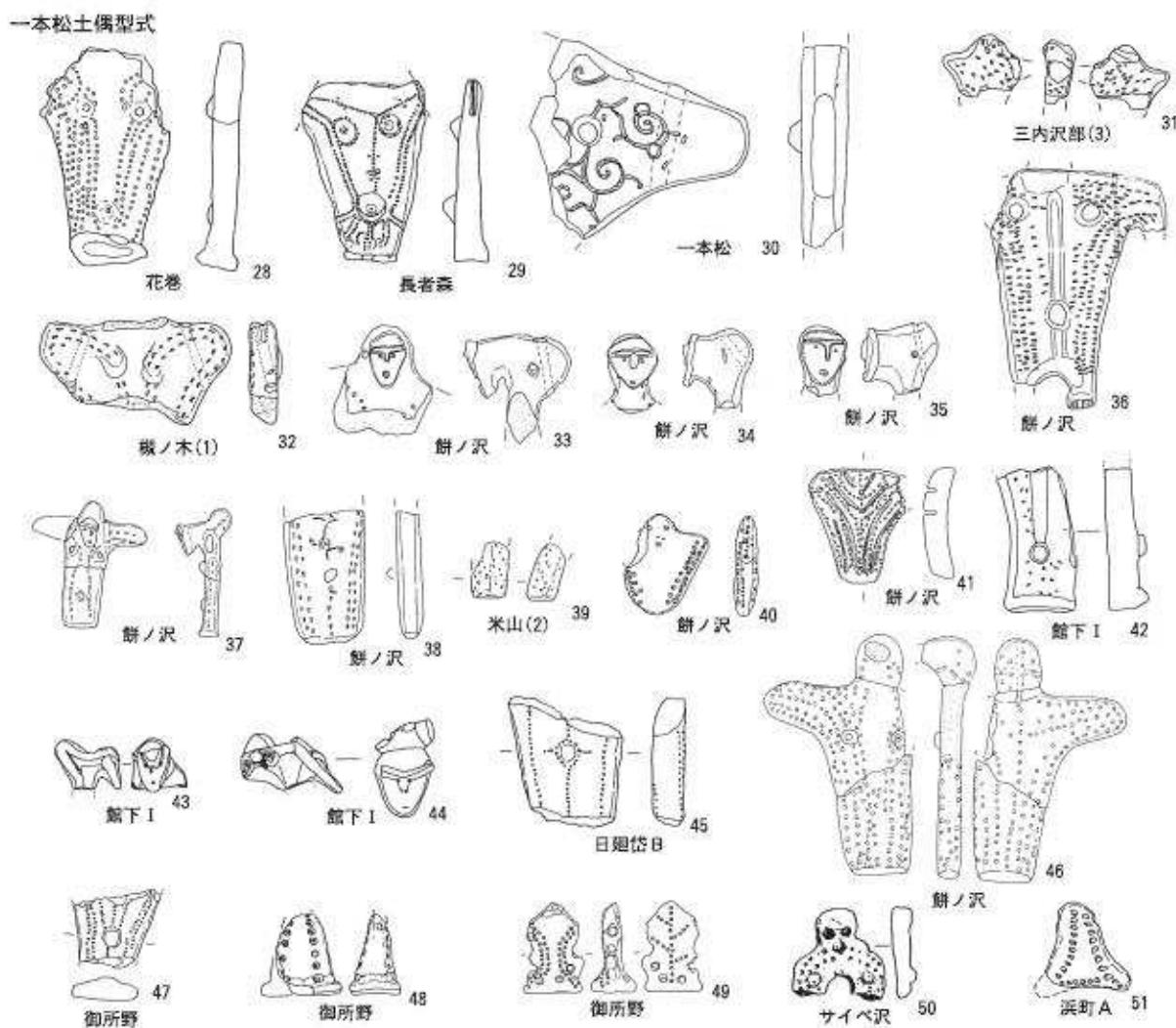


一本松土偶型式



1・8・11は縮尺不同、他は4分の1

第3図 堀合土偶型式・天戸森土偶型式・一本松土偶型式



第4図 一本松土偶型式

48・50は縮尺不明、他は4分の1

6. 各土偶型式のまとめ

中期後葉～末葉にかけて、榎林式に堀合土偶型式・最花式に天戸森土偶型式、大木10式併行期に一本松土偶型式を設定し、各土偶型式の概要を記載した。共伴遺物との関連から見ると堀合土偶型式は、型式設定に関してはやや弱い面もあるが、堀合土偶型式の施文される文様構成が、より円筒上層e式段階の石神土偶型式に類似する面が多く、石神土偶型式に後続するものと位置づけた。なお、無脚タイプは、円筒上層期の伝統を引きついだ両手を広げた十字型の形状であり、一本松土偶型式の段階で両手を上げる万歳形の形状が出現する。有脚タイプは、後期中葉期の段階で有脚に変容することは事実であるが、無脚→有脚というオクマジャクシ理論ではなく、円筒上層期以来、有脚タイプの存在があり、円筒上層期の無脚タイプから逸脱する有脚は、東北地方南部の大木式土器文化圏の影響を受けたものと考えたい。省略形タイプは三角形土偶と考える各土偶型式の変遷を提示することは難しいが、Y字状刺突列を施文するものが一本松土偶型式に、中央部に渦巻文を施文するものがより古い段階と筆者は理解している。

7. 中期後葉期の様相

中期後葉期における土偶の様相は、永峯光一氏（永峯1977）の中期後半期に土偶が増加するという指摘なのだが、なにをもって土偶が増加するのかよく訳からない、林謙作氏（林1965）の東北中部の大木9式期には土偶が姿を消し、土製仮面に変わるという設で当該地域でも土偶は減少しており興味ある設である。しかし、前記で記載したように、土偶型式に三タイプ（無脚・有脚・省略形）が存在しており、この三タイプの共伴は後期中葉期に至るまで継続したと考えられる。つまり、中期後葉期～末葉期の段階は、無脚といわれている十字形土偶が継続しながらも、^(註7)三角形土偶の省略形タイプが各型式間において増加し、省略形に変容していくものと考えられる。形態を三角形を呈するもので粘土で製作されたものを三角形土版、石質のものを三角形岩版と名称されていた。用途に関しては、三角形土版を土偶である認識（田辺1990・鈴木1995）と土偶を否定する（成田1974・阿部1999）という二者の考えに分かれる。筆者は2009年の中平遺跡の報告書（成田2009）で記載したが、首のない省略形の土偶であり、その形態は無脚の土偶から派生した形態と考えており、三角形土偶・岩偶・三角形岩偶と認識した。三角形土偶の文様は、三内沢部遺跡で中心部に円形及び渦巻文を施文する特徴を有する。刺突列はY字状及び側縁部に沿った刺突を施文しており土偶文様と類似している。岩偶は円筒下層期の肩バット岩偶の系譜ではなく、十字形土偶の関連性を考えるべきと指摘している（長沼1999）。形態は頭部を持つ岩偶と、逆三角形の三角形岩偶の二種の形状が確認される。

時期は、東北地方南部で中期前半から出現するが、当該地域では中期後葉～末葉の時期である。なお三角形土版は後期前葉・晚期と三時期で製作される。岩偶は中期中葉～後葉の段階で北海道で多く製作される。一方東北地方では製作されておらず、中期後葉～末葉の段階で三角形土偶と岩偶が対応するという現象がみられる。当該期では東北地方北半部で三角形土偶、何故このような傾向になるのかはよくわからないが、一つの現象として独自の地域文化の崩壊、つまり円筒上層期の段階に至るまで東北地方北部では円筒上層d・e式が存在し、北海道においてもサイベ沢VI・VII式と型式名称は変わるもの、同一の土器文化圏と認識している。その後、東北北部では東北南半部の大木式文様（渦



第5図 三角形土偶・三角形岩偶

卷文・磨消縄文・隆沈線文)の影響を受け、北海道では余市式文様(地文縄文・バンド)の影響を受けた土器が誕生した。このことは独自の地域文化が崩壊(変容)していく段階と土偶減少傾向と符合しており、関連が強いものと考えられる。

8. おわりに

今回の論考は、出土層位と共に伴関係によって構築しようとした。しかし、その試みは土偶の増加と共に伴遺物が増える一本松土偶型式と天戸森土偶型式では一つの土偶型式として間違いないと思われる。ただ、それ以前の堀合土偶型式は共伴遺物が少なく、土偶文様にたよった変遷である事は否定できない。土器文様と土偶文様の関係は、一本松土偶型式の土偶文様と土器文様の関連をみると、刺突文というものがキーワードであると思われる。確かに土器にも刺突文を用いるが、それは主体的な文様ではなく副次的な文様(土器におけるワンポイントの文様)である。つまり土器文様との関連はみられるものの、独自の土偶文様であり変遷していったと考えられ、縄文時代後期Ⅰ期の野場土偶型式に引き続いたものと考えられる。今後の資料增加(特に三内丸山遺跡の再評価)によって土偶型式の再構築を進めていきたい。

注

1. 今回、青森県史で記載されている榎林式期の土偶を探すことができなかった。
2. 鈴木克彦氏は、円筒上層e式を認めていないため、泉山式・中の平I式を設定しているが、筆者は円筒上層e式を認めている。榎林式以降は地域の土器型式であるため、円筒上層の伝統を引いており、円筒上層f・g・h式として型式設定していいのではないかと考えている。
3. 三内丸山遺跡では1,700点の土偶が出土しているといわれているが、36冊刊行の報告書の中で何点の土偶が報告されているのかは定かでない。
4. 以前筆者は「目立ない土偶」(成田1999)で無脚土偶・立脚土偶と大別したが、無脚に対して有脚という表現に変更する。また、省略形を無脚の中に分類していたが、省略タイプに分類する。
5. この土偶については、葛西勵氏は1985年刊行の『十腰内I式土器文化の研究(1)』「撲糸文」第14号で中期末葉期と位置づけていることを平成22年12月に葛西勵氏から御教示を受けた。
6. オタマジャクシ理論は、土偶の変化を手が出て足が出てくるという後期十腰内I式の土偶時にみられる土偶形態の変容を表しているものである。
7. 三角形土偶については、三角形土版と理解する方と意見が二分されるが、筆者は三角形土偶として理解している。
8. 縄文時代後期前葉期の段階は、野場(5)遺跡出土の土偶を用いて野場土偶様式としたい。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会(1978)『三内沢部遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第41集
青森県教育委員会(1988)『茶尾館遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第110集
青森県教育委員会(1983)『長者森遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第74集
青森県教育委員会(1994)『三内丸山(2)遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第157集
青森県教育委員会(1995)『楓ノ木(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第169集
青森県教育委員会(2000)『餅ノ沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第278集
青森県教育委員会(2005)『近野遺跡III』青森県埋蔵文化財調査報告書第394集

- 青森県教育委員会（2007）『近野遺跡X』青森県埋蔵文化財調査報告書第432集
- 青森県教育委員会（2007）『三内丸山（9）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第434集
- 青森県教育委員会（2009）『山田（2）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第469集
- 秋田県教育委員会（1979）『館下I 遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第62集
- 秋田県教育委員会（2003）『ヲフキ遺跡』秋田県文化財調査報告書第352集
- 秋田県教育委員会（2005）『日廻岱B遺跡』秋田県文化財調査報告書第394集
- 阿部明彦（1999）「三角形土製品について」『土偶研究の地平3』勉誠出版
- 一戸町教育委員会（1993）『御所野遺跡I』
- 一戸町教育委員会（2004）『御所野遺跡II』一戸町文化財調査報告書第48集
- 一戸町教育委員会（2006）『大平遺跡』一戸町文化財調査報告書第56集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2008）『力持遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第510集
- 江坂輝弥（1960）『土偶』校倉書房
- 江坂輝弥（1990）『日本の土偶』六興出版
- 小笠原雅行（2002）『青森県史別編 三内丸山遺跡』青森県
- 鹿角市教育委員会（1984）『天戸森遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料26
- 金子拓男（1995）「三角形土版・三角形岩版」「縄文文化の研究9」雄山閣出版
- 黒石市教育委員会（1986）『花巻遺跡』黒石市埋蔵文化財調査報告4
- 黒石市教育委員会（1988）『花巻遺跡』黒石市埋蔵文化財調査報告書第7集
- 鈴木克彦（1981）「土偶の研究序説」『調査研究年報第6号』青森県立郷土館
- 鈴木克彦（1999）「大木系（土器）文化の土偶の研究－土偶の研究（3）－」『土偶研究の地平3』勉誠出版社
- 相馬村教育委員会（1999）『湯口長根遺跡』相馬村文化財調査報告書第1集
- 田辺早苗（1990）「三角形土偶」『季刊考古学第30号』雄山閣出版
- 田原良信（1990）『陣川原町遺跡』函館市教育委員会
- 戸井町教育委員会（1991）『浜町A遺跡II』
- 富樫泰時・武藤祐治（1992）「秋田県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告第37集』国立歴史民俗博物館
- 永瀬光一（1977）「呪的形象としての土偶」『日本原始美術大系3』講談社
- 長沼孝（1992）「北海道の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告第37集』国立歴史民俗博物館
- 長沼孝（1999）「北海道の土偶」「土偶研究の地平3」勉誠出版社
- 成田滋彦（1997）「深浦町一本松遺跡の土偶」『青森県史研究第1号』青森県
- 成田滋彦（1999）「目立ない土偶」「土偶の研究地平3」勉誠出版社
- 成田滋彦（2009）「第4章分析・考案 第3節土偶・土製品」「中平遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第474集
- 成田英子（1974）「日本石器時代における土版・岩版の研究」「遮光器8号」みちのく考古学研究会
- 二ツ井町教育委員会（1993）『鳥野遺跡第4次発掘調査概報』二ツ井町文化財調査報告書第3集
- 二ツ井町教育委員会（1994）『鳥野遺跡第5次発掘調査概報』二ツ井町文化財調査報告書第5集
- 林謙作（1965）「東北」「日本の考古学II 縄文時代」河出書房新社
- 原田昌幸（2010）「土偶とその周辺I」「日本の美術526」至文堂
- 弘前市教育委員会（2001）『独孤七面山遺跡発掘調査報告書』
- 深浦町教育委員会（1980）『深浦町一本松遺跡－第二次発掘調査報告書－』
- 北海道文化財研究所（1987）『ヘロカルウス遺跡』北海道文化財研究所調査報告書第3集
- 村越潔（1984）『円筒土器文化』雄山閣出版

青森県内における 平安時代の非ロクロ成形坏について

新山 隆男（青森県埋蔵文化財調査センター）

1 はじめに

青森県内において平安時代（9世紀以降）の土師器坏と言えば、ロクロ使用のものが一般的であるが、わずかながら非ロクロ成形で外面縦ケズリ・口縁部ヨコナデの坏が混じてくる遺跡が見られる。筆者はこれまでの整理作業において、同じような特徴をもつ非ロクロ成形坏を扱うことがあった。青森県平川市（旧尾上町）五輪野遺跡と青森市新田（1）遺跡の資料であるが、類似したその資料を扱ったことで、この非ロクロ成形坏の詳細について調べてみたくなった。本稿では、青森県内における平安時代（9世紀以降）の非ロクロ成形坏の分布、同資料の集成等からその成果をまとめ、時期・年代観等の考察を行うこととする。

2 取り扱う資料

本稿では、基本的に以下の条件に見合うものを「非ロクロ成形坏」とした。

- ・ロクロ未使用成形、酸化焰焼成、土師質無台坏形土器の類
- ・外面体部縦方向のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ調整を施す類

以上の条件に見合う完形品・略完形品、もしくは口縁部から底部まで残存する資料のみを扱った。報告書によつては、皿・碗・鉢などと器種分類しているものについても、上記の条件を満たすものは含めた。また、外面ヘラナデ調整となつてゐるものについても、縦方向に調整が施されているものや、調整の区画がしっかりとしているものなどについては「非ロクロ成形坏」に含めた。また、口縁部ヨコナ



※五輪野遺跡B区第33号住居跡出土資料（図5-68）

図1 非ロクロ成形坏

デが表現されていないと判断し「非ロクロ成形坏」としたものもある。上北地方の遺跡から出土した資料については、口縁部にヨコナデは入らないようであるが、参考までに取り上げた。

なお、実見していない資料については、実測図・観察表のみでしか判断できなかつたため、あくまでも筆者の判断で集成したものであり、実際は条件に合わないものが含まれている可能性もある。

3 分布

「非ロクロ成形坏」が出土する遺跡は、参考までに取り上げた上北地方に数カ所見られるが、多くは青森市（旧浪岡町含む）・弘前市・黒石市・平川市にかけての津軽地方に偏る傾向がある。地形的特徴としては、沖積地に所在する遺跡が比較的多いということがあげられる。青森平野を形成する沖積地上には、新田（1）・（2）遺跡、津軽平野を形成する沖積地上には、水木館遺跡・宮元遺跡・独狐遺跡が所在する。青森平野に所在する遺跡からは八甲田山、津軽平野に所在する遺跡から岩木山と、そ

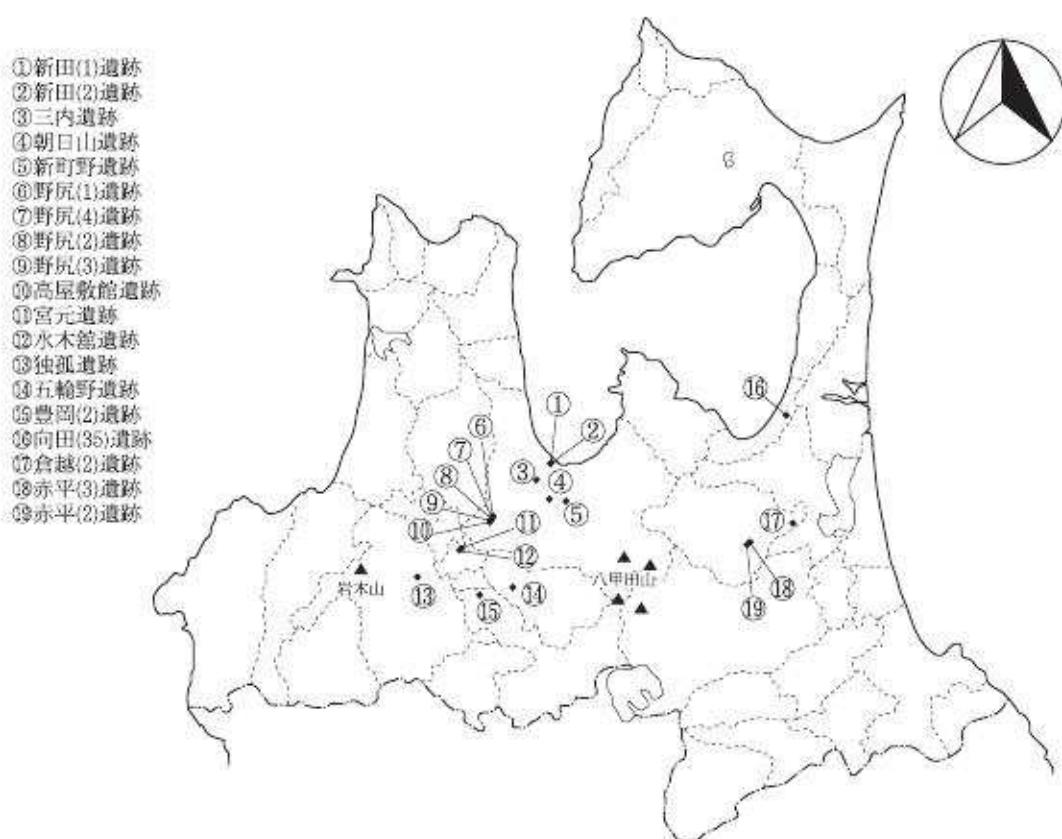


図2 遺跡の分布

それぞれ1,000mを超える秀峰が臨める立地である。また、本稿で扱う遺物が出土する遺構としては、段丘上にある遺跡では竪穴住居跡・土坑がほとんどであるのに対して、沖積地上にある遺跡では、溝跡からの出土がほとんどであるという特徴をもつ。

4 分類

青森県内における19の遺跡から出土した、前述の条件を基本的に満たす73点の資料を取り扱う。分類は「器高指数と底径指数（註1）」をもとに行い、それぞれの組み合わせによって細分した。細分については図3-3のグラフに示した通りであるが、それぞれの指標の45ラインで分割することとした。

（器高指数） A類：環形（指数45未満） B類：楕形（指数45以上）

（底径指数） 1類：底径小（指数45未満） 2類：底径大（指数45以上）

組み合せた分類における資料数は次の通りである。

A1類（環形で底径が小さい類）：22点 A2類（環形で底径が大きい類）：18点

B1類（楕形で底径が小さい類）：14点 B2類（楕形で底径が大きい類）：19点

器高指数・底径指数45ラインで分類した理由についてだが、津軽地域期における古代土器食膳具の変遷（9世紀～11世紀）をまとめた岩井浩人氏（岩井：2008）による土師器坏の分類を参考とした。岩井氏は器高指数35以上を「坏A」、器高指数27～35を「坏B」として分類しているが、今回取り扱う資料は器高指数35以上の資料が圧倒的に多いため、器高指数45を境界に「楕」いう分類を設置してみた。つまり、器高指数27～45未満が「環形」で、器高指数45以上が「楕形」ということになる。ち

なみに岩井氏は、器高指数27以下を「皿」としているが、今回取り扱う資料に器高指数27以下は存在しなかった。また、底径指数については、岩井氏の分類には取り入れられてはいないが、口径に比する底径の大小も土師器の年代観を考察する上で重要視される傾向にあるため、今回算出した指数のちょうど中間ラインにあたる指数45に設置してみた。つまり、底径指数45は、本稿資料における平均水準ということである。

次に、器高指数・底径指数それぞれの特徴について見ていく。まず器高指数であるが、A類とB類を比較すると、A類は指数が広範囲にわたり小型～大型までの幅広いタイプに分かれる。B類は指数がまとまった範囲に收まり中型タイプのみに集中するという特徴がある。中型タイプはA・B類とも口径11～14cm程度であるが、A類に見られる小型タイプは口径10cm前後、器高4cm以下で、大型タイプは口径15cm以上、器高6cm以上であることがわかる。底径指数は、1・2類とも指数が広範囲にわたり、いずれも小型～大型タイプに分かれることがわかる。A類では、大型タイプで底径が10cm近くの大きいものもあれば(2類)、小型タイプで底径が4cm程度の小さいものもある(1類)。B類は、底径指数においても割とまとまった印象を受けるが、底径7cm前後の幅広な底部を持つものも何点か含まれることがわかる(2類)。

また、内面調整及び底面についても触れておく。内面調整はほとんどがヘラナデ・ナデ調整であり、ロクロ目が残ると観察されるものやヘラミガキ・カキメ調整と観察されるものが数点含まれている。底面にはムシロ状の圧痕がつくものが多い。ムシロ状の圧痕も含め底面の様子については各報告で様々な呼称があるため、本稿においては便宜上、下記の

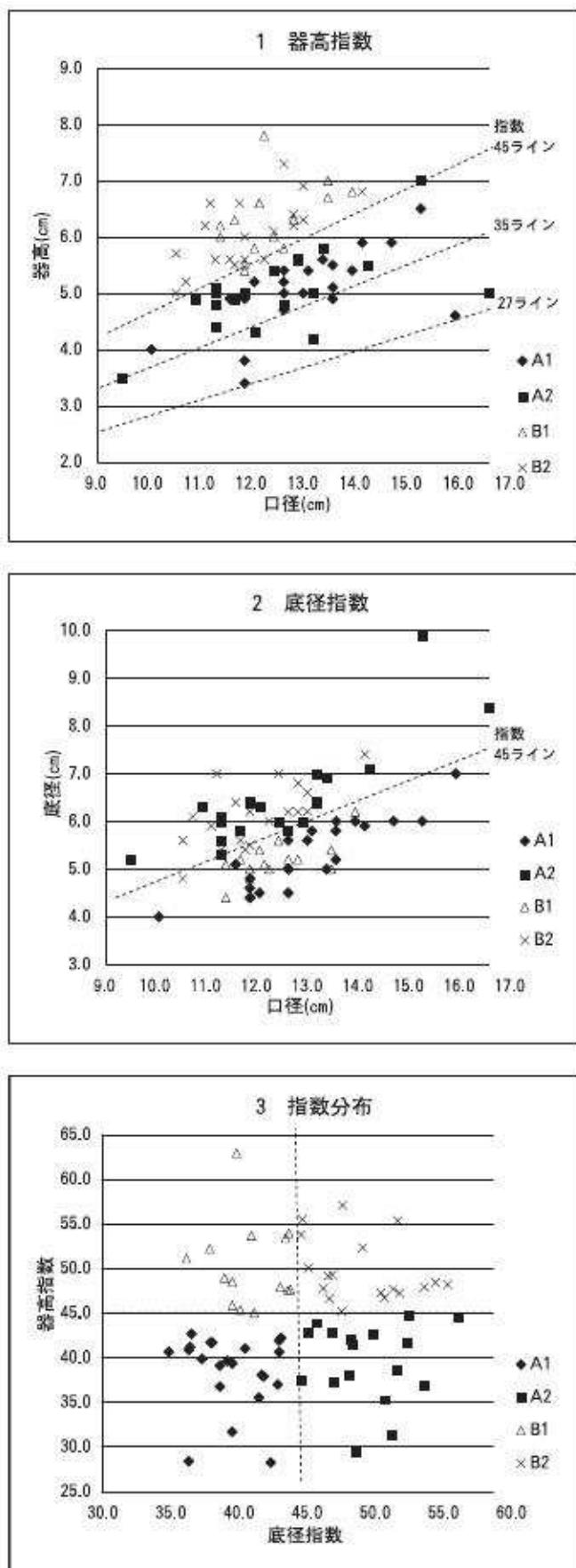


図3 器高指数と底径指数

のような呼称で統一する。

ムシロ底 = 網代痕、簾痕、簾状圧痕、こも編み圧痕、菰編痕、編物痕、ムシロ圧痕

木葉底 = 木葉痕

砂底 = 砂底、砂敷

調整底 = ヘラナデ、ヘラケズリ、ハケメ、ケズリ、ナデ、オサエ

その他 = 平滑、無調整

なお、資料における基礎データは文末の観察表にまとめた。以下、分類に従って、資料の詳細について記述していくこととする。

A1類（図4）

遺構内では、新田(2)遺跡第73号溝跡、野尻(1)遺跡第319号建物跡、野尻(3)遺跡第5号建物跡、宮元遺跡III-24号・IV-6号・XI-11号・XII-2号溝跡、水木館遺跡第80号溝、五輪野遺跡B区第34号土坑、豊岡(2)遺跡第15号竪穴住居跡、赤平(3)遺跡第13号住居跡の資料が該当する。遺構外では、宮元遺跡III・IV・XI・XII区の資料が該当する。法量的な差は大きく、口径が10~17cm、底径が4~7cm、器高が3~7cmである。野尻(1)遺跡出土資料(4)は口径が16.3cmと最も大きく、宮元遺跡出土資料(11)は口径が10.1cmと最も小さい。新田(2)遺跡(2)、水木館遺跡(18)出土の資料には、外面に刻書・線刻が施されている。器形の特徴として、口縁部が外反するもの(3・4・5・6・7・10・12・13・15)、底部がやや張り出すもの(2・5・8・13・14・16・21)がある。底面の様子は、木葉底1点(12)、砂底1点(20)、調整底3点(2・16・21)、以外は全てムシロ底である。その他、共伴遺物として、新田(2)遺跡第73号溝跡からは把手付土器・擦文土器及び斎串などの木製品が出土している。野尻(1)遺跡第319号建物跡からは内外面黒色処理された土師器蓋、円孔・沈線文等が施文された円盤状土製品などが出土している。宮元遺跡XI-11号溝跡からは土師器の壺のほか、須恵器の大甕などが出土している。五輪野遺跡第32号住居跡からは仏具とされる鉄製の縒(鈴体部)、柄香炉の柄部(鉄製)、飾り部(銅製)、蓋部(銅製)などが出土している。赤平(3)遺跡第13号住居跡からは製塙土器、土製勾玉、菰柵などが出土している。

A2類（図4）

遺構内では、新田(1)遺跡第31号溝跡、新田(2)遺跡第19・24・47号溝跡、野尻(3)遺跡第4号建物跡外周溝、宮元遺跡III-24・XI-11号溝跡、水木館遺跡第231号溝、五輪野遺跡B区第21・23・24・32号住居跡、豊岡(2)遺跡第14号竪穴住居跡、向田(35)遺跡第108・109号住居跡、倉越(2)遺跡第6号竪穴住居跡の資料が該当する。遺構外では、五輪野遺跡A区、豊岡(2)遺跡の資料が該当する。法量的な差は分類した中で最も大きく、口径が9~17cm、底径が5~10cm、器高が3~7cmである。豊岡(2)遺跡出土資料(36)は口径が17.0cmと最も大きく、新田(2)遺跡出土資料(25)は口径が9.5cmと一番小さい。底径のみで見ると、豊岡(2)遺跡出土資料(35)は9.9cmと最も大きい。器形の特徴として、口縁部が外反するもの(24・28・29・31・33)、底部がやや張り出すもの(25・27・28・29・31・39)がある。底面の様子は全種類がほぼ同じくらいの数量であり、多種多様になっていることがわかる。その他、共伴遺物として、新田(1)遺跡第31号溝跡からは把手付土器のほか骨角器が1点出土している。新田(2)遺跡第19・24・47号溝跡からは擦文土器が出土している。水木館遺跡第231号溝からは柱状高台壇・球胴甕のほか、木製の椀が出土している。倉越(2)遺跡第6号竪穴住居跡からは横櫛など

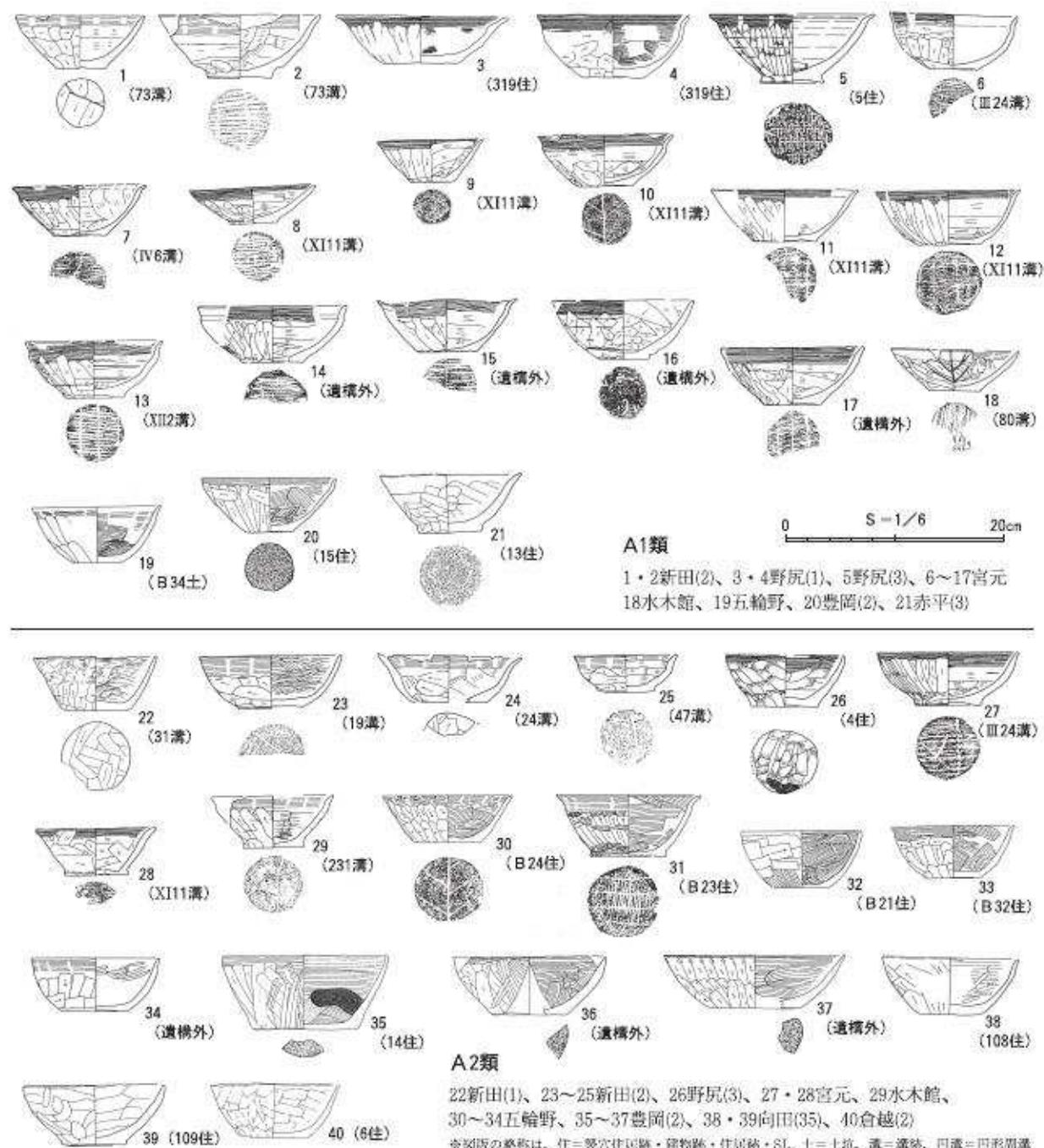


図4 A1・A2類

の木製品、繊維を編んだ編物などの特殊品が出土している。

B1類（図5）

遺構内では、新田(1)遺跡第4号溝跡、新田(2)遺跡第73号溝跡、三内遺跡H-13・H-40堅穴住居跡、新町野遺跡第6号堅穴住居跡、野尻(4)遺跡SI-083外周溝、宮元遺跡XI-11・XII-17号溝跡、赤平(2)遺跡第3号住居跡の資料が該当する。遺構外では、宮元遺跡XI区、五輪野遺跡A区の資料が該当する。法量的な差は小さく、口径は10～14cm、底径は4～6cm、器高は5～6cmの範囲内に収まる。新田(2)遺跡出土の資料には外面に墨書のあるもの(43)、刻書のあるもの(44)が報告されている。

器形の特徴として、口縁部が外反するもの（44・50・51・52・53・54）、底部がやや張り出すもの（44・51・53）がある。底面の様子は砂底4点（45・47・48・49）、調整底1点（42）、その他1点（46）以外は全てムシロ底である。その他、共伴遺物として、新田(1)遺跡第4号溝跡・新田(2)遺跡第73号溝跡からは擦文土器や斎串などの木製品が出土している。なお、新田(1)遺跡第4号溝跡からは瓢箪製容器の出土も報告されている。

B2類（図5）

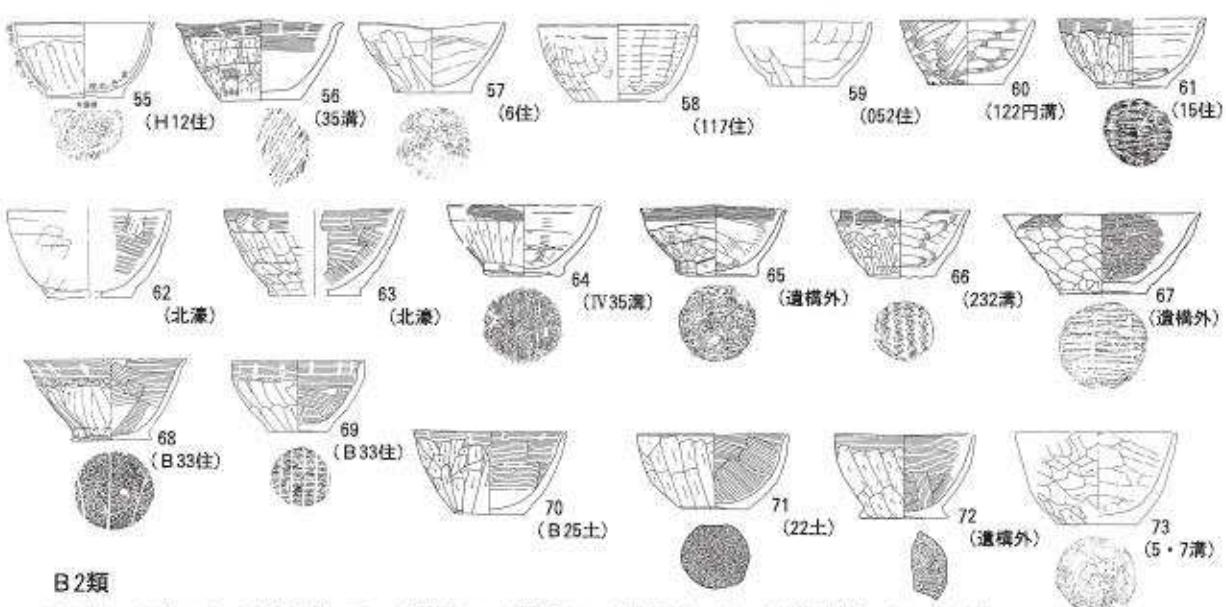
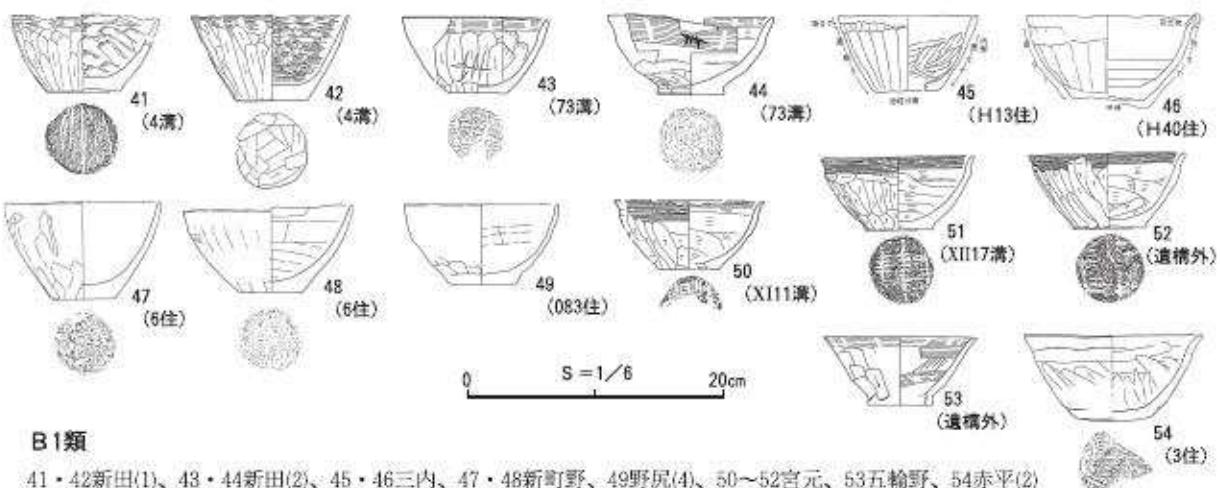
遺構内では、三内遺跡H-12堅穴住居跡、朝日山遺跡第35号溝跡、新町野遺跡第6号堅穴住居跡、野尻(4)遺跡SI-052・117外周溝、野尻(2)遺跡第122号円形周溝、野尻(3)遺跡第15号建物跡、高屋敷館遺跡北濠、宮元遺跡IV-35号溝跡、水木館遺跡第232(89)号溝、五輪野遺跡第33号住居跡・第25号土坑、豊岡(2)遺跡第22号土坑、倉越(2)遺跡第5・7号溝跡の資料が該当する。遺構外では、宮元遺跡Ⅲ区、独狐遺跡第2次調査、豊岡(2)遺跡の資料が該当する。法量的な差は小さく、口径が10～15cm、底径が5～8cm、器高が5～8cmの範囲内に収まる。五輪野遺跡出土資料（68・69）は灯明具に転用された可能性があると報告されている。内面の様子は、三内遺跡出土資料（55）が黒色処理を施すと観察されている。内面調整は、高屋敷館遺跡出土資料（62・63）が内面カキメ調整を施すと観察されている他は、ヘラナデ・ナデ調整である。器形の特徴として、口縁部が外反するもの（56・68）、底部がやや張り出すもの（55・61・62・63・64・65・68・72）がある。底面の様子は、木葉底2点（55・68）、砂底5点（59・62・63・71・72）、調整底2点（57・60）以外は全てムシロ底である。その他、共伴遺物として、朝日山遺跡第35号溝跡からは台付壺や支脚が出土している。宮元遺跡IV-35号溝跡からは土師器の壺・甕のほかに耳皿が出土している。水木館遺跡第232号溝跡から柱状高台壺や木製品が出土している。また、五輪野遺跡第33号住居跡からは球胴甕のほか、仏具の「三鉛繩（鉄製品）」がほぼ完形品で出土している。

5 時期・年代観

本稿資料の時期・年代観について、本稿資料が出土した遺構の帰属時期・共伴遺物・炭素年代分析の結果・器形に基づいて考えてみたいと思う。

（遺構の帰属時期）

まずは、本稿資料が出土した遺構の帰属時期に照らし合わせながら考えてみる。遺構の帰属時期を判断する材料として広域テフラがあげられるが、ここでは、白頭山・苦小牧火山灰（B-Tm：註2）の有無に着目して考えてみたい。火山灰の堆積が認められる遺構が確認されているのは、三内遺跡・野尻(1)遺跡・野尻(3)遺跡・野尻(4)遺跡である。そのうち、三内遺跡は十和田a火山灰（To-a：註2）のようだが、野尻(1)・(3)・(4)遺跡はB-Tmである可能性が高い。野尻(1)遺跡319号建物跡資料（図4-3・4）、野尻(4)遺跡SI-117外周溝資料（図5-59）は、B-Tm堆積層の下から出土していると報告されている。また、直接B-Tmが堆積しているわけではないが、野尻(2)遺跡第122号円形周溝（資料：図5-60）、野尻(3)遺跡第15号建物跡（資料：図5-61）は、B-Tmを堆積する遺構と重複しており、本遺構が古いとされている。同じように、新田(2)遺跡第73号溝跡（資料：図4-1・2、図5-43・44）、野尻(3)遺跡第4号建物跡外周溝（資料：図4-26）は、B-Tmを堆積する遺構と重複しており、本遺構が新しいとされている。三内遺跡H-13号堅穴住居跡（資料：図5-45）、野尻(4)遺跡SI-052外周溝（資料：図5-58）、赤平(2)遺跡第3号住居跡（資料：図5-54）、赤平(3)第13号堅穴



※図版の略称は、住＝堅穴住跡・建物跡・住跡跡・S、土＝土坑、溝＝溝跡、円溝＝円形溝跡

図5 B1・B2類

住居跡（資料：図4-21）、倉越(2)遺跡第6号堅穴住居跡（資料：図4-40）、倉越(2)遺跡第5・7号溝跡（資料：図5-73）は、B-Tm又はTo-aが遺構堆積土内にブロック状で混入するように入り込んでいるようである。また、新町野遺跡・高屋敷館遺跡・宮元遺跡・水木館遺跡では、本稿資料が出土した遺構に火山灰は確認されないものの、周囲の遺構にB-TmやTo-aが堆積しており、火山灰降下時期に近い遺構である可能性が考えられる。

（共伴遺物）

次に、共伴遺物に照らし合わせながら考えてみる。ここでは青森県内における近年の土師器・須恵器の編年研究に合わせて考えてみることとする。まず、柱状高台坏であるが、これは11世紀前半のあたりから津軽地方で使われ始めると試案されており（工藤：2000）、水木館遺跡第231号溝跡（資料：図4-29）・第232号溝跡（資料：図5-66）で共伴している。把手付土器は、10世紀後半～11世紀後半

にかけて見られるようになり（三浦：1995）、高屋敷館遺跡北濠（資料：図5-62・63）、新田(1)遺跡第4号溝跡（資料：図5-41・42）・第31号溝跡（資料：図4-22）、新田(2)遺跡第73号溝跡（資料：図4-1・2、図5-43・44）で共伴している。擦文土器は、10世紀後葉から共伴するようになり11世紀末の段階では終焉を迎えるとされている（三浦：1995）が、擦文土器は、新田(1)・(2)遺跡のほとんどの溝跡で共伴している。青森県内の擦文土器について編年研究している齋藤氏の編年に合わせると、Ⅲ群（10世紀末～11世紀前葉）に当てはまると言えよう（齋藤：2001）。また、向田(35)遺跡108・109号住居跡からは、擦文系の土器片が伴出している。堀は、宮元遺跡の溝跡などから破片が数点出土しているが、9世紀後葉～10世紀中葉頃までという編年（三浦：1995）や、底径が縮小するが10世紀後半頃まで見られるという編年（工藤：2005）がある。須恵器（五所川原産）は、五所川原窯跡群の操業期間が9世紀末～10世紀第4四半期と言われており（藤原：2007）、宮元遺跡XI-11号溝跡からは、藤原氏編年の中期（10世紀第2四半期）から後期Ⅰ期（10世紀中葉～10世紀第3四半期）に該当すると思われる壺・壷・甕などの資料がまとまって出土している。

（放射性炭素年代分析）

次に、本稿資料が出土した遺構の放射性炭素年代による分析をもとに考えてみる。新田(1)遺跡第4号溝跡覆土下層から出土した「瓢箪製容器」の表皮は10世紀後葉の年代値が示された（青森県教委：第472集）。伐採年代が示されたと考えるならば、一番新しく見積もっても10世紀後葉以降の遺物が含まれる溝跡ということになる。新田(1)遺跡第4号溝跡と新田(2)遺跡第73号溝跡は共通点が多く、どちらも溝跡と報告してはいるものの、濠跡と言ってもよい程の大溝である他、出土している遺物も共通するものが多く、ほぼ同時期の溝跡であると考えられる。

（器形）

最後に、器形によって時期・年代観を考えてみる。まず、上述した時期・年代観に合わせてみると、A1類に含まれる野尻(1)遺跡第319号建物跡出土遺物（図4-3・4）はB-Tm降下前の段階ということになり、B1類に含まれる新田(1)遺跡第4号溝跡・新田(2)遺跡第73号溝跡出土遺物（図5-41～44）はB-Tm降下後の段階ということになる。また、野尻(2)遺跡第122号円形周溝出土遺物（図5-60）・野尻(3)遺跡第15号建物跡出土遺物（図5-61）・野尻(4)遺跡SI117外周溝出土遺物（図5-58）はB-Tm降下前と考えられるが、全てB2類に含まれる。残りのA2類については野尻(2)遺跡の資料を除きB-Tmに関連する資料がない。A2類については、器高が低く底径がかなり大きくなってくるという特徴があるが、分類でも引用した岩井浩人氏（岩井：2008）の編年に当てはめると、最終段階のV-2期（11世紀中葉以降）に該当するものが含まれると見える。弘前市早稻田遺跡出土の土師器壺で編年した岩井浩介氏（岩井：2010）も同じような考え方であり、編年に当てはめるとE群（11世紀中葉）に該当すると考えられる。ただ、器形のみで時期・年代観を決定することは非常に困難で、A1類が全てB-Tm降下前の年代観であったり、A2類が全て11世紀中葉頃の年代観であったりと言うわけではなく、幅広い時期にわたって存在することが調べているうちにわかつってきた。これは本稿資料が特殊な器種である故なのか定かではないが、器形による時期・年代観はあくまでも参考程度にとどめ、その時期における器形の傾向を捉える程度として今回は取り扱っていきたいと考える。

以上、4つの要素から本稿資料の時期・年代観をまとめると、B-Tm降下前をⅠ期、降下後をⅡ期とする以下のような2時期に分けられ、器形の特徴等で細分した。

I - 1期 = 9世紀後葉～10世紀前葉 (A1類のみ)

野尻(1)遺跡第319号建物跡

I - 2期 = 10世紀前葉～10世紀中葉 (B2類のみ)

野尻(4)遺跡117号外周溝、野尻(2)遺跡第122号円形周溝、野尻(3)遺跡第15号建物跡

II - 1期 = 10世紀中葉～10世紀後葉 (A1類=2・A2類=2・B1類=2・B2類=2)

三内遺跡H-13号竪穴住居跡、野尻(3)遺跡第4・5号建物跡、野尻(4)遺跡SI-052、赤平(2)遺跡3号住居跡、赤平(3)遺跡第13号住居跡、倉越(2)遺跡第6号竪穴住居跡、倉越(2)遺跡第5・7号溝跡

II - 2期 = 10世紀後葉～11世紀前葉 (A1類=11・A2類=9・B1類=9・B2類=11)

新田(1)遺跡第4号溝跡、新田(2)遺跡第19・24・47・73号溝跡、三内遺跡H-12・40号竪穴住居跡、朝日山遺跡第35号溝跡、新町野遺跡第6号竪穴住居跡、野尻(4)遺跡SI-083、高屋敷館遺跡北濠、宮元遺跡第III-24、IV-6・34、XI-11、XII-2・17号溝跡、水木館遺跡第80・231・232号溝跡、五輪野遺跡B区第23・32・33号住居跡、五輪野遺跡B区第25・34号土坑、豊岡(2)遺跡第15号竪穴住居跡、豊岡(2)遺跡第22号土坑、向田(35)遺跡108・109号住居跡、

II - 3期 = 11世紀前葉～11世紀中葉 (A2類のみ)

新田(1)遺跡第31号溝跡、五輪野遺跡B区第21・24号住居跡、豊岡(2)遺跡第14号竪穴住居跡

6 その他

その他として本稿資料の使用目的について若干触れておく。まず、使用目的として注目される点は、仏具や祭祀的遺物と共に伴する遺構が一部に見られるということである。五輪野遺跡第32・33号住居跡からは、三鉢織・柄香炉などの仏具が共伴している。太田原(川口)氏によると、日光男体山山頂遺跡出土資料坏G類(図6)との類似から、山岳信仰や修験との関連を推察している。ただ、日光男体山山頂遺跡の坏G類は、五輪野遺跡出土資料よりも器高が低く底径が大きくなるという特徴から、器形的には本稿A2類に類似しており若干の違いが認められる。ちなみに坏G類は、「洞部及び底部を箇そぎによって整え、口縁部になで附けの一帯を加えるもの」とされており、平安時代の後期と報告されている。その他、野尻(1)遺跡第319号建物跡からは内外面黒化処理された蓋、新田(1)遺跡第4号溝跡と新田(2)遺跡第73号溝跡からは木製品の蓋が共伴している。また、本稿資料自体がもつ特徴として、新田(2)遺跡第73号溝跡から出土した資料には刻書や墨書きが施される例や、五輪野遺跡第32・33号住居跡から出土した資料には煤状の物質が付着することから、灯明具と推察される例があげられる。以上のことから本稿資料の使用目的を考えるとき、一部の遺跡でのみ言えることであるが、食膳具というより信仰・修験・祭祀行為等に用いられた「供献具」として使用されていた可能性があるようと思われる。

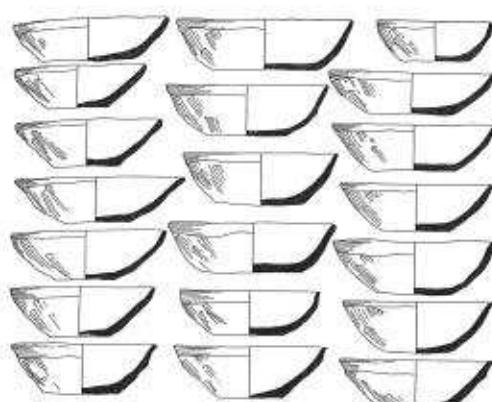


図6 日光男体山山頂遺跡出土遺物 (坏G類)

次に、本稿資料の底面に目を向けると、一番多く見られるのが「ムシロ底」であるが、これは稻野氏が集成した繊維圧痕のC種（稻野：1995）にあたる。C種は津軽地方を中心に分布し、10世紀～12世紀に存在するとしている。ただ、注目すべきは豊岡(2)遺跡出土資料であるが、全ての資料が底面「砂底」であるということである。砂底土器については、櫻田氏（櫻田：1993）や利部氏（利部：2000）の研究があるが、それによると砂底土器は「蝦夷」関連の遺物ではないかとの見方があり、豊岡(2)遺跡出土資料については共伴遺物にも特殊性が見られることから、蝦夷との関連性も考慮した方がよいものと思われる。底面砂底は、三内遺跡、新町野遺跡、野尻(4)遺跡、高屋敷館遺跡出土資料にも見られる。

最後に器形について補足するが、本稿資料は全て壺として扱ったものの、最初から壺として製作されたものと、甕の製作途中で壺に変更されたものが含まれているように感じられる。また、木器の模倣と思われるものや、胎土においても違いが見られるものもあり、今後はこういった観点からも考察する必要性があると感じられた。

今回、青森県内の資料のみについて集成したが、近県の秋田・山形県においても本稿資料が存在するようである。また、擦文系の土器も共伴することから北海道との関連性はどうかなど、興味は尽きないところである。

7 まとめ

本稿資料についての分布や器形分類、時期・年代観の考察等についてまとめる以下のようなになる。

- ・分布の特徴として、津軽地方の遺跡から偏って出土する傾向があり、他は上北地方の数カ所の遺跡で出土する程度である。
- ・器形は、壺形と楕形に分類され、器高指数45以上の楕形が大半を占める。
- ・外面に刻書・墨書きが施されたり、煤状物質が付着し「灯明具」として使われたと考えられたりするものが数点ある。
- ・時期・年代観として、Ⅰ期はB-Tm降下前の「野尻遺跡群（註3）」を中心に出土しており、B-Tmの堆積状況から9世紀後葉～10世紀中葉と考えられる。Ⅱ期は、B-Tm降下後「野尻遺跡群」から津軽地方・上北地方に拡がりを見せ、溝跡へ大量廃棄された遺物に混入して出土する例が多く、共伴遺物・年代測定等から10世紀中葉～11世紀中葉と考えられる。
- ・使用目的として、仏具や祭祀遺物との共伴、資料自体に施された刻書・墨書き等から、一部の遺跡では「供献具」として使用していた可能性がある。
- ・底面は「ムシロ底」の類が多く、木葉底・砂底・調整底なども見られる。砂底土器は「蝦夷」関連の遺物であるという見方もある。

末筆ながら、本稿の作成にご教示・ご助言くださった方々に記して感謝の意を申し上げる次第である（順不同・敬称略）。

浅田智晴、葛城和穂、加藤隆則、川口潤、木村淳一、斎藤淳、佐藤智生、笹森一朗、神康夫、田中珠美、藤原弘明。

また、今年度で当センターを定年退職される畠山昇・大湯卓二両氏に、尊敬と感謝の念を込めて本稿を贈りたいと思う。両氏は、本稿資料に関わる遺跡の発掘調査・報告書作成に携わってきており、その尽力に敬意を表するものである。長年のご勤続、お疲れ様でした。

註

- 註1：器高指数とは(器高÷口径)×100、底径指数とは(底径÷口径)×100で示される数値。
- 註2：青森県では、古代（平安時代）の遺構堆積土に見られる十和田a火山灰（以下To-a）と白頭山・苦小牧火山灰（以下B-Tm）の2枚の広域テフラが確認されている。それぞれの降下年代には諸説あるが、本稿ではTo-aを915年、B-Tmを940年と捉えることとする。
- 註3：工藤清泰氏は、高屋敷館遺跡以北を「A群」、以南を「B群」としている（工藤：2003）。齋藤淳氏は工藤氏の言うA群を「野尻遺跡群」、B群を「山元遺跡群」と仮称しており（齋藤：2010）、本稿ではこれを引用し「野尻遺跡群」とした。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1978 「青森市三内遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第37集
- 青森県教育委員会 1985 「独孤遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第99集
- 青森県教育委員会 1994 「朝日山遺跡Ⅲ」青森県埋蔵文化財調査報告書第156集
- 青森県教育委員会 1995 「水木館遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第173集
- 青森県教育委員会 1996 「野尻(2)遺跡Ⅱ・野尻(3)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
- 青森県教育委員会 1996 「野尻(4)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
- 青森県教育委員会 1997 「垂柳遺跡・五輪野遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第219集
- 青森県教育委員会 1998 「高屋敷館遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第243集
- 青森県教育委員会 2000 「野尻(1)遺跡Ⅲ」青森県埋蔵文化財調査報告書第277集
- 青森県教育委員会 2000 「新町野遺跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書第275集
- 青森県教育委員会 2004 「向田(35)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第373集
- 青森県教育委員会 2004 「宮元遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第359集
- 青森県教育委員会 2004 「宮元遺跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書第380集
- 青森県教育委員会 2005 「倉越(2)遺跡・大池館遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第389集
- 青森県教育委員会 2007 「赤平(2)遺跡・赤平(3)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第438集
- 青森県教育委員会 2009 「新田(1)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第472集
- 青森県教育委員会 2009 「新田(2)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第471集
- 黒石市教育委員会 1995 「豊岡(2)遺跡」黒石市埋蔵文化財調査報告第13集
- 浪岡町教育委員会 2004 「野尻(4)遺跡」浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第10集
- 稻野彰子 1995 「いわゆるムシロ底について」『北上市立博物館研究報告』第10号
- 岩井浩介 2010 「早稻田遺跡出土資料の再々検討」『青森県考古学』第18号 青森県考古学会
- 岩井浩人 2008 「津軽地域における古代土器食膳具の変遷」『青山考古』第24号 青山考古学会
- 太田原（川口）潤 1997 「第V章第2節五輪野遺跡のまとめ」『垂柳遺跡・五輪野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第219集
- 小口雅史 2003 「古代東北の広域テフラをめぐる諸問題－十和田aと白頭山（長白山）を中心に－」『日本・律令制の展開』吉川弘文館
- 利部 修 2000 「平安時代の砂底土器と東北北部型長頸瓶」『月刊考古学ジャーナル』8月号
- 喜田川清香編 1959 「日光男体山-山頂遺跡発掘調査報告書」角川書店
- 工藤清泰 2000 「浪岡町の古代遺跡」『浪岡町史』第1巻
- 工藤清泰 2003 「浪岡地域における古代・中世の歴史景観」「遺跡と景観」高志書院
- 工藤清泰 2005 「津軽平野の様相」古代城柵官衙遺跡検討会
- 越田賢一郎 1997 「北海道・東北北部」『国立歴史民族博物館研究報告』第71集
- 齋藤 淳 2001 「津軽海峡領域における古代土器の変遷について」『青森大学考古学研究所研究紀要』第4号
- 齋藤 淳 2010 「野尻遺跡群の土器編年について」『研究紀要』第15号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 櫻田 隆 1997 「底面に砂粒を付着させる土師器とその分布範囲について」『蝦夷・律令国家・日本海-シンボジウムⅡ・資料集』
- 佐藤智生 2000 「第VII章第3節 第319号住居跡の検討」『野尻(1)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第277集
- 新山隆男 2009 「第3編第2章第2節古代（平安時代）の遺物」「新田(1)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第472集
- 早川由起夫・小山真人 1998 「日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日－十和田湖と白頭山」『火山』第43巻第5号 日本火山学会
- 藤原弘明 2007 「五所川原産須恵器の編年と年代観」第2回北日本須恵器生産・流通研究会資料集
- 三浦圭介 1993 「北日本における律令期の土器様相」古代城柵官衙遺跡検討会
- 三浦圭介 1995 「古代」『弘前市史 資料編I（考古編）』
- 三浦圭介 2006 「第4章北日本古代の集落・生産・流通」『日本海域歴史大系第二卷古代編II』清文堂

青森県内における平安時代(9世紀以降)の非ロクロ成形坏 観察表

器 番 号	地 名	出 土 地 点	層 位	火 山 灰	类 型			計測値 (cm)			報 告 書			直 面	備 考	類型	
					上 部 表 面	中 部 表 面	下 部 表 面	口 径	底 径	高 度	シリ ーズ 名	作 行 年	保 留 年 代	報告 年 代			
4-1	新田(2)	第13号墓跡	堆積土上 堆積土下	×	○把手付	○	痕文・羽口・木製品(漆器)	15.9	5.0	5.5	青森県471集	2109	161-1	103後	編物痕	外山ケズリなし	
4-2								32.0	4.4	4.5			167-6	103後	ケメリ	外山剥離	
4-3	野尻(2)Ⅲ	第51号墳跡	未定	○	○	○	土糞・土器品	14.4	3.9	5.5	青森県271集	2109	164-12	95末~10 0初	ケメリはランダム		
4-4			7層					16.3	7.0	4.5			78-13	95初	一	ケメリはランダム	
4-5	野尻(3)	第5号墳跡	覆土	×	○	×		15.8	3.0	6.5	青森県186集	1994	81-10	103後	鰐代痕	ロクロ成形?	
4-6	野尻(3)	B-2号溝跡	覆土	×	○	○		12.2	4.5	5.5	青森県259集	2103	45-110	103後	弦縫痕	被削により還元	
4-7		B-8号溝跡	覆土	×	○	○		12.8	3.0	4.1			73-17	103後			
4-8			覆土下					12.0	4.4	3.4			58-51	103後			
4-9			覆土					30.1	4.0	4.0			58-50	103後			
4-10	宮元(2)	XI-13号溝跡	覆土上	×	○	○		12.8	3.0	5.5	青森県380集	2104	56-45	木葉痕			
4-11			覆土上					18.8	3.4	4.5			56-48	103後			
4-12			覆土					18.8	4.0	5.1			56-46	103後			
4-13			覆土	×	○	○	羽口	32.8	5.5	5.4			77-1	103後	外山ヘラテテラ		
4-14	宮元		II-2号溝跡	覆土	×	○		12.0	4.3	3.4							
4-15			覆土下					30.1	4.0	4.0							
4-16			覆土					12.8	3.0	5.5	青森県380集	2104	56-45	木葉痕			
4-17			覆土					18.8	3.4	4.5			56-48	103後			
4-18			覆土	×	○	○	羽口	32.8	5.5	5.4			77-1	103後	外山ヘラテテラ		
4-19			II-13号溝跡	覆土	×	○		12.0	4.3	3.4							
4-20			II-13号溝跡	覆土	×	○		30.1	4.0	4.0							
4-21			II-13号溝跡	覆土	×	○		12.8	3.0	5.5	青森県380集	2104	56-45	木葉痕			
4-22			II-13号溝跡	覆土	×	○		18.8	3.4	4.5			56-48	103後			
4-23			II-13号溝跡	覆土	×	○		18.8	3.4	4.5	青森県380集	2104	56-45	木葉痕			
4-24			II-13号溝跡	覆土	×	○		12.0	4.3	3.4	青森県471集	2109	164-20	ケメリ	19・24幕は脚接		
4-25			II-13号溝跡	覆土	×	○		18.8	3.4	4.5	青森県380集	2104	56-48	103後			
4-26	野尻(2)	第4号墳跡外周	上覆土	○	○	○		11.0	5.4	4.5	青森県186集	1995	71-9	103後	ヘラナア	外山ヘラテテラ?	
4-27	宮元	B区第54号土坑	未定	×	○	×	羽口	12.0	4.3	5.5	青森県219集	1987	220-23	103後	木葉痕	木葉痕	
4-28	野尻(2)	第45号墳穴住居跡	覆土	×	○	○		12.0	4.3	5.5	青森県219集	1985	80-1	103後	木葉痕	木葉痕	
4-29	新田(3)	第13号墓跡	未定	×	○	○	羽口・土器・木製品	18.8	5.5	5.4	青森県438集	2101	210-2	103後	ヘラナア	ココナアなし?	
4-30			II-13号墓跡	覆土上	×	○	○	11.4	5.1	5.5	青森県473集	2109	83-164	103後	ヘラナア	ココナアなし?	
4-31			II-13号墓跡	覆土上	×	○	○	12.8	5.3	4.5			167-5	103後	ナア?	19・24幕は脚接	
4-32			II-13号墓跡	覆土上	×	○	○	18.8	5.3	4.5	青森県471集	2109	164-20	ケメリ	19・24幕は脚接		
4-33			II-13号墓跡	覆土下	×	○	○	9.5	3.2	3.5			164-14	103後			
4-34	野尻(2)	第4号墳跡外周	上覆土	○	○	○		11.0	5.4	4.5	青森県186集	1995	71-9	103後	ヘラナア	外山ヘラテテラ?	
4-35	宮元(2)	B-24号住居跡	覆土	×	○	○		11.4	5.1	5.5	青森県219集	1987	159-1	103後	木葉痕	木葉痕	
4-36	五輪野	B区第24号住居跡	覆土	×	○	○		11.4	5.3	5.5	青森県219集	1987	154-1	103後	木葉痕	木葉痕	
4-37			B区第24号住居跡	覆土	×	○		11.4	5.3	5.5	青森県219集	1987	154-1	103後	木葉痕	木葉痕	
4-38			B区第24号住居跡	覆土	×	○		11.4	5.3	5.5	青森県219集	1987	154-1	103後	木葉痕	木葉痕	
4-39			B区第24号住居跡	覆土	×	○		11.4	5.3	5.5	青森県219集	1987	154-1	103後	木葉痕	木葉痕	
4-40			B区第24号住居跡	覆土	×	○		11.4	5.3	5.5	青森県219集	1987	154-1	103後	木葉痕	木葉痕	
4-41			B区第24号住居跡	覆土	×	○		11.4	5.3	5.5	青森県219集	1987	154-1	103後	木葉痕	木葉痕	
4-42			B区第24号住居跡	覆土	×	○		11.4	5.3	5.5	青森県219集	1987	154-1	103後	木葉痕	木葉痕	
4-43			B区第24号住居跡	覆土	×	○		11.4	5.3	5.5	青森県219集	1987	154-1	103後	木葉痕	木葉痕	
4-44			B区第24号住居跡	覆土	×	○		11.4	5.3	5.5	青森県219集	1987	154-1	103後	木葉痕	木葉痕	
4-45	三内	H-12号六住脚跡	覆土	○	○	○		11.5	3.1	6.2	青森県357集	1978	94-12	100中?	砂質		
4-46		H-12号六住脚跡	未定	○	○	○		12.7	3.4	6.1	青森県357集	1978	94-12	100中?	平滑	外山ヘラテテラ?	
4-47	新田(2)	H-12号六住脚跡	覆土	○	○	○		12.4	3.0	7.8	青森県375集	2101	69-103	103後	砂質	ココナア?	
4-48		H-12号六住脚跡	覆土	○	○	○		12.7	3.0	7.5	青森県375集	2101	69-104	103後	砂質	ココナア?	
4-49	野尻(2)	H-12号六住脚跡	覆土	○	○	○		11.8	3.2	6.3	青森県438集	2101	21-9	103後	砂質	外山ヘラテテラ?	
4-50		H-12号六住脚跡	覆土	○	○	○		12.0	4.8	5.5	青森県438集	2101	56-47	103後	砂質		
4-51	宮元(2)	XI-17号溝跡	覆土	○	○	○		12.2	5.4	5.5	青森県380集	2104	84-94	103後	砂質		
4-52		XI-17号溝跡	遺跡複数面	-	-	-		12.6	5.5	5.5			65-159	103後	砂質、ヘラナア		
4-53	五輪野	XI-17号溝跡	-	-	-	-		12.0	5.0	5.4	青森県319集	1997	92-24	103後	砂質		
4-54	新田(2)	第3号住居跡	カマド	○	○	○	羽口	14.2	5.2	6.5	青森県438集	2101	86-15	103後	砂質	外山エビオタケ?	
4-55	三内	H-12号六住脚跡	壁構上	○	○	○		11.2	3.9	6.2	青森県273集	1978	93-2	100中?	木葉痕	外山ヘラテテラ?	
4-56	野尻(2)	第25号墓跡	-	-	○	支脚		13.2	5.2	6.5	青森県156集	1994	154-48	103後	木葉痕		
4-57	新田(2)	H-12号六住脚跡	カマド	○	○	○		12.0	4.2	5.5	青森県272集	2001	69-102	103後	ヘラナア	ココナアなし?	
4-58		H-12号六住脚跡	覆土	○	○	○		10.6	3.5	5.5	波岡町10集	2004	164-1	103後	ヘラナア	外山ヘラテテラ?	
4-59	野尻(2)	H-12号六住脚跡	覆土下	○	○	○		12.0	3.0	6.0	波岡町10集	2004	164-3	103後	ヘラナア	外山ヘラテテラ?	
4-60		H-12号六住脚跡	1層	○	○	○		10.8	3.1	5.5	青森県186集	1995	58-1	300中?	ヘラナア	外山ヘラテテラ?	
4-61	野尻(2)	H-12号六住脚跡	波林穴	○	○	○		11.8	3.5	5.5	青森県186集	1995	117-2	300中?	鰐代痕	ロクロ成形?	
4-62		H-12号六住脚跡	波林穴	○	○	○		11.2	3.5	5.5	青森県438集	1998	19-4	103後	砂質	ココナアなし?	
4-63	高部郡船	北濠	-	-	-	-		12.0	4.4	5.5	青森県173集	1995	60-18	103後	鰐代痕	外山エビオタケ?	
4-64	宮元	H-35号溝跡	覆土	○	○	○		12.0	5.0	5.5	青森県356集	2001	87-95	103後	砂質	灯明具?	
4-65	三内	H-35号溝跡	表構	-	-	-		11.7	5.1	5.5			51-187	103後	砂質	灯明具?	
4-66	水木館	H-335(E)号溝跡	覆土	○	○	○	木製品	11.4	3.4	5.5	青森県173集	1995	128-1	103後	鰐代痕	外山エビオタケ?	
4-67	新田	H-2次南丘塗構外	土	-	-	-		12.0	3.5	5.5	青森県472集	2109	164-1	103後	鰐代痕	外山ヘラテテラ?	
4-68		H-2次南丘塗構外	二	-	○	政策壁	木製品	13.0	5.2	6.4			164-1	103後	木葉痕	外山剥離?	
4-69	五輪野	B区第33号住居跡	二	-	○	○		10.6	4.8	5.7	青森県219集	1997	160-2	103後	木葉痕	木葉痕?	
4-70		B区第33号住居跡	二	-	○	○		11.0	5.4	6.5			219-10	103後	木葉痕	外山輪縫痕	
4-71	新田(2)	第22号土坑	覆土	○	○	○		12.0	5.5	6.0	青森県12集	1995	134-1	103後	砂質		
4-72		第22号土坑	覆土	-	-	-		11.0	5.0	6.5			136-2	103後	砂質		
4-73	新田(2)	第5・7号墓跡	15-17層	×	○	○	土器品	12.8	4.2	7.5	青森県380集	2105	58-30	103後	砂質	-	

*「土頭

遺跡から出土するオシラ神類似の木偶

大湯 卓二（青森県埋蔵文化財調査センター）

1. はじめに

東北地方特有の民俗神とされるオシラ神は、オシラサマ、オヒラサマ、シラガミサマ、十六善神、カシノキジンジョ、オシラ仏、ペロベロノカギ、カバカワボトケ、オコナイサマ、オクナイサマ、オシンメイサマなど地域によって異なる呼称を有し、柔や竹などの材質の違いもあるが、長さ三〇cm前後の棒状の神体で、上からオセンダクと呼ぶ布切れが被せられ、手に持つて回すことができる男女一対の木偶である。

本稿は、信仰伝承を主な資料とするオシラ神研究のなかで「モノの視点」からオシラ神に接近し、「遺跡から出土するオシラ神」とその周辺について報告するものである。

2. 形態論的視点から見たオシラ神研究略史

オシラ神の論文は、明治27年、遠野出身の人類学者伊能嘉矩が「奥州地方に於いて尊信せらるゝオシラ神に就きて」（『東京人類学雑誌』第9卷98号）が初出とされる。

伊能は、オシラ神についてアイヌ民族の信仰が蝦夷に残された遺風と推論したのであるが、考古上注目すべき点は、彼が図示した第一図から第三図に至る形態上の変化（第1図）を三段階に分類し、素朴な木片の神体から目、鼻、口を表現した具象的神体への発達、そして鳥帽子、髪を描くまでの人面の変化を文化的影響という段階に沿って進化したものと類推したことにある。

その3年後、姉崎正治の「論説 中奥の民間信仰」（『哲学雑誌』第12卷第130号 1897）には、オシラ神の収納されていた箱から「阿遮羅神」の神札を発見し、眼前の共伴事実からオシラ神信仰の起源を不動明王の変容と解釈した。姉崎による仏教から変容したとするオシラ神の認識はおそらく事実と反するであろう。

初期の2人の論文には、モノつまり形態の類似やオシラ神との共伴関係の事象からオシラ神の起源を考える材料の一つとしたことがある。

昭和3年、喜田貞吉は「オシラ神に関する二、三の憶測」（上）、（下）（『東北文化研究』第1卷第2号、第1卷3号）、翌年（昭和4年）の「オシラ神の形態に関する憶説」（第2卷3号）のなかで「今此のオシラ神に対する行事を見るに、毎年イタコを請して新しくオセンダクをお着せ申し、それがあまりに数多くなれば古きを除くというところ、まったく同一の意義において行われるものと考えられる。アイヌのイナオの一種なるチセイコロカムイにしても、毎年新しくイナオを加え、数重なれば古きを除くというところ、また同一の意義のものと考えられる」と説明している。

喜田は、アイヌの宅神とオシラ神の習俗とを関連させ、オシラ神はアイヌの宅神（チセイコロカムイ・第2図）を起源とするものと類推し、イナオをオシラ神に着せる布切れ（オセンダク）であると考えた。

喜田が、このような解釈するに至ったのは、アイヌのチセイコロカムイとオシラ神の形態の類似と家の神であるという共通性、またイナオとオセンダク（布切れ）が共に神体に付着させるという習俗

から推論したのである。

形態の類似が、有力な起源を明らかにする材料として利用され、その延長上にオシラ神の本質を見抜く手法は考古学の型式学的方法とよく似ている。

喜田の「オシラ神の形態に関する憶測」を掲載した同誌上には、山本鹿洲による「白神資料聚記」(第二卷第三号)が発表され、岩手県上閉伊郡甲子村、釜石、鶴住地域を中心としたオシラ神信仰の実態調査がある。山本の調査の特徴は、聞き書きと共に形態的特徴を絵(スケッチ)に描き、さらに「立体白神像表」の分類にある。表の記載には、オシラ神の頭部を鳥帽子、頭巾、女体、円頭、ビリケン、長頭、ホティ、馬頭、顔隠、人象の種目に分け、地域ごとの所有数を集計している。しかし、半神像、ホティ(布袋)という神体は、棒状の形状を特徴とするオシラ神とは、形態においてまったく異なる系譜にあるが、オシラ神信仰の一類型として忠実に報告している。また、顔隠の表記は、今日のオシラ神の形態分類である包頭型オシラ神を示すものであろう。さらに、絵像として用いているオシラ神も一覧表に纏められ、阿弥陀如来、観音、太子十六歳像、青面金剛(庚申)、不動尊、三宝荒神、太子馬上象、オコナイ、俗体に細別している。

これらの資料からの暗示は、オシラ神と称する画像が仏教や聖德太子信仰そしてマイリノホトケ信仰とオシラ信仰が混淆し、シンクレティズム化していることが読み取れる。

山本は、昭和5年同誌『東北文化研究』第2卷第1号「オシラサマの研究(上)」のオシラサマの起源について、喜田のアイヌのイナオ説を否定し、顔隠つまり包頭型のオシラ神を古態とし、神社において使用する小麻幣のように多く其頭部を唐傘の頭を包んだ梵天幣というものがオシラ神の原型であると推論した。

オシラ神研究者の一人である佐々木喜善は、『遠野物語』の語り部として知られているが「おしら神異聞」(『土俗と伝説』第1卷第1号 1918)で興味ある見解を提示する。

「オシラ神は、狩人(マタギ)の尊拝する神で、マタギの秘密道具の一つにオシラサマがある。おしらさまを手に持っておがむべし、其の向きたる方角に必ずえものありという口伝があるという。また、遠野の土淵村ではおしらさまを鉤仮(かぎほとけ)と云っている。正月十六日のおしら遊びの日に、年中の吉凶善惡を占う。丁度子どものペロペロのかぎの様にして行ふ。」そして「私は按するに、この鉤仮(馬面の形は恰も鉤形也)というのは非常におもしろい発見だと思います。」と述べている。

佐々木のオシラ神を鉤仮といい、その形態が馬の顔部を鉤形のように作る点を強調し、棒の部分を手で回して占いとして用いる民間習俗との関連性を紹介し、形態から見た機能と習俗とを適合させてオシラ神の原初的機能を考えたのである。

金田一京助は、「蝦夷とシラ神」(『民俗』1/1 1929)のなかでアイヌ起源論について、現在アイヌにはこのような信仰がないことを指摘し否定的な見解を示した。

一方、金田一は、昭和8年「オシラ様考—馬鳴像から馬頭娘及び御ひらさまへー」(民俗学5-11)を「関東のオシラ様」のタイトルで執筆し、オシラ神の成立について、異なる視点から論述している。

内容は、養蚕神とされるオシラ神を関東の蚕神の図像三、四十幅から比較、解析し、「馬鳴菩薩」がオシラ神の系譜にあること、そして図像から馬鳴菩薩の変化の過程や伝播の系統性について論じた。

だが、金田一の科学的な図像分析による考察であったが、そもそもオシラ神は絵像ではなく木偶であるのが特徴で、さらにオシラ神は東北地方では必ずしも蚕神と見なされていない点など、オシラ神

信仰の形態と性格に大きな食い違いが見られる。金田一の筆者の関心は、馬鳴菩薩とオシラ神の考察にあるのではなく、金田一が図像分析を対象とした絵像の変化から系譜を実証した研究方法にある。

民具の視点からオシラ神の解明を試みたのが、渋沢敬三等による『おしらさま図録』(日本常民文化研究所編 1943)である。

図録は主に岩手県から収集した40体のオシラ神を精査し、包頭形、貫頭形、顔の形態を馬頭、僧形、男神、女神、芯木の材料、オシラ神に着せられた染料の分類と衣類の変化、オシラ神に墨書きされた記録等、オシラ神の神体から解剖し、付随する情報を総合的に調査したのである。

しかし、オシラ神の本質的な考察を加えて来たのが、柳田国男である。柳田は昭和3年1月「人形舞はし難考」(文藝春秋六巻九号)、同年4月「オシラ神の話」(文藝春秋六巻九号)、昭和4年「人形とオシラ神」(民俗芸術二巻四号)、昭和6年「鉤占から児童遊戯へ」(民俗芸術4巻4号)そして昭和26年、これまでの論考を整理し「大白神考」としてまとめ、その「おしら神と執り物」のなかで「オシラ神は古くは家の祭りを行う際、女性である祭主が神靈を迎えるための執り物つまり二本の木の用具に他ならない」と解説した。柳田は、すでに昭和4年の「人形とオシラ神」のなかで喜田貞吉の唱えるアイヌ起源論を否定し、オシラ神は日本固有の信仰と考えた。

柳田以後のオシラ神研究は、東北大学石津照壁を中心として昭和26年～31年に渡り東北地方の各県のオシラサマ信仰の調査を実施し、その報告が『東北文化研究室紀要』第3集(1961)にまとめられる。その調査を敷衍させた東北大学の楠政弘は、青森県下北地方全域のオシラ神の悉皆調査を試み、その成果を『下北の宗教』(1968)として刊行する。しかし 楠のオシラ神調査は、実態を通しての信仰現象の分析を重視し、従来の起源論に固執したものではなかった。

また、昭和40年、岩手県教育委員会社会教育課による先見的なオシラ神調査は、県域を対象として名称、数、材質、形式(貫頭型、包頭型、馬頭、円頭)、祭祀の方法など11の調査項目を設定し、各市町村の調査員から調査票を収集した。昭和50年代には岩手県立博物館がオシラ神調査を断続的に実施し、県域のデータを収集する。そのような一連の調査の成果は『いわてオシラサマ探訪』(岩手県立博物館 2008)として近年刊行され、県域のオシラ神のデータが余すことなくまとめられている。

楠以後のオシラ神の調査は、各市町村による悉皆的な立場で資料の収集を行う方向となり、特に、オシラ神の信仰伝承のデータは基より写真の掲載及び数量、寸法、材質、形式、分布が採集項目として取り入れられるようになる。

昭和47年三崎一夫は宮城県北部沿岸地方を中心に悉皆調査を実施し『図録陸前のオシラサマ』(1972)を刊行する。内容は、分布、呼称、オシラサマの形態(形態・大きさ・材料・着物・記銘・掛軸・箱の中の収納物)、祭日、祭祀集団、供物、オシラサマアソバセ、由来・靈験譚、オシラサマに類似する信仰、巫女とオシラサマ、オシラサマの家ごとの事例そして最後に附録として昭和47年までの詳細な文献目録(夏掘謙二郎編集)を載せている。

三崎の『図録陸前のオシラサマ』は完璧なほど必要なデータ(74件)を漏らさず分析された総合的な研究報告である点に驚かされる。なかでも一点ずつ写真を掲載しているのも重要である。

このような地域の悉皆調査の実施に伴い『いちのへのオシラサマ』(一戸町教育委員会 1986)、『軽米町のおしらさま』(軽米町教育委員会 1988)、『陸前高田のオシラサマ』(陸前高田博物館 1990)など、オシラ神の地域の報告が次々と刊行され、青森県では昭和55年・平成3年の2度の調査による十和田

市域を対象とした『おしらさま一総集編一』(十和田市教育委員会・十和田市文化財保護協会 1991)が刊行し、地域の信仰実態と形態的特徴をまとめ、さらに、『十和田湖町史』(2004)では十和田市地域の周縁としてのオシラ神の実態を報告している。

しかし、オシラ神信仰研究が地域の個別のデータを総合的に分析し、資料として扱う傾向にあるなか、形態論から提供される情報は十分に生かされなかった。その背景には、オシラ神信仰が現在もなお生きており、所有者の眼前でオシラ神の包衣をはぎ取り神体を覗く調査に難しさがあった。もう一つには、東北全体を通しての形態変化を比較検討するという方法がとられず、地方的な特色だけで論じることが多かったため、系統的な系譜や分類が展開しなかった。

最近、『津軽車力 高山稻荷神社の民間信仰品』(弘前大学人文学部文化財論ゼミナール 2004)を表題にもつ報告書が刊行された。内容は津軽地方の高山稻荷神社に納められた棟札・社・神仏像・鏡・銭・木札・神棚を物質文化の視点から写真、実測図によってまとめたものである。資料には10体のオシラ神の神体が掲載され、編集者の関根達人は「オシラサマ研究の新視点と方法」と題し「今後オシラサマ研究を進める為には、ご神体そのものの型式編年の整備と、オセンダクの分析が重要になろう。異形のものも含め、多様性があきらかになりつつあるオシラサマのご神体を類型化し、紀年銘資料を指標として、その型式変化を明らかにする」ということを提言している。

考古学における型式論が、オシラ神研究の進展上、大きな可能性を有し、時間軸のなかでの変化の視点をどう捉え直すかという問題は再検討していく必要性がある。

特に、東北地方におけるオシラ神の形態論を地方的な特色だけに目を向けず、東北全体的の細やかな比較から体系化し、オシラ神の製作年代と地域性を勘案した歴史的分析方法が今後の課題となろう。

3. 遺跡から出土するオシラ神類似の木偶の事例

遺跡のなかのオシラ神類似の木偶は、いわば使用年代がある程度特定出来、当時の歴史的環境のなかでの位置づけも可能となる。遺跡から出土するオシラ神類似の木偶がオシラ神と簡単に判別できるものではないという点も考慮されるが、今後の検討資料として以下の事例を報告する。

分析する資料は、7遺跡7点の木偶である。これまでオシラ神の神体を遺跡から紹介する例は少なかった。オシラ神の神体が木質であるということもあり、土中に残されることが難しいことがある。また、屋内で信仰対象とされた信仰民具であるから屋外で廃棄される現象も通常の状態とは考えにくい。ただ、オシラ神の話のなかに、家の者をあまり咎める神なので、眞の神か否かを質すためと称して川に捨てるという伝承を各地で聞くことが出来る。

遺跡から出土するオシラ神から想定されることは3点上げられる。1点は、遺跡のなかのオシラ神の使用年代とその時代のオシラ神の形態的特徴を知ることが出来る。2点は、遺跡の歴史的環境から類推してのオシラ神の性格である。3点はオシラ神の出土状況から読み取れる廃棄行為のなかの心意である。

以上の観点から報告するが、7点の木偶は、本来一对であるはずのオシラ神であるが、遺跡からはすべて1体だけの出土である。

- (1) 福島県桑折町「土井ノ内遺跡」出土の棒状の人形（おしんめい様）（『桑折町埋蔵文化財報告書10』桑折町教育委員会 1993）（第3図）

井戸から出土した木偶は、長さ16.7cm、最大径1.3cmの棒状である。頭部の上は折り鳥帽子、そして目鼻口を彫り込んで描き、墨を入れている。本体は面取り状に削られており、出土時には、下部に竹筒がソケット状に装着されていたことから、本体部分は竹筒に入っていた可能性が高いと報告している。

土井ノ内遺跡は、鎌倉時代後半頃から南北朝期、室町時代中頃にかけての遺跡で天然の地形を利用した建物跡を構築している。

歴史的には、Ⅰ期からⅢ期の三段階に推移している。

Ⅰ期（13世紀中葉から後半）では、建物跡が少なく屋敷と呼べるほどではない。

Ⅱ期（14世紀前半から中葉頃）では、主屋の規模拡大と、母屋周辺に隸属身分者が居住したと思われる小規模建物跡が出現する。

Ⅲ期（14世紀後半から15世紀中頃）では、主屋や副屋の規模が前段階より拡大し、建物配置も整ってくる。この段階から主体部を掘を隔て、小規模建物群が形成され、屋敷主体部からの隸属身分との隔離を図ったとし、最終期には主体部副屋の拡散と規模縮小化が認められる。

遺跡の特質として、地形的に可耕地には限界があり、耕地を営むための水量の確保にも不利な環境とされるなかでの家産経営と段階的な小領主的な階層分化があったと見る。その家産経営の原動力の背景には、隸属的な階層者の使役によって成り立っていたと考察している。

オシラ神は、第Ⅲ段階（14世紀後半～15世紀中頃）のⅢ-1期の第3号井戸から出土した。従って、14世紀後半～15世紀中頃のものとされる。現存するオシラ神のなかでは最も古い年代を示している。

福島県の民間習俗としてのオシラ神について述べると、その呼称は、オシンメイサマ、オヒメサマと呼ばれ、県内全域に分布する。神体の形状は、長さ20cm～30cmほどの木又は竹を材料とする棒状のもので、男神、女神をシンボライズし目、鼻を刻み顔を作り、細長い布切れを幾重にも括り着けているのが一般的である。包頭型もみられるが、多くは顔を露出する貫頭型である。

オシンメイサマの管理者は、シンメイミコと称する巫女の管理に属し、伊勢、白山、熊野などの種類があるとされるが、本質的差異は認められない。オシンメイサマは、歩き巫女により特定の家に伝えられ、祀られて家の神としての性格が見られる。また、神職の家に継承された例、信仰の熱心な家に譲り渡された例もある。オシンメイサマの機能としては、神棚において祀るだけでなく、オシンメイサマの祭日のはか家々を廻り、請われれば神を憑依させて占い、治療などを行う。（小澤弘道「オシンメイ様信仰」『東北のオシラ神信仰』第28回東北民俗学合同研究会レジュメ 2010）

土井ノ内遺跡出土のおしんめい様（オシラ神）が、どのような祭祀を見せていたか。上記のオシンメイサマ信仰から想像するよりほかないが、報告書の考察によれば隸属的存在のなかに同族的血縁者としての農民の存在を指摘しているので、同族的祭祀としてオシラ神を用いた可能性がある。また、修验者が持ち込んだ可能性もある。竹筒に入れ込んでのオシラ神を保管していたとすれば、収納というよりも背負って運ぶための竹筒であった可能性は考えられるであろう。遺跡からは他の宗教的遺物が確認されていない。

（2）福島県三春町「三春城下近世追手門前通遺跡群E地点」出土の木製人形（おしんめい様）（『三春町文化財調査報告書』第28号（三春町教育委員会 2003）（第4図）

オシラ神は、三春町城下町の三春城の郭内となる追手前地区と町人地（大町）を分ける堀跡周囲の

調査の際、堀跡と追手前側の土塁等整地層と町屋跡を分ける堀跡から出土した。出土層位はVIL区のIV層からの出土で、包含されている遺物は初期伊万里、中国産染付、瀬戸美濃の織部など17世紀中葉主体に17後半までの遺物が集中する。このことから、オシラ神（報告書ではオシンメイサマ）の使用時期を17世紀頃と判断し、この地区は、江戸中期以降の有力町人の屋敷跡と推定する。（平田禎文氏のご教示）

報告書の記載には、木製品の人形として表記しているが、備考にはおしんめい様としている。

木偶の長さ27.9cm、径1.85~2.2cmで、棒を丸く削り、上部に首、下部陽物風に削出し、中央がやや下曲がりとなり上・下部の向きがずれている。

オシラ神は、町人屋敷跡からの出土であるが、家の祭祀であったものか、修驗、巫女が所持し廃棄したものかどうかわからない。神体は、頭部の一部が破損し、包頭型か貫頭型は判断されにくいが、頭部を彫刻している点に注意される。木偶の形状下部には、一巡する刻みを入れているが、これが何を意味しているか不明である。青森県のオシラ神の神本の下端に横一又は二の刻みを有し、包衣を被せている包頭型の場合は男女の別、前後の区別をする事例は多いが、一巡することはない。また、下端を陽物状に作出する意図は何か。平川南は「道祖神信仰の源流—古代の祭祀と陽物形木製品から—」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第133号 2008）のなかで古代の男根状木製品が疫神、悪霊の防災の呪具として用いられたとしており、木偶にも同様の機能を付与していたのであろうか。オシラ神は男女一对を単位とするなら男性を表現したことになろう。

(3) 秋田市「東根小屋町遺跡」出土の木偶（『東根小屋町遺跡』秋田県教育委員会 2005）（第5図）

遺跡は、秋田市街地の中心部、久保田城跡の外堀から南側に位置し、江戸時代は城下町内（侍町）として町割された武家屋敷跡である。木偶は性格不明の遺構から出土している。

木偶の長さは下端部が折損しているが、現存する長さは18.85cmで、厚さ0.7cm~1.75cmである。形態は、棒状で頭部は目、鼻、口を彫り込んでいる。首部も彫り込んでいる。

木偶の長さは、下端が折損しているが実際は20cm~30cmほどであろう。径は2cm内外で手に持つのに都合がよい一般的なオシラ神の太さである。顔部は単なる棒状ではなく、顔を削作し、男女どちらかを意図したと思われるがその判断は難しい。形態と寸法からオシラ神と類似する。

(4) 北海道上ノ国町「上之国勝山館跡」出土の人形（『上ノ国町上之国勝山館跡XII』上ノ国町教育委員会 1991）（第6図）

勝山館は、15世紀末~16世紀末まで利用された巨大な館である。館の広さが3万平方メートルを有する二重空堀から構成され、侍屋敷と商工人を含んだ政治・軍事・北方交易としての巨大な館跡である。（国指定史跡）当遺跡から出土する遺物の量は膨大で15万点を超え、蝦夷交易・北はサハリンを含む日本海交易の拠点として繁栄した。

人形（木偶）は、勝山館の空堀から柱、柵、刺突具、鐵、矢柄、鞘、羽子板状木製品、曲物、折敷、漆椀、漆皿、下駄、木簡、しゃもし、駒、茶臼、砥石、埴輪などと共に出土した。

人形と分類している木偶は、長さ31.1cmの丸棒状で、径1.6~1.7cmで、下端は丸味をもっている。頭の頂部は突起状で墨を塗っている。顔は目、鼻、口を彫り込み、首の部分を細く彫り込み頭部と胸を区画している。棒状の首部及び胸部に当たる位置にはほぼ一巡する彫り込みを有し、其の下部は一段と細く削り込んでいる。

人形は、棒状の木偶で太さも手に持ちやすい大きさで民俗神としてのオシラ神と変わらない。ただ、首下及び胸部に一巡する彫り込みの意図はよく分からぬ。男女一対のオシラ神に対し、一体で出土する点は、土井ノ内遺跡と同じ状況にある。人形がオシラ神であるとすれば、2点の問題が指摘される。第1点は、北海道という異民族地域でのオシラ神の出現という問題、第2点として15世紀末～16世紀の製作とするなら年代が古過ぎる。民俗神であるオシラ神が、館内の居住地で用いられたとするなら、可能性として修検のような内地渡来の宗教者が祭具として持ち込んだ可能性は考えられる。和人中心の広大な館のなかにアイヌ民族も居住していたらしいが、アイヌ民族の製作物とすることも考えにくい。宗教遺物を否定することも可能であるが、形態からオシラ神と類似する木偶である。

(5) 岩手県平泉町「柳之御所遺跡」出土の木偶（『平泉遺跡群発掘調査報告書 柳之御所遺跡 第47・48号・49次発掘調査概報』 岩手県教育委員会 1988）（第7図）

世界遺産を目指している平泉町柳之御所の遺構群の発掘調査で出土した。木偶は、12世紀頃の土坑から出土した。木偶は、鳥帽子を被った人形で、長さが現存部6.5cmという小型である。下部が不明で、オシラ神と判断されるものではないが、オシラ神の関連資料として紹介する。

オシラ神と類似するすれば最古のものとなるが、鳥帽子を被っている型は、現存するオシラ神にも多く見いだせる要素で、しかも造りが厚さ1.8cmという点でもオシラ神一般の計測値に近い。ただ、棒状であったかどうかが問題で、首から下半分が欠落しており不明である。残存する首部下に貫通する横穴がみられることから、操り人形として用いた傀儡である可能性が高い。この時代の漂泊白芸人が持ち歩いたものであろうか。

(6) 青森県五所川原市「十三盛遺跡」出土の木偶（平成21年度青森県埋蔵文化財調査センターの発掘調査で出土。現在整理中である。）（写真1）

十三盛遺跡は、五所川原市の北部の岩木川と十川に挟まれた水田地帯に位置する平安時代の集落と接する溝跡から大量の木製品が出土した。木偶はそのながら出土したもので、形態は長さ13cmと短いが、太さは径2cmほどで、手に持ちやすい。頭部の頂点は三角形の尖りを見せ鳥帽子風で、目、鼻、口、眉を彫り込んで顔を現している。頭部下半から完全な棒状で材質はヒバである。

(7) 宮城県多賀城市「市川橋遺跡」出土の木偶（おしらさま）（『多賀城市文化財調査報告書』第75集 多賀城市教育委員会 2004）（第8図）

多賀城跡の南西部を流れる旧砂押川跡から出土した木偶である。顔は鳥帽子を被った男形で首下からは手に持ちやすい棒状である。長さは9.5cm、幅1.7cm、軸径1.1cmでやや短くて細い。胴部には薄く二の字のような彫りが見える。鳥帽子は墨で塗られたものであろうか。木偶は、おしらさまと思われるが、多賀城周辺では現在オシラ神信仰は聞かれない。また、旧河川跡からの出土で、川に捨てられたものであろうか。鳥帽子型である点は特徴の一つであるが製作年代は不明である。

4. 結びにかえて

遺跡から出土したオシラ神に類似する木偶は、7点と少ない。そのなかでオシラ神の系譜として判断されるのは事例(1)～(3)及び(7)の木偶で(1)福島県桑折町土井ノ内遺跡出土の棒状人形、(2)三春町三春城下追手門出土の木製人形、(3)秋田市東根小屋町遺跡出土の木偶、(7)多賀城市市川橋遺跡出土の木偶4点である。事例(4)上之国勝山館跡出土の木偶は、15世紀～16世紀末頃のオシラ神

に類似するが、事実とすると北海道では最古となる。

松前地方の事を著した『東海參譚』(著者不明 1805~1806)という書物には「桑の木の尺余なる男女2体のオシラ神を巫女が持って神を降ろして占いをする」という記事が見られる。(金田一京助「蝦夷とシラ神」)しかし、この頃は、勝山館出土の木偶の年代からすでに300年以上も後の和人中心の生活地域での記事である。上之国勝山館出土の木偶は、アイヌ民族の信仰民具でないとすれば、当時オシラ神の保持者は修驗のような宗教者が持ち込んだものとも考えられるが、少なくとも勝山館以後のオシラ神信仰がこの地で継承されて来たという事実は確認できないのである。

事例(5)・(6)は、時期が平安時代の木偶である。(5)については、形が棒状というよりも人形型で、鳥帽子を被ったように見える。首のあたりに貫通する横穴があり、胸部下半は見られないが、操り人形として用いたものであろうか。(6)は、顔がヘラ状で、そこに目鼻口をしっかりと刻んでいる。(5)・(6)は、平安時代の木偶であるが、オシラ神と判断するのは難しい。

オシラ神の形態的な視点からの問題は、オシラ神は本来棒状の神体に幾重にも重ねた包衣が着せられているのが特徴であるが、出土した木偶から布切れは残っていない。従って包頭型か貫頭型かは判断は難しい。ただ、貫頭型の場合は、顔を露出して馬・姫・男・女の形を辨えるのが一般的である。特に馬と姫の顔は、津軽、南部のイタコの祭文・「馬娘婚姻譚」のモチーフと関連する。「馬娘婚姻譚」の話は『遠野物語』のなかでよく知られ、その原書は1世紀の初め頃に中国の民間説話をまとめた「搜神記」(今野圓輔『馬娘婚姻譚』1966)という書物のなかにある。それが日本に伝播するなかで巫女の語るオシラ祭文に残された。オシラ神の神体が桑の木を選び、馬・姫の顔を辨えるのは、この話の由来譚から来ているとされる。

現存するオシラ神の製作方法は、刃物で彫り込んで顔を作る方法と墨で顔を描く場合とがある。一方、顔をまったく描かない唯一の棒状に加工し包衣を着せてオシラ神とする例も見られる。

問題は、出土したオシラ神類似の木偶のなかに馬の顔が素描されず、すべてが人頭型の出土である。そのなかで福島県土井ノ内遺跡出土の木偶は14世紀後半~15世紀中頃と推定され、現存するオシラ神のなかでは最も古くなる。つまり、南北朝時代から室町時代にかけてのオシラ神では、馬頭型は作られていないかったのであろうか。また、(1)・(7)のような鳥帽子風の人頭型の出土を考えると、事例(5)のような漂泊芸人が持ち歩く傀儡の系譜を想定することも強ち無謀ではないように思われる。想像として熊野修験のような宗教者が神仏の唱道の必要から伝統の傀儡人形と『搜神記』からの「馬娘婚姻譚」の話を取り入れ習合させ、オシラ神信仰を流布したとする考えも想定されるのではないか。土井ノ内遺跡のオシラ神は、筒の中に神体が挿入されていたらしいから宗教者が背負って持ち運んだ可能性を窺わせる。

実際、紀年銘のあるオシラ神を見ると、岩手県九戸郡種市町の大永5年(1525)の包頭型オシラ神は男女人頭型の形態である。天文10年(1541)の大船渡市の貫頭型のオシラ神の1体は馬頭である。

二戸市永禄9年(1566)の包頭型の1体は馬頭である。天正15年(1587)の陸前高田市のオシラ神は、鳥帽子頭1体と女が1体である。(工藤紳一『いわてオシラサマ探訪』岩手県立博物館 2008・遠野物語研究所『遠野物語96in遠野』講義録 1966)

「馬娘婚姻譚」の話の筋と関わる馬頭型のオシラ神の出現はいつの時代であるかという問題がある。

しかし、7遺跡から出土する7点の木偶は、すべて人頭型である。特に14世紀後半から15世紀中頃

の出土である土井ノ内遺跡のオシラ神の頭部は、人頭を削出し折り鳥帽子風の人頭型である。

柳田は「鳥帽子頭は最もおくれて馬頭から変化したもののように伝えられているが、果たしてそうであるか否かは、尚比較を重ねてからでないと断言し得ない」（『オシラ神の話』1991）としている。

土井ノ内遺跡出土が現在最古のものであるなら、人頭型のオシラ神が古くから存在したとなり、その後、馬頭型のオシラ神が製作するようになったとも類推される。また、「馬娘婚姻譚」の接合による馬頭を神体とするモチーフの誕生と鳥帽子状人頭型の異なる二系統のオシラ神が早期に成立していた可能性も考えられる。遺跡からの出土は1体のみであるからもう1体の頭部の形態が気になる。いずれにしても14世紀後半～15世紀中頃には、単なる棒状のオシラ神ではなく人頭部を描いたオシラ神が出現していた事実は形態の変化を探る一つの指標となろう。

秋田市東根小屋町遺跡における江戸期の武家屋敷跡から出土した木偶は、オシラ神と類似する。しかし、現況の秋田県のオシラ神信仰の分布は希薄である。それに反し、江戸時代の紀行家菅江真澄の『すすきの湯』（享和3年1803）では「大館市でイタコがオシラさまをほろいで、吉凶を占った」と記録しているし、『雪の出羽路』（文政2年1825）では「横手市大雄村の谷をひだてて交差している桑の木で男女のオシラさまを作る」ということが記されている。また、「鳥しら神という鳥型のオシラ神、馬しら神」についても述べ、秋田県大仙市太田野にも『月の出羽路』（文政11年1828）のなかで「姫頭、馬頭、鳥頭」のオシラ神があると記録する。

菅江真澄の記録のなかで特に注目するのは、異形の鳥オシラ神の存在である。鳥オシラ神については、天明6年（1786）『はしわの若葉続』（仮題）のなかで「気仙沼（現宮城県）でオシラ神とオシラさまを使う老女のことを見て、ここでは姫しらという女の頭、むましらという駒の頭、鳥しらには嘴がつけ、頭を綿で包みいろいろな絹を着せたオシラ神」を記録し、さらに寛政8年（1796）『すみかのやま』でも青森県大鰐町早瀬野で馬頭、鶴頭のオシラ神をスケッチしている。

柳田は「鶴頭のオシラ神は馬頭の場合と同じく、ただ漫然と思い付かれたものでなく、鶴・鳥に因んでの説話との関わり」を指摘している。（『大白神考』1951）

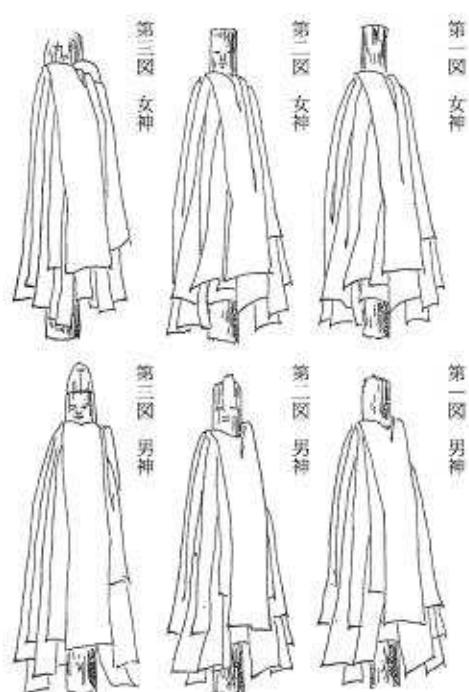
鳥型のオシラ神は、平成2年に刊行した『陸前高田のオシラサマ』（陸前高田市博物館 1990）にも報告があり、東北北半に分布が見える。古態のオシラ神の形態が人頭型そして馬頭型さらに真澄の報告する異形の鳥型も紛れて存在する。さらに特徴的なオシラ神には「合掌姿の僧形型のオシラ神」が青森県、岩手県に分布している。（大湯卓二『東北民俗学研究』第7号 2001・『遠野物語ゼミナール in 遠野』1996）

以上の特徴的なオシラ神の神体については、今後、分布とオシラ神の性格を探りながら、異なる形態を次々に誕生させて行くオシラ神信仰地域の歴史的背景を考慮して、分析する必要があろう。

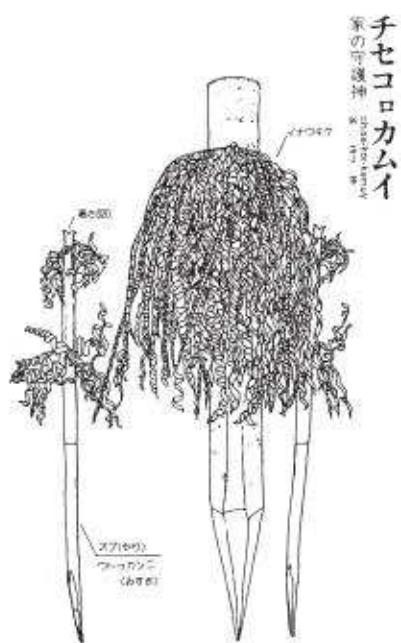
遺跡から出土するオシラ神類似の木偶は、出土年代が想定される新たな資料が期待されることから、古態から推移する神体変化を体系づけることも不可能ではない。

文書資料の乏しいオシラ神研究にとって、伝承資料の分析と共にモノの視点からの情報及び神体変化の系譜を整理することが、これから古くて新しい課題となろう。

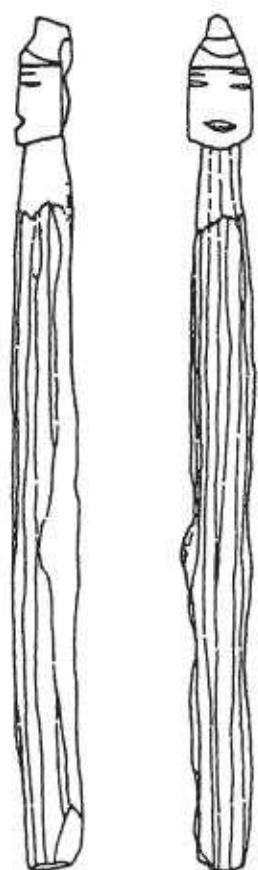
本稿を執筆にあたり、工藤紘一氏、関根達人氏、羽柴直人氏、平田祐文氏、車田敦氏、滝澤克彦氏、齊藤邦典氏、鈴木和子氏、佐藤智生氏からご教示と資料の提供をいただき厚く感謝申し上げます。



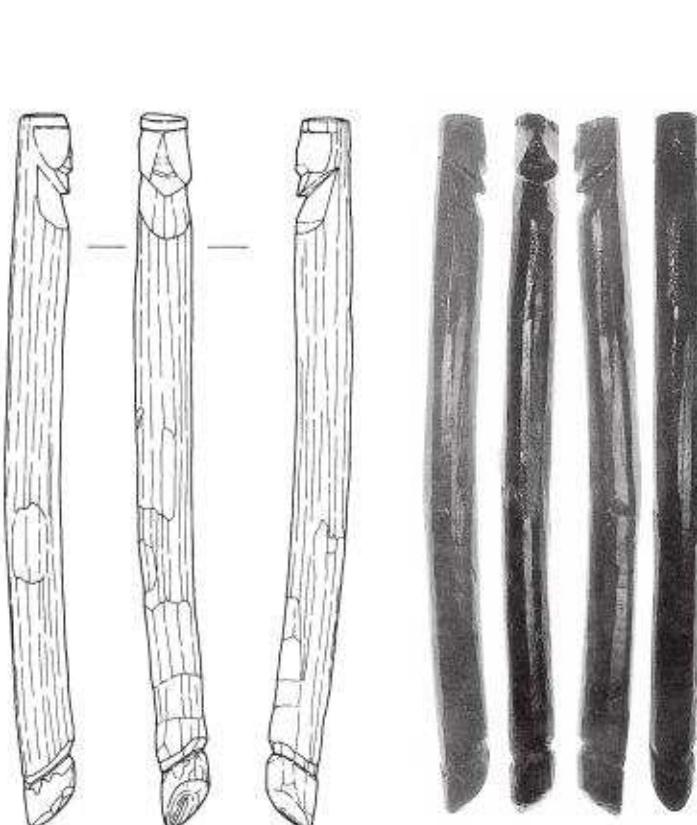
第1図 伊能嘉矩「奥州地方に於いて尊信さらるゝ
オシラ神に就きて」(1893)



第2図 萩野茂「アイヌの民具」(1978)



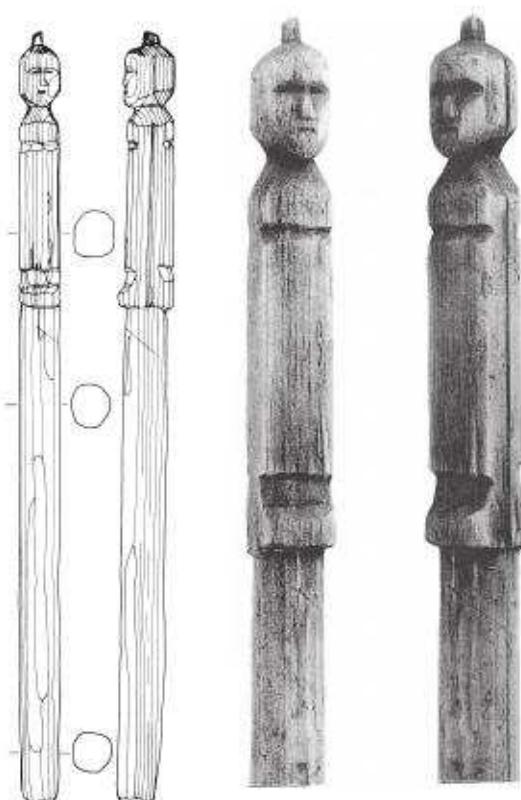
第3図 (1) 土井ノ内遺跡出土
の棒状人形



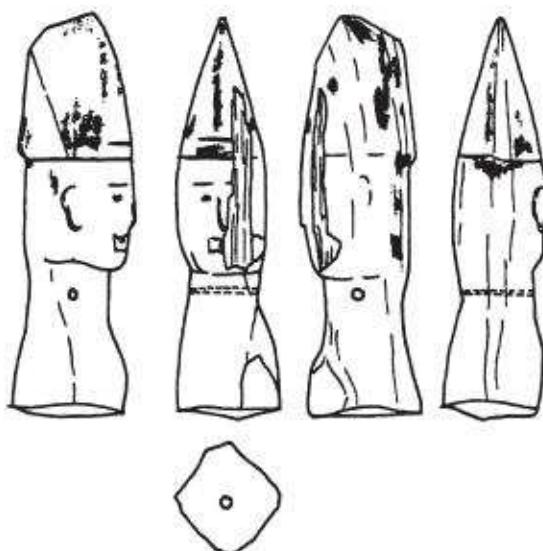
第4図 (2) 三春城下近世追手門前通遺跡群出土の木製人形



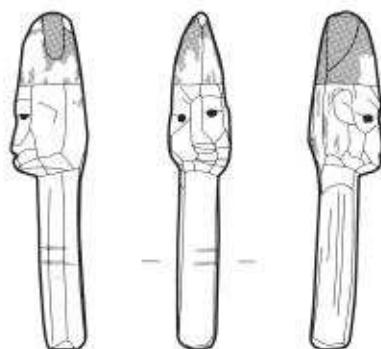
第5図 (3) 東根小屋町遺跡出土の木偶



第6図 (4) 上之国勝山館跡出土の人形



第7図 (5) 柳之御所遺跡出土の木偶



第8図 (7) 市川橋遺跡出土の木偶



写真1 (6) 五所川原市十三盛遺跡
出土の木偶



第9図 遺跡から出土のオシラ神類似の木偶の分布

青森県埋蔵文化財調査センター 研究紀要 第16号

発行年月日 2011年（平成23年）3月28日

発 行 者 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森市新城字天田内152-15
TEL (017) 788-5701 FAX (017) 788-5702

印 刷 所 株式会社 誠 工 社
〒030-0113 青森市第二問屋町三丁目3-18
TEL (017) 729-1611 FAX (017) 729-1188

BULLETIN
OF
CENTER FOR ARCHAEOLOGICAL RESEARCH
AOMORI PREFECTURE



No. 16

CONTENTS

Norio FURUYASHIKI

Analysis of Designs and Techniques of Stone Circles.

Takashi SAITO

A Study of History of Bipolar Technique and Pi  e esquill  es (Wedge-shaped Stone Tools).

Shigehiko NARITA

Types of Earthen Figures in Hokkaido and Northern Tohoku Region: From the Late to the Last Middle Jomon Period.

Takao NIYYAMA

A Study of Hand-built Haji Wares in Aomori Prefecture in the Heian Period.

Takuji OYU

Artifacts of Wooden Figures Similar to the Oshiragami God from Excavations.

研究紀要

第16号

研 究 紀 要
第 16 号

「環状列石」の設計とその技法について

古屋敷 則 雄（東北町教育委員会）

1 ~ 11

両極打法とピエス・エスキュ（楔形石器）についての研究史

齋藤 岳（青森県埋蔵文化財調査センター） 13 ~ 22

北海道・東北北部における土偶型式－縄文時代中期後葉～末葉－

成田 滋彦（青森県埋蔵文化財調査センター） 23 ~ 32

青森県内における平安時代の非クロ成形環について

新山 隆男（青森県埋蔵文化財調査センター） 33 ~ 44

遺跡から出土するオシラ神類似の木偶

大湯 卓二（青森県埋蔵文化財調査センター） 45 ~ 56

2011.3

March 2011
CENTER FOR ARCHAEOLOGICAL RESEARCH
AOMORI PREFECTURE

青森県埋蔵文化財調査センター

青森県埋蔵文化財調査センター